

二次元

カラーイラスト小説は「落書き陵辱」特集!

cover illustration by
あぶりだしざくろ

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

新連載小説

筑摩十幸
黒井弘騎

挿絵: マリキベリ
挿絵: KAGEMUSHA

カラーマンガ

武田あらのぶ

大人気えっちマンガ

超昂閃忍ハルカ

MISS BLACK

おおたけし / 琴慈
ハマちゃん / 144
ヤサカニ・アン

特別
付録



ピンナップポスター

ぼっしい

いるまかみり / あぶりだしざくろ



描き下ろし
ポスター付き!

Lusteriseの触手ゲーム
『触禍』小説化!

大好評連載小説

酒井仁×笹弘
空蟬×ぼっしい
栗栖ティナ×牡丹

読み切り小説3本立て

鷹羽シン×もふりる
高岡智空×niko
木森山水道×大月渉

DIGITAL EDITION vol.55 2010 **12**

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

立ち読み版

退魔の筆を操る筆狩師エリナ!

女体を貪る外道たちに
美貌の少女退魔師が挑む!!

イラスト：ケラファ

筆狩師エリナ

奴隷人形の学園

第一話 華麗なる筆狩師

イラスト：ケラファ

小説 NOVEL 筑摩十幸

挿絵 ILLUSTRATION こうきくう

27ページに、筑摩十幸の最新ゲーム情報掲載中!!

「うう、初めての現場……緊張しますう」
 籙木まどかはおどおどした足取りで砂浜を進んでいく。

「しかも……バラバラ殺人事件なんて……っ！」
 か細い肩をブルッと震わせるまどか。

身長一五〇センチ、体重三八キロの小柄な身体。ピットリと身体に貼りつくピンクの戦闘スーツの胸を押し上げる膨らみは控えめなAカップで、腰のくびれもほとんど目立たないという、見事なまでの女兒体型だ。同様にスーツで覆われた手足もか細く、逞しさとは無縁である。

栗色のショートカットは、まるで学校指定のような生真面目さで短くまとめられ、ややたれ目の二重はクリクリと小動物のように黒目を輝かせる。異性との接触などまったくくない唇には、リップクリームが薄く塗られている程度。

特殊スーツを着ていなければ、近所の子供と間違われてつまみ出されていただろう。もともと彼女の年齢を考えれば、年相応の愛らしい少女だ。

「だからこれはAAAの管轄だと申している！」
 「人形か人間の腕かもわからないのに、なぜそう言いされるんだ。もし人間なら当然警察の仕事だ」
 「警察の手に負える事件ではない！」

毎度のことだが上司の岬真二郎が地元の警察ともめる声が聞こえる。黄色いテープの向こう側から締め出しを食らった警察官や刑事たちが、もの凄い形相で睨んでいる。海岸で人の腕らしきモノが発見されたのが一時間前。通常なら警察の仕事なのだが、その腕には不審な点があるという岬司令の判断で、AAAの出勤となった。

「警察の人たちってどうしてあんなに怖くて、偉そうなんでしょう。その点司令はダンディで格好良く……はあ、憧れてしまいます」

まどかは両親を亡くし、AAAの孤児院で育てら

れた。ショックで固く閉ざした少女の心を開いてくれたのは岬司令であった。父親がわりと言ってよいほど世話になった司令の恩に応えようと、彼女は必死に訓練に励み、異例の若さで退魔捜査官として実戦投入されるまでに成長したのである。

「顔もいいですけど、声も洪くてカッコイイんですよえ。つと、とと……」
 よそ見をした瞬間、足が砂地にとられて絡まる。

「はれ？ あ、あああ……っ!!」
 少女は勢いよくダイブし、そのままベチャッと顔面から砂に突っ込んだ。

「おいおい、大丈夫か、あの娘」

桃色のスーツを食い込ませた可愛いお尻がピョコピョコ揺られて、警官からクスクスと嘲笑が漏れる。「彼女はAAAの特殊養成機関のエースです。何も心配いりません……」

「ひやあああ……っ！ カニが、カニがあつ！」
 突如悲鳴を上げて子猫のように一メートル近く垂直に飛び上がるまどか。ブンブン振り回す手の先には赤い大きなカニがぶら下がっている。

「なんだ、ありや。子供以下じゃないか」
 「AAAつてのはクラブ活動かなんかなのか」
 それを見て、警官たちがドッと爆笑した。

「か、籙木……」
 メンツを潰されガクツとうなだれる岬司令。他の隊員たちも頭を抱えている。基本的に優秀な少女だがあり症でメンタルの弱さが課題だ。

「我々警察にも調査させてもらおうぞ」
 「いや、まだ危険が去ったわけでは……」
 「かまわん、行くぞ」

黄テープを踏み越えて警官たちが砂浜を進む。「待ってください！ まだこないでください！」
 慌てて止めようとするまどかの背後で……。
 ピキィイッツッ！

「えっ!!」

何かが裂けるような、亀裂が走るような音。同時に耳がキンツと痛くなり、まどかは顔をしかめる。振り返ると青い空と白い雲が織りなす夏の風景が、まるでヒビ割れたガラス越しに見えるようにズレているではないか。

「な、なんだあれは……?」
 あり得ない現象を目の当たりにして警官隊は呆気にとられている。しかしそれとは対照的にAAAの隊員たちの身体に緊張が走った。

「く、空間断層です！ 伏せてくださいっ！」
 その声が届く前に、バリーイイインツと景色がガラスのように割れ砕け、空間に開いた穴から鋭い突風が吹き出した。

「さやあああ……っ！」
 咄嗟にしゃがみ込んだまどかの頭上を掠め、風は音速を超える速さでしなる！

キュアアアアンツ！ シュアツ！ パアアンツ！
 鼓膜をつんざく断続的な空気の破裂音。それは死を奏でる葬送曲の始まりだった。

「あああ？」
 テープを越えて侵入した警官の身体がグラツと傾き、足元にドッと重たいモノが転がり落ちる。それは切断された生首だった。

「うわあ……っ！」
 「何が起ったのかもわからずパニック状態の警官たちに、さらに疾風が襲いかかる。

「ぐわっ!!」
 「ぎやあああ……っ！」
 風が吹くたび、ある者は腕を、ある者は脚を斬り飛ばされ、またある者は頭を真つ二つに割られた。

まるで見えない刃で斬殺されているよう。カマイタチ現象に似ているがそれとは次元が違うし、当然人間技でもない。そんなことができる存在は一つしかない。

「刃々^{ハバキ}牙だっ！ 警官を守りつつ散開しろっ」

司令の声でA A隊員たちは我に返り、銃器を構えて反撃に移ろうとする。だが、突然隊員たちの足の砂地が波打ちドロドロの液体に変化したではないか。

「な、なんだこれは！」

ズブズブと身体が沈み、まるで底なし沼にはまったように身動きがとれなくなる。この状態で射撃しても同士討ちの危険性が高い。

「あ、ああ……これが……刃々^{ハバキ}牙」

砂地に突っ伏したまま惨劇を目の当たりにして、身体が震えが止まらない。刃々^{ハバキ}牙の脅威は知識としては頭に入っていたが、これほどとは。

幸いまだかのいるところは液化しておらず、何かしなければと思うのだけど、身体はすくみ上がり、頭もパニックで思考が回らない。強大な敵に対して何もできない、自分の非力さが悔しかった。

「ふん、口ほどにもないですね、A A A」

戦力をほぼ壊滅させたあと、空間の裂け目から白衣の男が姿を現す。まるで医者のような端正な顔面だが、縁なし眼鏡の奥の瞳は赤い血のような邪悪な光を浮かべている。

「それは返してもらいますよ」

サッと手を差し伸べると、旋風が砂を巻き上げ、切断された腕をさらった。

男の手に収まった腕はか細く華奢で、女性のモノと思われる。肌は妙に白っぽく生気が感じられず、まるで作り物のよう。

「くっ……待て。無抵抗な人間への攻撃は協約違反だぞ！」

声を絞り出す岬司令。だが、すでに胸の辺りまで沈んでおり呼吸もかなり苦しそうだ。

「私たちには自衛権がある。刃々^{ハバキ}牙の結界に許可なく侵入すれば、なにをされても文句は言えないはず」

「う……結界だと……？」

「そう、この人形の腕は私、斑^{マダメ}目ジンの所有物。そこから半径十メートルは結界と同じ意味を持ちます。それはあなた方もご存じだったでしょう」

平然と答える斑目の声を、まどかは震えながら聞いていた。

確かに刃々^{ハバキ}牙との休戦協定に相互不可侵の条約があり、その為にテープを張っていたのだが。

「これでも手加減したのですよ。全滅しなかっただけ、マシでしょう。フフフ」

「そ、そんな勝手な理屈ですっ！」

まどかは仰向けになりながら、銃を抜き放った。斑目の足元からわずか一メートル。外しようのない距離ではあったが。

「人の命を……はあつ、はあつ……なんだと思っっているんですか……っ」

ガクガクと腕が震えて狙いが定まらない。動悸が高まり、心臓が今にも爆発してしまいそうだ。

「う、動かないでください！ ぶ、武器を捨てて投降してください！」

勇ましい台詞だが、緊張で喉がカラカラ、声が掠れている。本当は怖くてたまらない。けれど、大切な命を簡単に奪う刃々^{ハバキ}牙への怒りがその華奢な身体を支えていた。眼鏡の奥のあどけない黒瞳に、普段の彼女からは想像もできないような怒りの炎が揺らめいている。

「おや、あの攻撃をかわしていたとは。お嬢ちゃん はなかなかよい素質をお持ちのようだ」

銃口を突きつけられても斑目は平然と薄笑いを浮かべている。その瞳はダイヤの原石を鑑定するよう

に、伶俐な中にもある種の昂奮を滲ませていた。

「よせ、鋼木！ 逃げろっ！」
敵には目に見えない恐ろしい攻撃がある。初出動の新米隊員が敵^{かた}う相手ではない。

「いいえっ！ ここはむしろ安全なんですっ！」

少女の言葉の意味がわからずA A隊員は訝しむ。だが一番表情が変わったのは斑目だった。

「こ、この人の攻撃は糸……目に見えないくらい細い糸なんです」

「ほほう、見えているのですか？」

「糸を鞭のようにしならせて斬りつける。だから懐に入ってしまったら、こつちが有利なんですっ！」

「おお。わずかな間にそこまで見切るとは……気に入りましたよ、お嬢ちゃん」

攻撃の秘密を暴かれても斑目は意に介さず、ニーツと薄い唇が淫猥に歪む。

「しかし安全装置がかかったままでは、銃は撃てませんよ」

「はえっ？ きゃあああああつ！」

斑目の言葉に惑わされた瞬間、身体がふわりと持ち上がる。一瞬にして全身に糸が絡みつき、自由を奪われていた。

「糸にはこういう使い方もあるのですよ」

「くるしい……はうう」

ギリギリと締めつけられて、ポロリと銃がこぼれ落ちる。

「少し味見をしておきましょうかね。ひよつとしたら掘り出し物かもしれません」

「う、ううっ……触らないでくださいっ」

スーツの上から糸が何本も巻きついて食い込み、スレンダーな身体は人工のくびれを無理矢理造られる。両手両脚をピンと引っ張られ、空中に磔にされてしまった。

「ふむ。感じますよ、強い力を」

「あ、あう……んむっ！」
強引に首をねじ曲げられ、唇を奪われてしまう。
（そんな……私の初めての……）
屈辱と嫌悪にゾクッと悪寒が走る。まったく血の

気を感じない水のように冷たい唇だった。しかも息遣いに血なまぐさい臭いを感じる。見た目は人間でも、中身は化物なのだと思つくと、ますます嫌悪感がつのり、背中に冷たい汗が噴き出す。

「ちくしょう！ 鎧木を放せっ！」

隊員たちは銃を構えるが、まどかの身体が盾になつて攻撃できない。泥砂から抜け出そうと足掻けば足掻くほど、身体は沈み込んでいく。頭まで沈めば当然窒息してしまふだろう。

「その地縛陣からは逃げられません。死にたくなかつたら大人しくそこで見ていなさい」

隊員たちを牽制しながら、薄い乳房を拗り上げるようにしてスーツ越しの手触りを堪能する。

まだ第二次性徴が始まったばかりの乳房は、脂肪がほとんどついていない。乳頭の周りだけがツツと盛り上がる思春期特有のロケット型の乳果だ。当然男の愛撫など知らない乳頭は、恐怖と緊張でツツと尖つてスーツの上からも位置が丸わかりだ。

「感度はよさそうですね」

糸がスーツの上から小豆ほどの乳首に巻きつき、ギリギリと引つ張り始める。

「あうっ！ お乳に……くうっ！ 触らないで……いたたいっ……あううっ」

ツツツと引かれるたび、乳首に糸が食い込んで痛みが走る。

「痛いだけではないはずですよ」

糸に指をかけ、弦を爪弾くようにピンピンと弾く。「はあっ……なに……あっ……なんですかこれは……ムズムズして……」

すると甘美なパルスが断続的に胸に突き刺さり、未知なるざわめきが肺腑を満たしてくる。

さらに斑目の手から無数の糸が伸び、それらが束ねられ幾本もの触手のようになった。黒い艶を持つ妖しげな触手は、蛭のように蠢きながらスーツの隙

間から侵入してくる。

クチュツ……ズズツ……ゲチュリツッ！

「ひっ！ いやですっ！ 入つて来ないでください！ やっ、いや、だめですっ！」

敏感な神経をちりばめた脇腹や背中に、触手から染み出た粘液が塗り込められる。もともと身体にフィットするスーツが、生温かい粘液でますます密着し、身体のラインをクッキリと浮かび上がらせた。「ほほう。その手の趣味の客にはうけそうな身体ですね」

「ああ、こんな……み、見ないでください」

汗と粘液で極薄レオタードのようになったスーツ越しに、処女の妖精ボディが透け見える。鎖骨の愛らしくぼみ、頂点だけを尖らせた可憐な乳房、肋が透ける柔らかそうな脇腹、くびれも少なくポッコリ膨らんだお腹、縦長の形のいいお臍、そしてコンもりと盛り上がった上手にまつすぐ走る純無垢なスリット。それらがすべて、手にとるように見えてしまふのだ。

「……鎧木っ」

少女趣味でなくとも男心を刺激する媚態に、隊員たちも思わず息を呑む。

「もつとサービスしてあげましょう」

「ああ、そこはやめてください……はひんっ！」

スーツの股間をギョツと片手に握りこまれ、細い紐状に変化したスーツがワレメに食い込んできた。

ほとんど剥き出しにされた股間に、陰毛は一本もない。剥き卵のようにシミ一つない肌、薄桃色の深いスリットが刻まれている。陰唇もクリトリスもその谷底にひっそり息づいている。

「あうんっ！ そんなエッチなことしないでください！ ああ……こんなに食い込んで……」

腰を前後左右に振つて、淫らな責めから逃れようとするのだが、そんな動きはますます股間責めの威

力を増幅させるだけだった。

「ああ……お股が……擦れて……はあああ、もうやめて……ひいつ、引つ張らないでください！」

ギョツギョツとスーツがしごかれるたび、生まれ初めて初めての感覚が恥骨を突き抜けてお腹の奥にまで突き刺さる。特に小さな肉豆をグリグリされるたび、腰が浮き上がるほどの強烈な刺激に襲われる。それは乳首の感覚と混ざりあい、過激な電流となつてまどかの幼い身体を駆け巡つた。

「はあ、はあ……いやん……も、もうやめてください……変になってしまいます……あああうん」

体温が急上昇し、肌という肌から汗が噴き出す女としては自然な反応でも、知識のないまどかには一大事だった。

（ああ、なんなんですか……このかんじ……）

自分の中で何か得体の知れないモノが動き出そうとしている。それが一体なんなのか。恐ろしいと思う反面、その正体を知りたいという気持ちもフツと湧き起こる。

「おや、もう濡れてきましたよ。まだアレも始まつてないでしょうに、随分感じやすい、おませな身体ですね」

「ええ？ 濡れるって……ど、どういふことですか……ああああん」

性に疎いまどかには「濡れる」という言葉の意味もよくわからないのだ。

「こういうことですよ」

下半身が持ち上げられ、まどかの身体はほぼ水平になる。その格好で大股開きさせられて、責められている股間が仲間たちの前にさらけ出された。

クチュツ……ゲチュツ……クチュクチュツッ！

股間スーツをさらに激しく上下させると、湿つた音が響きだした。さらにクロッチ部分には染みが広がりは始めている。

「ふあ、ああん……そんな……私、オシッコ漏らしちゃったの？ あはあうん……みんな見ないで……ああ……は、恥ずかしい」

「オシッコじゃありませんよ。女は気持ちよくなつて、ペニスに欲しくなると、ここからいやらしいお汁を分泌するのです」

初な少女に歪んだ性教育を施しながら、クイクイと紐と化したスーツを操って、少女をさらなる性の迷宮へと誘うのだ。

「はああ……んん……気持ちよくなんか……はあつ……ないです……あああ……いやなのに……恥ずかしいのに……あああんつ」

火のついた女体に年齢はあまり関係ないのか。愛らしい唇から漏れるのは、セクシーな牝声だ。

「おやおや。まだ毛も生えてない子供と思つていましたが、なかなかいい反応じゃないですか」

さらなる触手が左右から二本ずつツルツルのワレメに迫る。薄い花弁を左右に引つ張り、少女のすべてを剥き出しにしてしまう。

「いやああ！ やめてください……ああ……恥ずかしいですうっ！」

泣いて叫んでも遅かった。いかにも処女らしい、柔らかな光沢を持つサーモンピンクの粘膜が白日の下に晒される。パツクリ広がった媚粘膜は新鮮な果汁に濡れ、キラキラと輝いていた。縦一本に走る紐スーツによって中心部が幅一センチほど隠されている以外はすべて丸見えだ。

直接浴びる陽光の暑さや、火照つた粘膜をスウツと舐めていく海風の涼しさを感じれば、どれだけ破廉恥な格好をしているかがわかる。

「ああ……いやいや……見ないで……」

これまで他人に見られたことも触られたこともない聖域を暴露され、死にたいほどの恥ずかしさがこみ上げてきた。

「く……鋼木……」

普段部隊のマスケット的な存在で、妹や姪っ子感覚で可愛がっていた少女に、これほど女を意識させられるとは。予想を超える色気に圧倒され、百戦錬磨の隊員たちも、生唾を飲んで静まり返っている。

「実に美しい。ちよつと遊ぶだけのつもりでしたが、気が変わりましたよ」

斑目の切れ長の一重が鋭さを増し、口調が熱を帯びる。白衣の下のズボンには股間が大きく盛り上がっていた。

「もつと、身体の隅々まで調べてみたくなりましたよ。邪魔なモノを斬り捨てますかね」

爪が伸び、メスのような鋭さを見せて、股布に食い込む。

「ああっ！ だ、だめえっ！ それを切つてはだめですうっ！」

ライフルも弾く強化スーツがいつも簡単に切り裂かれていく。これを破られれば、もうガードするモノは何もなくなってしまう。

「ほうら。もうすぐ切れますよお。ククク。お仲間にも見せたらうんですね」

ピリピリと一ミリずつ爪が切り進む。すでに半分以上切り進み、残りは五ミリもない。

「いやついやあつ！ 見ないで！ お願いです、見ないでくださいいっ……うっ！」

亜麻色のショートを打ち振って、まどかは全身を強張らせる。しかし妖系の拘束はどうやっても解けず、いたずらに肌を傷つけるばかりだ。羞恥と惨めさに瞳は黒々と潤んで、まっ赤なホッペタを大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちた。

「さあ、お披露目ですよ……むっ!!」

切断が完了する寸前、斑目の指の動きが止まる。直後――

ザツシヤアアアアアアアツツ！

「うおおおっ！」

いきなり突風が吹き抜け、まどかを縛っていた糸や触手がすべて切断されていた。

「なにっ!! 地縛陣は破られていないはずなのに……一体どこから……っ!!」

戸惑う斑目に考える余裕を与えず、闖入者が襲いかかる。

「こつちよ！」

斑目の背後の景色が歪み、そこに何者かの姿が蜃気楼のように浮かび上がった。

(女の……!!)

空中に投げ出されたまま、まどかは臉を見開いた。歳は十代だろう。まず印象的なのは切れ長の瞳だ。

獲物を見据え爛々と輝く瞳は燃えるような赤。鼻筋は峻厳な高山の稜線にも似て、美しさの中にも高貴な意志の強さを内包している。猛々しい喊声を放つ口も、女らしい優美な唇の朱と敵の喉笛に噛みつかんばかりの歯列の白さとが、目も眩むほどの鮮烈なコントラストを描き出している。

ガキイイイインツツ！

少女の槍状の武器と斑目の爪が交錯し、激しい火花を散らす。神速の突きは異形の男にもかわしきれなかったようで、キザな細面の頬がザツクリ切り裂かれた。

「くっ！ 私が開いた空間断層を利用して接近したというのか！ だが……飛んで火に入る夏の虫とは貴女のことですよっ！」

斑目が槍を弾くと、黒髪の少女は後方へ跳躍した。だがそこには蜘蛛の巣の如く張り巡らせた罠が待ち構えている。砂地が一斉に粟立ち、無数の砂の触手が獲物を捕らえんと蠢き立つ。

「あぶないっ！ 足元に気をつけて！」

思わず叫ぶまどかだが、重力に逆らえるはずもなく、謎の少女はふわりと砂浜に着地した。



デバイン
ハート

～反逆の女神～

神の力を纏いし少女の
孤高なる戦いが始まる!!



第1話 Renegade

小説 NOVEL くらいひろき 黒井弘騎

挿絵 ILLUSTRATION KAGEMUSYA

「侵入者有り！ 侵入者有り！」「警戒LV5！ 地下研究プラントだけでは侵入を許すな！」

けたたましくサイレンが鳴り響き、真紅のサーチライトが夜空を赤く染め上げる。

世界的大企業『ミレニウム』の運営する未来型海上都市、ジオポリス。居住区から離れた工業地帯の一区画は、その夜混乱の極みにあった。

何十という警備員が慌ただしく敷地内を走りまわり、無数の重火器が標的を探索する。単なる製薬工場のはずだが、その徹底した防備体制から、その内部に仄暗い真実を隠蔽していることが窺えた。

「表向きは製薬会社の研究プラント、でもその実態は……情報通りというわけね」

地上での喧騒の中、すでに地下深部にまで侵入していた渦中のイレギュラーは、一人冷たく呟いた。

美しい少女だった。大人びた麗貌に、静謐な知性を感じさせる切れ長の瞳。クールに整った顔立ちは、一種近寄りたがたい雰囲気さえ感じさせる。独力で警備を掻い潜りここまで辿りついたのも納得できず、まう、聡明さと凛々しさを合わせた美少女だ。

漆黒のボディスーツに包まれた長身も、同様に大人びて凛々なものだった。すらりと伸びた四肢に、躍動感溢れる脚線美。Dカップの美巨乳はスーツ越しにも抜群の存在感を見せつけ、瑞々しい太ももやハート型のヒップと相まって流麗なボディラインを描き出している。光沢感溢れる生地に引き締められたスレンダーボディは、息を飲むほどセクシーだ。

クールな麗貌に、蠱惑的な完璧ボディ。険しさと美しさとを両立させた、牝豹のように端正な少女だが、彼女の印象は決して冷徹なだけではない。

切れ長の瞳に輝く、強靱な意志の光。気丈そのものの表情は、決して折れない信念あつてのものだ。腰まで伸びた緋色のロングヘアは、闇の中でなお情熱的な輝きを放っていた。

「平和な日常の陰に隠れ、侵略の爪牙を低きすす……。」
「組織」のやり口は、いつもそう」

緋髪の美少女は、刺々しい口調で吐き捨てた。鋭い瞳が闇の中に見据えるのは、決して一般人には知られることのない薬園都市の真実だ。

工業区地下数千メートル。公式には発表されていない地下空間には、悪夢じみた光景が広がっていた。見渡す限り設置された水槽には、無数のチューブを味な溶液で満たされた水槽には、無数のチューブを連結された生体サンプルがそれぞれ浮かんでいる。

人の身体に肉食獣の頭部を持つ者、爬虫類の鱗に覆われた少年や無数の触手を生やした老人——人でありながら人でない異形の姿は、怪人と呼称するに相応しい。それぞれの水槽には型式番号らしき数字と、『試験体』『失敗作』の但し書きが刻まれている。

「組織」め……罪もない人々を犠牲にして、どれほどの人体実験を繰り返してきたのか……」
悪夢のような人外の群れを前にしながら、少女は僅かにも表情を曇らせていない。物言わぬ異形たちを見つめる瞳には、憐憫の情さえ浮かんでいる。

彼らは被害者なのだ。組織に拉致され、生体兵器の実験体とされ、失敗作として廃棄された——許しがたい悪に人生を弄ばれた悲しき犠牲者なのだ。

「ごめんなさい。わたしがもっと早くここを突き止めることができれば、貴方たちの一人でも救えたかもしれないのに……ッ！」

憂いを秘めたまま、少女はきつく拳を握り締める。小さな肩は、純真ゆえの強い義憤に震えていた。

「罪なき人々の生命を弄び、幸福な日々を奪い去る組織」！ わたしは、貴方たちを絶対に許さない！」

鋭い瞳に力を込め、少女はすつと右手を差し出した。グラブに包まれた細指には、巨大な銃器が握り締められている。

たおやかな指がトリガーにかけられる、刹那。

「そこまでだ」
部屋中に照明が差し込み、侵入者を照らし出す。

「予想より早かったわね。流石はミレニアムの忠実な飼い犬……いや、奴隷か」
目を焼く光量に一瞬眉を蹙めるも、すぐに冷静さを取り戻す。何十もの男たちに包囲されながら、少女は強気な表情を保ったままだ。

「ほう、女か。単身潜り込むとは大したものだが、この秘密を知ったからには無事では帰さん」

「久々の獲物だ……グフフ。楽しませてもらう」
気丈な態度に嗜虐心を煽られ、男たちは下卑た笑みを浮かべる。そこにあるのは人の理性ではなく、獲物を見つけた野獣そのものの獣性だ。

「グフフ……グオオオオオオオオ！」
人のものとは思えぬ咆哮とともに、男たちの姿が歪む。ミシミシと音を立てながら筋肉が隆起し、衣服を引き裂きながら数倍にも膨れ上がった。人間離れしてパンプアップされた巨体には、同じく人間ではありえない様々な器官が構成されていく。

肉食獣そのものの鋭い爪と牙、雄々しく聳える野牛の角。あるいは甲殻類ながらの外殻に全身を覆い、無数の節足が伸出する。軟体生物じみた触手がのたうち回り、怪鳥の翼が大きく羽ばたいた。

一体一体姿形は異なるが、それぞれが等しく猛悪でおぞましい——人と獣とが混じりあった、生命の尊厳を冒瀆するかのような異形の姿。悪夢じみた怪人の群れが、美しき侵入者への包囲を狭めていく。

「醜い姿。でもそれ以上に醜いのは、貴方たちの心」
だが、そんな恐るべき群れを前にして、少女は僅かにも動じていなかった。あくまで冷静に周囲を見直し、余裕さえ感じさせる口ぶりで呟いてみせる。

「人であることをやめ、人の尊厳さえ捨てたスレイブノイド。人の心を捨てて自ら組織の奴隷に成り下がった貴方たちには、もはや救いはないわ」

ミレニアムの主力生体兵器・改造人間「スレイブノイド」——姿形は同じでも、培養槽で眠る実験体とは立場が違う。彼らは皆、力を求め組織に魂を売り渡し、自ら人間であることをやめた外道なのだ。

クールな瞳には、静かに正義の怒りが燃えていた。「何をナメた口をきいてやがる。自分の立場がわかっているのか?」「少しは組織のことを知っているようだが、ならわかるだろう? ただの人間風情が、俺たちスレイブノイドに敵うはずがないってな!」

超然とした態度に、怪人たちは怒りを露にした。

スレイブノイドは、人体改造によって人の身体に獣の力を内包させた超生物兵器だ。ただの人間、それも非力な女など相手にもならない。鋼鉄さえ容易に引き裂く無数の爪牙が、四方八方から迫る。

「教えてやるぜ女! 人間を遥かに越えたスレイブノイドの力……組織から授かった偉大な力を!!」
「人間を越えた力……か。人の心を捨ててまで得た力が、そんなに嬉しいの……?」

凶獣どもを冷やかに見下し、小さく呟く。その問いは、果たして誰に向けられたものか。何かに想いを馳せる少女の面持ちは、辛そうに沈んでいた。

「わたしはそんなもの、要らなかつた。そんなものより、平和な日々が欲しがつた。けれど、今は……!」

震える拳を、少女は胸元に向ける。首から下げてあるペンダントに細い指先が触れた、その刹那。

「罪なき人々の心を守るため……使わせてもらおうわ。貴方たちと同じ、ミレニアムの人体改造で植えつけられた、この忌まわしい力のすべてを!」

コオオオッ!! ペンダントに埋め込まれた蒼い寶石が、眩い輝きを放つ。光の粒子は麗美な長身を覆い尽くし、蒼い光が周囲を照らし出す。

「デイベインアーク! フルドライブ!!」

雄々しい宣誓とともに光の粒子が収縮し、質量を持ったアーマーへと変じていく。純白に煌めく装甲

が薄いボディスーツの上から装着され、一人の少女を戦うための姿へと変えていく。

鈍く輝くナックルガードに、膝上までを覆うロングブーツ。機械的なデザインは無機質でありながら、どこか神々しく荘厳だ。胸部を守る純白のアーマーは完璧なボディラインを隠すことなく、あくまで華麗に少女の美身を装飾する。緋色の長髪を飾るヘッドパーツは、まるで天使の光輪のようにも見えた。

「デイベインハート・マキナ……ドライブモード、フォームアップ!!」

雄々しき名乗りとともに、背部アーマーが大きく展開。巨大なエネルギーが翼の形をもって放出され、降誕と同時に迫る怪人たちを跳ね飛ばした。

「な、何だ……その姿は、その力は!!」

「この蒼い輝き……馬鹿な、これはデイベインアークの輝き!! ま、まさか貴様は!!」

想像を越えた事態に、怪人たちが驚愕の声を上げた。スレイブノイドたちでさえ、いや人を越えた力を持った戦闘兵器だからこそ理解できる圧倒的な力感。その力は、正しく——。

「ええ、そうよ……わたしも貴方たちと同じ。組織によって人を越えた力を与えられた改造人間」

恐るべき怪人たちの前に、超然とした足取りで歩を進める変身少女。胸で輝く宝玉のエネルギーが各部アーマーに伝導し、蒼白い光を迸らせる。

「けれど、わたしは貴方たちとは違う。人の心を捨てた奴隷じゃない。こんな変わり果てた姿でも、この胸に宿る心はわたしの……!」

姿が変わっても、そこだけはまるで変わらない。真つ直ぐな瞳に輝くのは、揺ぎない正義の純真——わたしはデイベインハート……人の心をもって神の力で悪を滅ぼす、デイベインハート・マキナ!」

誇り高く胸を張り、凜然とその名を告げる。
デイベインハート・マキナ——麗美な肢体を白銀

の鎧で包み込んだ、美しき変身戦士。凛々しくも神々しいその姿は、神話世界の戦女神を思わせた。

「デイベインハート……そうか。組織から聞いているぞ。半年前に組織から脱走した、脳改造前の新型改造試験体がいたと」「ミレニアムの至宝、創世の宝玉デイベインアークを与えられながら組織を裏切った愚か者。我らに仇なす反逆の女神……!」

スレイブノイドたちの周囲で、剣呑な殺気が膨らんでいく。先程弾き飛ばされた者たちも起き上がり、爪牙を剥き出し裏切り者へとにじり寄っていく。

「デイベインハート・マキナ……貴様がそうか!」
「ええ……そうよ。わたしは貴方たちを許さない……わたしたちから平和な日々を奪い、そしてまた罪なき人々からすべてを奪い去ろうとするミレニアムを、わたしは決して許さない!」

雄々しく胸を張り、宣戦布告する反逆の女神。アーマー各部に備えられたクリスタルが鈍く輝き、四肢の隅々にまで戦うためのエナジーを漲らせていく。「黙れ裏切り者が! いくら最新型だろうが、この数の実戦型スレイブノイドを前に敵うものか!」

「一度捕獲して、今度こそ組織に服従を誓わせてやる。下らぬ人の心など完全に破壊してやるぜ!」

先程のような、下級な人間に対する油断はない。幾重もの牙と爪と触手の包囲網が、回避不可能のフォーメーションをとって裏切り者へと襲いかかる。

「……わたしは、貴方たちには負けない!」
だが、マキナは一步も退かなかつた。何十もの怪人たちに、華奢な身体で、たった一人で立ち向かう

「わたしは逃げない、わたしは退かない! 父さんが命をかけて守ってくれたこの心は、絶対お前たちに屈したりしないッ!」

強靱な意志の輝きが、切れ長の瞳に宿る。揺るぎなき正義の意志に呼応し、蒼いクリスタルが眩い光を放つた。右拳を守るナックルガードが変形し、長

大なライトセイバーとして握り締められる。

「ディバインアーク・アクセラレーション！ ジェネレート・アークセイバー！」

アーマーに備えつけられたクリスタルから蒼い光が迸り、光の刃として形を成す。ディバインアークに秘められた創世の力、その莫大なエネルギーが形を成した巨大な光剣。自身よりも遙かに長大な得物を、少女は軽々と片手で振るってみせた。

「ディバインアーク・フルドライブ！！ 斬り裂け、ディメンションスライサー！」

斬ッ！！ 実体なきエネルギーの刃はさらに長さを増し、横一閃に怪人の群れをまるごと両断する。空間さえ断ち切る必殺の光斬に、スレイブノイドの群れは瞬く間に肉塊へと変じていた。

「っはあああああああああああああああ！」

勢いを乗せたまま身体を捻り、その場で一回転して刃を振りきる戦女神。バックアーマーから噴出する光の翼がいつそうの加速を与え、巨大化したエネルギーの刃は周囲の培養槽を根こそぎ破壊した。

システムを破壊された改造プラントは火花を噴き、部屋中に爆風が広がっていく。

「こ、これがディバインアークの力……天地創造を司る至宝の力か。あ、圧倒的すぎ……る……」

「や、やはりそうだ……貴様こそミレニアムの切り札として開発された超兵器。来須博士の開発した神の器……ディバインギア、タイプ01！」

「！ そのコードネームで……そんな名前がわたしを呼ぶな！」

今際の際の一言に、マキナは激情を露にした。白熱する刃を怪人に突き立て、苦々しく吐き捨てる。

「わたしは機械じゃない。こんな身体になっても、この心がある限り。わたしは人間……来須麻希奈だ」
もはや聞く者もない死の戦場。少女は自身に言い聞かすかのように、小さく呟いた。

「そうよねえさん。わたしは、人間なんだよね？」
震える瞳が、悲哀に潤む。だが、少女の問いに答えてくれる者は、もういない。

プラント崩壊の爆音だけが、闇に響き渡った――。

※

「なあなあ、見たかよ今日のニュース。またミレニアムの工場が襲われたらしいぜ？」

「あ、例の謎のテロリストか。夢の未来型都市って言っても、なんだか物騒な事件ばっかだよな」

衣食住から公共施設に到るまで、ジオボリスの機関の大半はミレニアムによって運営されている。居住地区中央に聳え立つミレニアムアカデミーは、本社ビルと並ぶジオボリスのランドマークだ。そんな学園の放課後。生徒たちの話題の中心は、ここ最近

ジオボリスを騒がすテロ事件についてだった。マスコミの発表では市内に危険なテロリストが潜伏しており、ミレニアムの重要施設に標的を定めているとのことだった。市民への被害は今のところないが、依然警戒を強めるように呼びかけている。

「でも、結局誰も姿を見てないんだろ。そんな対岸の火事より、俺は例の怪物事件のほうが怖いけど」

「ああ、人がバケモノに変わって街で暴れまわるっていう？ ハハ、そんなのただの都市伝説だろう」

他愛ない話題に談笑する男子たち。その輪から距離を取り、一人の少女は無言で窓際を見つめていた。

「ね、今の話さ。来須さんはどう思う？」

「……別に。興味、ないわ」

目を合わせることもせず、首元を飾るペンダントを弄りながら無愛想に答える。刺々しい態度は、他人を近づけまいとしているかのようだった。

少女の名は来須麻希奈。一ヶ月前にジオボリスに移住してきた転校生だ。

端麗な美貌に、腰まで伸びた見事な黒髪。口数少なく物静かで、同年代の女子たちとは一線を画す大人びた雰囲気的美女だ。

頭脳明晰にして運動神経抜群、その上完璧なボディスタイルにこの美貌。ミステリアスな美少女は男子たちの羨望的ではあったが、一ヶ月の学園生活をともにした今でも親しい関係を築けた者はいない。

麻希奈は孤高の少女だった。社交性がないわけではないが、他者との関わりは最低限で済まし一定の距離を堅持する。今日も放課後の談話に加わることはなく、一人教室の隅で帰り支度を進めていた。

「……ただ。一つだけ、忠告しておくわ」

静かに席を立ち上がり数歩。麻希奈は思い直したように向き直った。普段は関わりうともしない男子と真っ直ぐに視線を合わせ、厳しい口調で語る。

「その噂、興味本位で探らないほうがいいわ。下らない都市伝説に思えても、その裏にはどんな真実が潜んでいるかわからないから……ね」

「あ、ああ……うん」

他愛ない話題を振っただけに、その真剣さに圧倒され、思わず声の上擦りしてしまう。そんな男子に一瞥もくれず、少女は無言で教室を後にした。

「相変わらず素っ気ない女……おい大丈夫か？ お前もあの来須麻希奈に話ふるとか物好きだなあ」

「そうでもないよ。聞いたろ、来須さん俺のこころ配してくれたんだぜ？ こりゃ相当脈アリだろ？」

「ええ、お前どこまでおめでたいんだよ……」

気の置けない仲間同士の笑い声が廊下に響く。麻希奈が一瞬足を止めたのに、彼らは気づかなかつた。

※

「……」

一人教室を出た麻希奈は、そのまま学園を後にし

た。夕暮れ時の街は平和そのもので、道行く人々は
平穏な一時を楽しんでいる。親友同士で語りあう
学校帰りの生徒たちに、ウィンドウショッピングに
興じる若者たち。公園には愛を語りあう恋人たちも
いれば、幼い子供と過ごす親子の姿も見受けられる。
さして珍しくもない、ごく普通の——だからこそ
かけがえのない平和な風景。だが彼らの姿も声も
麻希奈にとってはひどく遠いもの感じられた。

(平和な日常……何気ない日々。でも、こんな青春
も、家族との安らぎも、わたしには無縁のもの)

自ら他人と距離を置き、あくまでクールに振舞う
麻希奈。だがその胸の奥で渦巻くのは、氷の仮面か
らは決して窺えない寂しさだった。

(そう、わかっているわ。わたしがここにきた理由
は唯一つ……ミレニアムを潰すため。でも……)

意識しないようにしていたはずなのに、寂しげな
瞳は無意識に人々の姿を追ってしまふ。

公園で遊ぶ子供連れの家族の姿を見て、麻希奈は
思わずその場で足を止めていた。

(家族……か……)

父に甘え、笑しげに笑う子供の姿に、そんな幸せ
そうな光景に、過去の自分を重ねてしまい……蘇っ
た記憶に、胸を締めつけられる。

(……父さん。亜里亜……)

脳裏に浮かぶ、家族の笑顔。
自分も、少し前は彼らと同じだった。

父と妹。三人で過ごす平穏そのものの日常。
あの時は、それが当然だと思っていた。

だけど、失った今では痛いほどわかる。
それがどれほど幸福で、そしてかけがえのないも
のだったのか。

(……ダメよ麻希奈。わたしには、感傷に浸ってい
るような余裕はないはず……)

湧き上がる寂寞の想いを、麻希奈はぐっと噛み殺

した。強く拳を握り、意気を込め直す。

(そうよ……ミレニアムを止められるのはわたしだ
け。こんな平和な日常を守るためにも……わたしは
戦い続けなければいけないのだから！)

首から下げたペンダントに手をやり、静かに目を
瞑る。その中央では、あの蒼い寶石——創世の至宝
ダイヤインアークが神々しい輝きを放っていた。

そう。来須麻希奈——彼女こそ、ダイヤインハ
ートの正体なのだ。

マスコミには危険なテロリストとして報道され、
ミレニアムから追われる彼女は、誰にもその素性を
明かすことはできない。故に麻希奈は誰とも関わら
ず、他人との距離を取り続けている。誰かに正体を
知られれば、目的遂行の妨げになるのは当然として

——その者にまで危険が及ぶ可能性があるのだから
(奴らは、目的のためには手段を選ばない。わたし
たち家族にしたように……すべてを奪い去り、幸せ
な日々を我が物顔で蹂躪する！)

脳裏に浮かぶ、一年前の悪夢。

今も忘れない、忘れられるはずもないあの地獄。
早くに母親を亡くした麻希奈だったが、父と妹と
暮らす毎日は温かな愛に満ちた幸せなものだった。

天才科学者として多忙な日々を追われながらも、
父は自分たちに母親の分まで懸命に愛を注いでくれ
た。自分も妹も、そんな父親と、そして家族で過ご
す日々が大好きだった。

だが、それもあの日——。

(……ッ)

突如現れた異形の怪人たち、焼け落ちる屋敷。
来須博士の天才的な頭脳を欲したミレニアムによ
り、一家の平穏は一瞬にして奪い去られた。

麻希奈と亜里亜は、来須博士に組織への協力を強
いるための人質でもあり、人体実験のモルモットで
もあり、構成員たちの慰み者でもあった。

少女にとって地獄のような、いや地獄すら超える
絶望の日々はしかし、ある日唐突に終わりを迎える。

来須博士の提唱した、組織の切り札となる新型改
造人間——ダイヤインギアの素体として選ばれたの
は、実の娘である麻希奈本人だった。牢獄から解き
放たれた少女は、手術台の上で父親と再会する。

『許してくれ麻希奈。人類の未来という重責を背負
わせてしまふ、この父を……！』

手術台から見上げる父の最後の表情は、天井灯の
逆光でまともに目にするこさえてできなかった。

『お前しかいないんだ。ミレニアムの魔の手から人
類の未来を守るのは、この大いなる力に……。デ
イインアークに選ばれたお前だけ』

けれど、麻希奈の記憶には残っている。父が残し
てくれたこの心には、今もずっと残っている。

『こんな過酷な運命を強いるわたしを、憎んでくれ
て構わない、けれどこれだけは信じてくれ……麻希
奈！ わたしは、お前を誰よりも愛している！』

誰よりも暖かかった父親の、最後の言葉が。

(憎んでなんて、いるはずがないわ……。命をかけ
てわたしを救ってくれた、大好きな父さんを……)

確かに、父の言葉は正しかった。

一人きりの少女の双肩に背負わされたのは、あま
りに重い使命と、望んでないなかつた人外の力。

改造手術の最中、来須博士は命を賭し造反を決行。
その混乱に乗じ、麻希奈は組織から脱出を果たした。

ミレニアムの正体と組織の真実、そして新型改造
人間ダイヤインギアとしての力をその身に宿し、永
遠の孤独と自由を同時に手に入れたのだ。

それ以来、麻希奈はずっと戦い続けている。

父が残してくれた心と、父の授けてくれた力を継
ぎ、組織に仇なす者として——人の心で神の力を振
るう反逆の女神、ダイヤインハート・マキナとして、
ミレニアムとたった一人で戦い続けているのだ。

「……………」

「辛いと言えは嘘になる。」

政治経済にまで影響力を持つ組織の力は、あまりにも強大だ。強固な情報統制に対し、人々に真実を告げることも、警鐘を鳴らすことさえできない。

「今日も生徒たちの会話を耳にし、痛感した。」

悪の組織にたつた一人で立ち向かう正義のヒロインの真実など、決して理解されることはないし——自分の戦いが報われることなど、きつとない。

「でも……それでも、わたしはッ！」

それでも、麻希奈の意志は折れない。

罪なき人々を、そして平和な世界を守る。

それができるのは、自分しかないから。

これ以上、自分たちのような犠牲者を出さないために。

「そうよ。こんな悲しい思いをするのは、わたしだけで十分。わたしただだけで、十分なのよ！」

誰にも理解されなくて構わない。

報われなくて構わない。

それが、自分の使命だから——否。

「父さん、亜里亜。天国で見守っていてね。わたしは、必ずミレニアムを叩き潰してみせる！」

彼女に残された唯一の人としての証——麻希奈自身心が、決めたことだから。

少女はたつた一人で、人々のため戦い続けるのだ。

※

「きゃあああああああああ！」

「!？」

と。突如上がった悲鳴に、追憶の時間は終わりを迎える。惨劇の犠牲者は、先程まで麻希奈が羨望の眼差しを送っていた幸福そのものの家族だった。

「うぐう……お、おお。ぐお、ぐぐおオオ！」

「バ、パパ!? パパ、パパ——!」

苦しげな呻きと、涙混じりの悲鳴が木霊する。父親は苦しげに頭を抱え、唸り声を上げのたうち回っていた。娘が見ている前で、その姿が変わっていく。「ぐううう……ぐああ。ガ、アアアア!!」

人の叫びが、獣の唸りへ変化する。ピリピリとスーツが破れ、見る間に巨大な体躯へと変化していく。「あれは……スレイブノイドへの暴走!? あの父親……組織の実験体にされたのか……!」

「……組織の実験体にされたのか……!」

「ググウウ……キシユ、キヒキシユキシユッ!」

バキバキと音を立てて皮膚が硬質化し、昆虫のような外骨格が全身を纏う。腹部と背中からは二対四本の副腕が突き出し、顎は裂けて巨大な牙が剥き出した。毒々しい体色に染め上げられたその姿は、蜘蛛と人が混じりあつたかのような異形だった。

「バ、パパ!? いやああ、パパが、パパが——!」

「やめなさい！」

「迅！ 風切の速さで走り寄ると、怯える少女を背中に庇い、麻希奈は怪人の前に立ちふさがった。

「お、お姉ちゃん……誰？ パパ……パパが……」
「……大丈夫よ」

あくまで口数少なく、静かに告げる麻希奈。だがその短い言葉は、決して冷たいわけではない。

「必ず助けるわ……キミも、キミの大好きなパパも。わたしが、絶対に助けてあげるから!!」

想いは、必ず届くもの。短い言葉の中に秘められた信念は、無垢な少女の心に確かに響いていた。

「うん！ お願してお姉ちゃん……パパを、パパを」
「……ええ！」

短く頷き、少女に安全な場所まで逃げるように指示する。追おうとするスパイダースレイブの前に、麻希奈は凜然と胸を張って立ちほだかった。

「なんだ貴様ア!? たかが人間の分際で、この偉大なるスパイダースレイブ様の邪魔をする気か!?!」

「……違う。貴方は人間……まだ、人間のはずよ」

殺意を剥き出しにする蜘蛛怪人に対し、麻希奈は論ずように言葉を紡ぐ。スレイブノイドを見つめる視線は刃のように鋭いが、そこに殺意はない。

（この人は不適合者。今なら、まだ間に合うはず）

スレイブノイドへの覚醒は、人の心を完全に捨て去り組織への絶対服従を誓うことにより完成する。だがこのスパイダースレイブは、自ら望んで人間であることをやめたわけではない。

（わたしの使命は、組織を叩き潰すこと。けれど）

それ以前に、やるべきことがある。

自分にしかできないことがある。

（わたしは、一人でも多くの人を救いたい。わたしの力は……父さんが託してくれたデイベインアークの力は、そのためにあるのだから!）

罪なき人々を、平和な日常を、無垢な願いを。

決して、これ以上壊させはしない——!

誰よりも純真な想いに応え、少女の胸元で創世の宝玉が着く輝く。

「お願いデイベインアーク！ わたしに、力を貸して！」

胸元で輝くペンダントに指をやり、小さく祈る。ミレニアムの至宝である超古代のオーバーツ・デイベインアーク。宇宙開闢より存在するとされる宝玉は、人智を越えた奇跡を引き起こす無限のエネルギー源だ。その力を悪用し、自分たちの支配する新たな世界を創り出すことがミレニアムの目的だ。

だが創世の至宝は、今や逆逆の女神の手にある。高潔なる少女によって紡がれるのは、悪を滅ぼすための力と——罪なき人々を救い、守るための力。

「デイベインアーク！ アクティベーション！」

父に託されたペンダントが展開し、蒼い光が噴出する。天地開闢にも匹敵する莫大なエネルギーの渦に呑み込まれ、少女の衣服がかき消えていく。

代わりに裸身を包むのは、半透明のタイトなインナースーツだ。極薄の生地は僅かの隙間もなく肌に密着し、瑞々しい肢体をびっちりとしてコーティングしていく。抜群のスタイルを誇る肢体はいっそうシェイプアップされ、豊かな乳房や躍動感溢れる太ももはいっそう肉感を強調される。光沢感溢れる艶めかしいシースルースーツにラッピングされ、全裸以上に強調された完璧なボディラインは、魔性とも呼べるほどの艶めかしさに輝いていた。

「んっ……ふっ……!」

全身をびっちり締め上げられるフィット感に、僅かに甘い声を零してしまう変身少女。密着したスーツ越しから、僅かに紅潮した肌具合が透けて見える。肌を直接コーティングする極薄生地の上から、要所を守るべく軽装アーマーが装着される。

インナーに搾り上げられいっそう豊かさを強調された巨乳から、きつくシェイプアップされてくびれた細腰、肉感豊かな尻から抜群の脚線美を誇る両足までをまとめて覆うのは、闇夜のように照り輝くエナメル質のボディスーツだ。しなやかな両腕には同質のロンググラブが装着され、指先の一本一本までをびっちりとしてコーティングする。防御力より機動性を重視したボディスーツは要所のみを守る設計で、そのデザインはひどく際どい。インナーに締め上げられた胸の谷間や内腿はそのままの剥き出しで、下腹から白いシーツに守られた股間部までもがセクシーに露出してしまっていた。シースルートのインナーの上から際どいエナメルスーツを纏っただけの軽装姿は、凛々しくもフェティッシュな色香に満ち満ちていた。エネルギーの奔流にたなびく黒髪は情熱的な緋色に染まり、デイベインハート軽装形態への変身がまずは完了する。

「すっ……ふっ……!」

短く呼吸を吐き、意識を集中する。スーツを伝播する電流の刺激が、緊張した身体に心地良い。

来須博士の設計によるこのインナースーツは、デイベインアークのエネルギーを全身に伝達させ、装着者の肉体能力を数千倍にも強化する。軽装形態でも常人を遥かに超える身体能力を発揮する改造人間だが、彼女の目的を果たすためにはまだ足りない。

デイベインハート軽装形態は、一部のエネルギーのみを解放した簡易変身状態に過ぎないのだ。強大すぎる力をセーブし、本体への負荷を軽減している第一次変身では、人間を遥かに越えた戦闘力を誇る生物兵器を相手取るのは困難だ。

（昨日の疲労も回復しきつていない。これ以上の変身は、身体への負担も厳しいわ。でも……!）

アークの力は、人が制御するにはあまりにも強大すぎる。麻希奈はそんな巨大すぎるエネルギーを小さな身体で制御し、周囲に被害を及ぼさぬよう細心

「圧倒。ミレニアムの切り札として開発された新型改造人間。その戦闘力はまさに圧倒的だった。」

「悪く思わないで。今の貴方に説得は通じない。だから、まずは戦闘力を完全に奪わせてもらおう」

口数少なく、無感情に言い放つ戦いの勝利者。冷酷にも思える言動だが、彼女にその意志があれば、この瞬間にでも首をはね飛ばすなど造作もない。

（ごめんなさい。でも、少しだけ我慢して。コアを破壊すれば、貴方は元の人間に戻るはずだから）

スパイダースレイブは、あくまでミレニアムの犠牲者だ。あくまでクルールに振舞い、表情には出さない。だが、元は人間だった相手を圧倒的な力で傷つけることに、少女の純心は痛みを震えていた。

（そう……貴方は、人間に戻れる。でも……）

人間だからこそその弱点。心の痛みが、僅かに少女の判断を鈍らせる——刹那、

「これだけの力を持ちながら、一息にトドメを刺さない……甘い、甘いよなアディバインハートオ！」

「!! やめなさい、これ以上抵抗すれば……!!」

大顎が笑いの形に歪み、蜘蛛の複眼が赤く輝く。不審な行動に気づいた時には、もう遅かった。地面が大きく揺れ、そして——。

「う、うわああああ!! な、なんだこれっ!!」

「!!」

悲鳴は、戦場から離れた周囲で起きていた。素早く見回せば、避難していた市民たちが皆、巨大な蜘蛛糸にかかって拘束されている。その中には、この男の家族の姿もあった。

「キシシシ! お前の戦闘力は大したもんだ……最初からわかってたぜ、実力じゃあ分が悪いって。だから、予め保険をかけておいたってわけよ」

残された五本の腕を、ひらひらと泳がしてみせる。スパイダースレイブ。その掌からは、目に見えないほどに細い無数の蜘蛛糸が無数に放出されていた。

（……しまった。こいつ、最初から罠を……!）

スレイブノイドは、原型となった生物を基とした様々な特殊能力を備えている。蜘蛛の生物兵器であるスパイダースレイブは、不可視の糸で予め網を張っていたのだ。最初から気づかれてしまうであろうマキナ相手ではなく、力なき弱者たち目がけて、だ。

（わたしの判断ミスだ。わたしのせいで、罪なき人たちにまで危険を及ぼしてしまった……!）

自責の念が、少女の心を締め上げる。

圧倒的すぎるアディバインアークの力を繊細に制御し、スレイブノイドの生命を奪わぬように加減しながら、さらに周囲にまで気を配るなど不可能な話。

だが、麻希奈はそれをしなければいけないのだ。

それが、自分に課せられた使命だから。

自らの心に、誓ったことだから——。

「キシシ、わかっているよな、形成逆転だ。今度はお前が抵抗する素振りを見せれば……ほおら」

苦悩するマキナに見せつけるように、スパイダースレイブは蜘蛛糸の一つを引っ張ってみせた。拘束糸に締め上げられ、人質たちが苦痛に叫ぶ。

「うあ、痛い痛い!!」息が……ふうふう!!

「や、やめろ! 無関係な人々に手を出すな!」

これまで冷静を保っていた無敵のヒロインが、初めて余裕を崩した。人々のためを思い、声を張り上げ必死に懇願するマキナ。武器を捨て忍従を示す勝者の姿に、蜘蛛男は邪悪な笑みを浮かべ勝ち誇る。

「キシシシ! 敵にはトドメを刺さない、無関係な人質のせいで戦えない……まったく甘い野郎だぜ! それだけの力を持ちながら、人の心ってヤツは本当に邪魔だよなアディバインハート!!」

「……そうかもしれないわ。でも、それでも……」

確かに、自分は甘いかもしれない。組織を叩き潰すためには、もっと冷酷にならなければいけないのかも知れない。だが、そうわかっただけで——。

「心を捨てた機械になるよりは、ずっとマシよ!」

これが、マキナ——麻希奈の選んだ道。

この人の心だけは、絶対に捨てられない。

この甘さは、人の心は、人間・来須麻希奈に残された唯一の誇りなのだから。

「キシシシシ!! 言うねえ……面白え。その強がりごとこまでもつか、試してやるぜ!」

シヤアッ! 市民を拘束しているのと同じ蜘蛛糸が、少女目がけて放たれた。回避しようと思えば容易い、引き千切るのもわけではない。だがマキナは無言で唇を噛み締め、されるがままに身を任せた。

「ツ……うっ……」

無数の糸が絡みあい、巨大な蜘蛛の巣を形成する。マキナは空中に張られた蜘蛛の巣に、四肢を広げた大の字の形で陳にされてしまっていた。薄いインナーに糸が食い込み、瑞々しい媚肉が搾り出される。

「キシシシシ! こうして見ればますます美しいなこの腕の分まで、たっぷり可愛がってやるぜ!」

切断された腕が、驚異的な生命力で再生した。背後に回った蜘蛛男は、至近距離から獲物を視察する。

「……ッ」

好色そのものの視線に、じつとりと全身を舐め回される。たまらない嫌悪感とともに、少女の脳裏にあの地獄の日々がフラッシュバックした。

（この目……あいつらと同じだ。わたしと亜里亜を辱めた……汚らわしいケダモノたちと同じ……!）

父とともに組織に攫われ、そこで過ごした地獄の日々。若く美しい姉妹は、悪の構成員たちにとって絶好の慰み者だった。

今でも思い出すだけで、心臓が止まりそうになる。代わる代わる無数の男たちに弄ばれ、日夜の別なく穴という穴を犯し抜かれ、さらには異形の怪人の猥欲の捌け口にまでされ——数ヶ月にも渡る監禁陵辱で若き心身に刻まれた傷跡は、今も癒えてはいない。

「つ……。わたし……また、あの時みたいに……」

開閉を繰り返す蜘蛛の掌が、胸に、太ももに、そして股間に——男どもの好奇を引いてやまない、少女にとっては思まわしくか思えない見事な肉体へと伸ばされていく。訪れる屈辱の瞬間が過去の記憶と重なりあい、マキナは小さく身体を震わせた。

「キシシュ、なんだあびびってやがるのか？　さつきまでの威勢はどうしたんだ、おい？」

「つ……別に。恐れてなどいないわ。ただ……」

内心で湧き上がる怯えを見抜かれまいと、マキナはすぐさま表情を取り繕った。あくまで気丈に、強

気な瞳で怪人を見据えて吐き捨てる。

「下衆のすることは同じだと呆れていただけよ！」

「キシシュ！　そうでなくっちゃ面白くねえ！」

生意気な抵抗が、獣の嗜虐心に火をつける。二本の腕が背後から胸元に回され、残り二本の腕が股間に潜り込んで内太ももまで伸ばされる。

「つ……ん！」

不完全なスレイブノイドの力では、白銀の鎧を砕くことはできない。だが陵辱者は最初から外装ではなく、露出の高い部分のみに攻撃を絞ってきた。スキンスーツ一枚しか纏っていない太ももをなぞり上げられ、薄生地越しに強く揉まれ愛撫される。アーマーに守られた乳房そのものには手出しできないものの、露出している上乳に指先を突き立てられ、その柔媚さを確かめるように何度も何度もつかれた。

「……ふん！　口だけなのはお前のほうね。威勢の割に……っ。随分、優しい愛撫じゃない」

「キシシ、相変わらず口の減らない女だ。まあ確かにこのアーマーは厄介だが、それならそれで楽しみ方はあるってことよ……それ、こんな風になあ」

シユ、シユシユ。器用に蠢く蜘蛛の指に、胸アーマーの隙間から乳峰を摩擦された。太ももへはスーツ越しの愛撫が執拗に繰り返され、さわさわと

股間へ近づいては触れずに遠ざかるのを繰り返される。背後から回された四本の手は、まるで痴漢のようないやらしさで淫猥なタッチを繰り返す。

「つ……な、なんていやらしい動きなの。もどかしい動作を繰り返して……し、しつこい……！」

さして力は込められていない。だが、だからこそ焦燥感を煽られる絶妙な力加減。無数の指がせわしなく動き、スーツ越しにもどかしいタッチを繰り返す。まるで、小さな虫に這い回られているようだ。

「つ……ふ、く、んう……っ！」

ムズ痒い感覚に、小さく身じろぐ変身少女。極薄のスキンスーツは装着者の反応速度を何倍にも強化するが、神経を興奮させ過敏にしてしまうデメリットも持つ。薄生地越しにさわさわと撫でられるだけで、ゾクゾクと堪えがたい搔痒感が募っていく。

「キシシュ、たまらねえなあこのスーツの感触。スベスベと指に吸いついてきて……気持ちいいぜえ」

「な?!　何を馬鹿なことを……へ、変態め！」

戦闘用のコスチュームに下劣な欲情をぶつけられ、恥辱に顔を赤らめるダイバインハート。だがその言葉で余計に意識してしまい、スーツ越しの愛撫がいつそうもどかしく、そして心地良く感じてしまう。

「くうっ……い、いけない。スーツ越しにコスラれると……くう。肌が、むずがゆくて……」

ゾクゾクと駆け巡る、もどかしい搔痒感。性悦というほどの快感ではないが、だからこそ耐えがたく焦燥だけが募っていく。半透明のスキン越しには、紅潮した肌の赤みが艶めかしく透過していた。

「くう……ふ、うう……く、ん！」

だがマキナは、決して喘ぎを零すことはしなかった。きつく唇を噛み締め、湧き上がる快楽を噛み殺す。こみ上げる何かを必死で耐える強気な表情からは、鬼気迫る信念さえ感じられた。

「だ、だめよマキナ。耐えるの……ここで屈したら

……また、あの時のようになってしま……！」

脳裏にちらつく、過去の自分の恥ずべき姿。圧倒的な暴力に為す術もなく屈服させられ、味わったことのない快楽に狂わされた敗者の痴態。

人の尊厳を奪われた、淫らで惨めな奴隷の姿——。「違う！　わたしは強くなつた……あの時とは違うのよ！　もう二度と、悪に屈したりしないわ！」

両目を見開き、心力を振り絞って過去の幻影を振り払う。今すべきことを見据え、再び意気を込める。

「そうよ、今は耐えるしかない。チャンスはいつか必ず来る……それを、見逃すな！」

人質を取られ蜘蛛糸に絡め取られ、まさに絶体絶命の窮地だ。だが、マキナは諦めてなどいなかった。勝機を掴むためにも、今は耐えるしかない——が。

「はあ、はあ……く、あああ……！」

さわ、さわさわ……。虫のように這い回る掌が、攻撃の矛先を変えた。バックから数本の手が臀部に回され、そのままスーツ越しにヒップを鷲掴みにされる。内股同様に極薄インナー一枚纏っただけの尻肉に、容赦なく野太い指が食い込まれていく。

「あつ……ん！　いや、そ、そんなとこ……っ！」

「いい尻してるなあダイバインハート。スベスベしたスーツ越しにプリプリした弾力がたまらねえぜ」

「い、言わないで。そんな……恥ずかしい……！」

下劣極まる寸評に、たまらず顔を赤らめる純情少女。高潔な心が恥辱に震え、かつと身体が熱くなる。

学園でも数多の男子の目を引く悩殺ボディは、しかし麻希奈本人にとってはコンプレックスの対象に過ぎない。いかにも男好きのする媚肉は、組織の構成員たちにとって格好の餌食だった。凛々しく格好

いい外見とは裏腹、少女の肉体は何人も男たちに徹底的に可愛がられ、たつぷりと開発されてしまっ

ている。見るからに美味そうな太ももも豊富な尻

は、中でも垂涎的だった。そんな弱点を無数の腕



スバルの前に現れたのは—!?



怪忍...!

鬼どもの頭目か!





ラオ將軍だ

いかにも



いつまで
這い回っている気だ

「閃忍」

前回までのあらすじ

未来の頭領タカマルの実力に不安を抱くスバルは
単身敵地に乗り込むが……。



立て

がつ!

剣を取れ

けはッ!!



名乗りをあげて
向かって来い

くう…ちから
淫力が…足りない…

ぐ…く

七はッ

何も出来ないか

身の程知らずめ

ぐ…う

超異聞 黒い花

下巻「汚辱」

MISS BLACK

原作 / アリスソフト

©ALICESOFT





私は…何を
している……？

わ私は…



何をしにきた

戦えぬ戦士など
歌えぬ鳥にも劣る



敗れ…辱められ
操られ……罵って



！

戦士でもない者に
死ぬ権利があると
思うのか



フン



何ら成す事も
なく…！

…殺せ…！

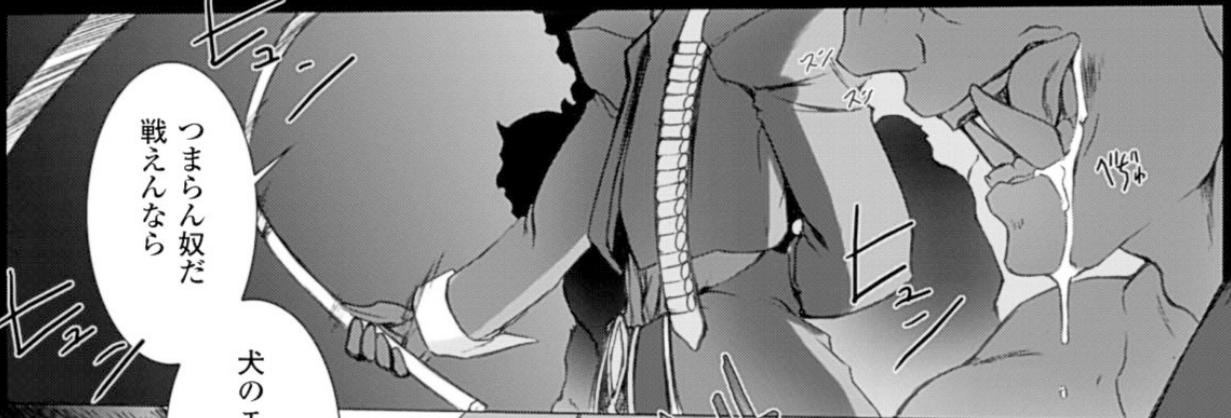


…この音か!

体が…!?



う…!?



つまらん奴だ
戦えんなら

犬のエサになれ



ヒュッ



貴様等ごときに
二度も好きにされて
たまるか!

く……そお!

うう

あーあー

あーあー



!!!!!!!!!!!!!!

おう……へへ

久しぶりで
硬くなってやがるぜ

で何がどうしたってエ?
「閃忍」様よお

あーあー

あーあー

精液奴隷捜査官

白濁に疼く媚肉

小説 たかほ 鷹羽シン

挿絵 もふりる ILLUSTRATION

抗えぬ白濁絶頂に
蕩けていく
美人捜査官の媚体!

近未来。ドラッグの氾濫とそれによる犯罪の増加で、一時は機能が停滞するほど首都は荒れ果ててしまった。

しかし、警察内部に設立された独立組織「特殊ドラッグ対策課」の活躍により、首都に流通していたドラッグはほぼ全てが押収され、それらを牛耳っていた裏組織も壊滅。首都の夜は安寧を取り戻した。それが、およそ一年前のことである。

だが、小規模ではあるが今もなおドラッグは非合法に流通している。それらを取り締まるべく、今夜も特殊ドラッグ対策課の捜査官は夜を駆け回る。

深夜。郊外の廃工場にてドラッグの受け渡しが行われるという情報を掴んだ二人の女性捜査官は、コンテナの陰に潜み、暗視機能付きのバイザーで取引の様子を窺っていた。

「受け渡しの瞬間を押さえるわよ。いいわね、エリー」

ターゲットである黒服の男達から視線を外さず、インカムで相棒に呼びかけるマキ。

長く美しい黒髪。均整の取れたスタイルと、流線型を描くDカップの乳房。そして意志の強そうなキリッとした表情が印象的な、十九歳の美女だ。

その両手に黒のロンググローブを嵌め、足には黒のロングブーツを履いているが、ボディはダークブルーの薄布で覆われているだけ。美しいボディラインはくつきりと浮かび上がらせて

いるものの、装備としてはいかにも頼りない。

しかし、この薄布に見える素材こそが対策課の最新装備である特殊な強化スーツなのだ。素肌に直接用するこのスーツは、レオタードのようなフィット感ではあるが、特殊樹脂により布地とは思えない強固な防御力を誇り、銃弾すらも弾くことができる。

さらにグローブとブーツは、薄手ではあるが装着者の身体能力を強化し超人的な力を発揮することができる、こちらも強力な装備であった。

「オーケー。敵は十人、楽勝ね。早く終わらせてシャワーを浴びましょ」

マイクの向こうで楽天的に笑うのは、マキと同じ強化スーツに身を包んだ、パートナーのエリーだ。

ゆるやかなウェーブのかかった美しいブロンドをポニーテールに束ねた、二十二歳のハーフ美女である。なんとも肉感的なダイナマイトボディを有しており、バストはマキの二回りは大きく、ヒップも豊かに張り出している。

明るく気さくなエリーはマキとは対照的な性格であったが、しかし二人は不思議とウマが合い、任務においてもベストパートナーであった。

「もう。気を抜かないで。…行くわよっ」

男達がドラッグと現金の入ったトランクの中身を見せあい、交換したその直後。合図と共に、二つの青い影が弾丸のように飛び出してゆく。

「な、なんだっ!?」

「チッ。ヤツらかつ! 撃てっ」

慌てて懐から拳銃を取り出そうとする黒服の懐にマキは素早く飛び込み、ボディに拳を叩き込む。次いで後ろにステップを踏むと、回し蹴りで背後の男を蹴り倒した。豊かな乳房をブルンと弾ませ、舞うように飛び跳ねるマキ。男達は彼女の姿を視認できぬまま、次々に打ち倒されていく。

「クソがつ。舐めた格好しやがつて、とっ捕まえてぶち犯してやるっ!」

男の一人を打ち倒した瞬間にわずかに動きを止めたマキをようやく視界に捉えた男が、マキの扇情的なスーツ姿に欲情と怒りを駆り立てられて飛びかかる。しかしマキは地面を蹴ると高く飛び上がり、男の手をスルリとかわしその顔面に勢いよく両足を叩き込んだ。「フン。下品な男。この街に、貴方のような男は必要ないわ」

吹き飛ばされコンテナにぶつかって気絶した男を、マキは長い黒髪を手で払い、冷たい瞳で見下ろした。

「エリーの方は、もう片付いたかしら。…:…ひあっ!」

エリーの様子を確認しようとして振り返ろうとしたマキは、突然背後から何者かに襲われた。勢いよく乳房を掴まれ、全身を抱きすくめられてしまう。

「くっ! 私がバックを取られるなんてっ」

慌てて振り払おうとしたマキだったが、しかしその耳に届いたのは……。

「んっ。マキのバスト、やっぱりやわらかいわ。最高の揉み心地よっ」

なんとも楽しそうなパートナーの明るい声。マキはホッと緊張を解くと、マイペースなパートナーをたしなめる。

「ハア。エリー、驚かさないで」

「ウフフ。マキの戦っている姿を見ていたら、たまらなくなっちゃって」

エリーは悪びれもせず、マキの乳房を楽しそうに揉みたくっている。

普段から女性も好きだと公言しているエリーは、ことあるごとにマキの肢体に過度のスキンシップを試みていた。

「もう、放しなさいったら。課長に報告するから、ヤツらをお願い」

「はい。また今度ゆつくり揉ませてもらうわね」

ようやく解放され、マキはインカムで対策課のトップである課長へ通信をする。その間に、エリーは打ち倒した男達を縛り上げていく。

「こちらマキ。対象は全員捕獲し、ドラッグも押収しました」

「うむ。了解した。よくやってくれたな、マキくん」

「は、はいっ」

課長に褒められ、マキの頬がわずかにほころぶ。そんなマキを、エリーは楽しそうにニコニコと見つめていた。

「マキ。どうしたの、難しい顔して。課長のことも考えてるのかしら?」

課内の自分の席に座り思案顔をしていたマキに忍び寄り、エリーが後ろか

らギュッと抱きしめる。

「そんなじゃないわ。ただ……この街には、まだ真の平和は訪れていないのかも、って思ってる」

「そうかしら？ ずいぶん安全になったと思うけど。昔に比べたら、出勤回数もかなり減ったって話じゃない」

エリーにチラリと視線を向けるも再び思案を始めるマキに、頬擦りをしつつエリーは楽天的に言う。

二年前に課長の提唱により設立された特殊ドラッグ対策課は、課長の指揮の下、一年でほとんどの裏組織を壊滅に追いやっていった。

「そうね。あの頃に比べたら、かなり穏やかになったとは思わ……」

マキは当時を思い出し、遠くを見つめる。

当時、まだ学生だったマキは、幾人もの親しい友人達が闇に巻き込まれドロドロになってゆくのを目の当たりにしていた。それ以来、マキはドラッグとそれを扱う者達を激しく嫌悪していた。

それゆえマキは一年前、学園卒業と同時に警察官となり、すぐに対策課への配属を志願したのだ。

「こうして街が落ち着きを取り戻したのも、私がおかこの街を守る為に戦えるのも、課長のおかげ。課長には本当に感謝しているわ」

マキが対策課に配属されたのは、課長の抜擢があったからである。

対策課のメンバーは、全員若くしか

も美しい女性で構成されている。これは強化スーツに適応する肉体を持った者が運動能力の高い女性に限られていた為である。

適応者が常に不足していることもあり、そしてその頃には裏組織もあらゆる破壊に向かっていた為、強化スーツへの適応テストに合格したマキは新人ながらも配属を許可されたのだった。

その後、捜査官の仕事の中で男の汚い面を数多く目の当たりにしたことで、マキは今では若干男嫌いの気があった。それでも課長だけは人間として信頼し、そして憧れを抱いていた。

「でも、せっかく掴んだその平和が、また脅かされようとしている……」

「それって……『SD』のこと？」

尋ねるエリーに、マキはコクリと頷く。

『ザーメンドール』、通称『SD』とは、最近街に巡回しつつある新たなドラッグである。対策課でもSDを検挙、押収していたが、これまでのドラッグと違い、なぜかその蔓延は一向に収束の気配を見せなかった。

「でもアレって、気持ちよくなるだけの軽いモノなんじゃない？」

SDは、男には途切れることのない射精能力を、女には激しい媚薬効果と性感帯の覚醒をもたらすという。服用し過ぎると性衝動にとりつかれニンフオマニアになってしまうという弊害はあったが、身体や脳への害はないという話であった。

「ならそんなに焦らなくても……ソノエリー。そんなに睨まないで」

言いかけたエリーだが、マキにきつく睨まれて、慌てて口をつぐむ。

「どんなドラッグだろうと、私はそれを広める者を絶対に許さない。それに、エリーも見ているでしょう。もうすでに弊害は起きはじめているのよ」

近頃、安易に性行為による快樂の増幅を望んだ若者が制限を越えてSDを使用し、夜の街の至るところでまぐわいあうという異常な事態がいくつも発生していた。

「私は必ずSDの出所を突き止め、蔓延を阻止してみせるわ」

拳を握り静かに誓うマキを、エリーはただ、ギュッと抱きしめた。

「ごめんさい、エリー。こんなことに付きあわせて」

「気にしないで。ワタシ達、パートナーでしょ」

強化スーツ姿の二人は、倉庫に積まれている資材の陰に隠れて息を潜めている。対策課のメンバーにはある程度の独立権限が与えられており、必要であれば強化スーツの着用も自己判断で許可されていた。

埠頭にある倉庫でSDの大きな取引があり、そしてその場にSDの流通を取り仕切る黒幕も現れる。情報を掴んだマキは、エリーに自分が独力で進んでいた捜査の内容を明かし、現行犯で捕らえる協力をしてほしいと頼んだ。

エリーは最初こそ目を丸くして驚いていたものの、やがてマキの手をしっかり握り、協力を約束してくれた。

しばしその場で待機を続けていた二人。だが突然、倉庫内のライトが全て点灯する。

「くっ!!」

眩さに目を細めていると、倉庫の中央にはいつの間にか、背広姿の課長が悠然と一人で立っていた。

「マキくん。私に話があるんだらう。出てきたらどうだね」

課長に声をかけられて、ドキリとする。マキの行動は筒抜けだったのだらうか。マキはエリーに目配せすると、彼女はその場で待機させ、自身は課長の前に姿を現した。

「……課長。貴方がここにいるということは、やはり」

「ああ。君は実に優秀な捜査官だ。私の下まで辿り着いたのだからね」

課長の言葉に、マキは表情を悲痛に歪める。信じたくなかった。この場に姿を現すのが別人であってほしいと願っていた。だが、現実是非情であった。課長つ。どうして貴方が、こんなことをっ!!」

「うむ……。闇というものは、どうやっても消すことはできないようですね。いくら消そうとしても、新しく生まれ出てしまう。ならばと、私は考えたのだよ。私自身が闇を管理すれば、不必要な広がりを防げるのではないかとね。そして事実、この街の夜は実に平

和になった」

課長の言葉に到底納得できず、マキは激しく抗議する。

「そんなっ！ どこが平和なんですかつ。街にはSDに精神を汚染され、街中にもかかわらず卑猥な行動に出る男女が後を絶たないっていうのにつ」

「フフ。いいじゃないか、男女が仲睦まじいというのは。真面目なマキくんには、なかなか理解できないことかもしれないがね」

課長がニヤリと口端を歪める。それは、マキがこれまでに見たことのない、邪悪な笑顔であった。

「くっ。課長！ 対策課捜査官の権限で、貴方を逮捕します！」

「ほほう。私を逮捕する、か。よろしい。ぜひ、やつてみてくれたまえ」

強化スーツ姿のマキを前にしても、課長は余裕を崩さない。マキは唇を噛み締めると、地面を思いきり蹴って、一気に間合いを詰める。振りかぶった右拳が、課長の頬を打ち抜こうとした、その瞬間。

「ガイーンッ！」

「くあっ?!」

マキの拳は課長の顔の寸前で見えないう壁に弾かれた。反動で、マキは大きく吹き飛ばされてしまう。

「うっ、く……シールド!」

「君達に強化スーツを与えている以上、私も反逆に備えて色々対策は講じていてね」

課長の笑顔は崩れない。歯噛みする

マキの背後に、エリーが慌てて飛び出してきた。

「マキッ。いったん退却しましょう」

「ダメよっ。さっきの課長の言葉は録音している。証拠は押さえたわ。でもここで課長を捕らえないと、手を回されて揉み消されてしまうかもしれない。おねがいっ。この街を守る為に、協力して、エリーッ」

「マキ……」

課長を睨みつける視線は外さずに、マキはエリーに懇願する。エリーはやがて、コクンと頷いた。

「わかったわ、マキ。やりましょう」

「ありがとう、エリー。それじゃ、私はフルパワーで課長のシールドを叩き割るわ。エリーは私の背後から飛び出して、その隙に課長を捕らえて」

「ええ。アナタの背中には任せて」

マキは身体を起こすと、足に力を溜めて飛び込むタイミングを見計らう。エリーはその背後で、電磁警棒を取り出して構える。

そして……マキが動き出すより先に、警棒の先端をマキの背中に当て、スイッチを押した。

「ぎやうっ?!」

「バリバリッ! と全身に強烈な電流が流れ、マキは悲鳴を上げて背筋ののけ反らせる。そして電流が止まると同時に、その場に倒れ伏した。

「……な……なぜ……?」

冷たい地面に頬をつけ、マキが呆然と呟く。この強化スーツを着用するよ

うになつてから初めての、全身への強烈な衝撃。それは、最高のパートナーであるエリーに絶対の信頼をもつて預けた背中から、不意に訪れた。

混乱しているマキの背中に、エリーはトスンと腰を下ろす。そしてマキのバイザーを外すと、両手をマキの顎にかけ、グイと背骨を折り曲げた。マキの口から悲鳴が漏れる。

「くあうっ!」

「ウフフッ。マキったら、背中がガラ空きなんだから。そんなにワタシのことを信頼してくれていただけなんて、嬉しいわ、マキ」

マキは、信じたくないという顔で、視線を後ろに向ける。しかしそこにあったのは、いつもと変わらぬ楽しそうなエリーの笑顔であった。

「フフ。エリーくんは、私の忠実な部下でね」

課長が足を踏み出し、マキの前に進み出ると、顔の前でしゃがみこむ。

「マキくんが私を逮捕しようとしていることを教えてくれてね。おかげでこうして対策を講じられたというわけだ。感謝しなければね」

「ウフフ。当然のことですわ、マスター」

「猫撫で声で課長をマスターと呼び、腫を蕩げさせるエリー。」

「そ、そんな……エリーが……」

最も信頼していた一人に裏切られ、マキは絶望に目の前が真っ暗になる。おそらくエリーの手になっている電磁警

棒は、対強化スーツ用の特殊なものでらる。スーツの特殊樹脂は硬直し、マキの身体の自由は著しく制限されてしまっていた。

「課長っ。エリーに何をしたの? エリーが私を裏切るなんてこと、あるはずがないわっ」

「キミは本当にエリーくんを信頼しているんだね。だがその信頼も、肉欲の前には無力だったようだ」

「ま、まさかっ。エリーにもSDを!」

「ククッ……さあ、どうだろうねえ」

パートナーを墮落させられたことに激しい怒りの視線を向けてくるマキに、

「さて。私はマキくんを買っていてね。これからも、私の下でこの街の為に働いてもらいたいのだよ。その為にもまずは、SDへの偏見を捨ててもらいたいのだ」

「ふ、ふざけないでっ。誰が貴方の下でなんか、ひやぐうっ!」

マキの抗議は途中で掻き消える。エリーが右手をマキの口の中に突っ込み、マキの舌を口外に引きずり出したのだ。

「もう、マキったら、おかないんだから。マスターの言う通りにしていれば、ノープロブレムよ」

エリーは普段と同じように、ニコニコと笑顔を浮かべている。その笑顔に、マキの背筋が寒くなる。

課長は注射器を取り出すと、マキの舌にチクリと突き刺す。そして中の薬

液を、ジワリジワリと流し込んでゆく。次の瞬間、マキの舌がカッと燃え上がり、ジンジンと激しく疼きはじめた。

「ひぐつ?! ひやぐうううーっ!!」

マキは瞳をクルンと裏返らせ、全身をガクガクと震わせて絶叫した。注射器を抜かれると、マキは痺れている両腕をなんとか動かして、手のひらで口を押さえた。空気に触れているだけで舌がジンジンと疼き、気が変になってしまいそうだった。

「SDは本来、カプセルに詰めて呑むもので、全身に媚薬効果をもたらず効果がある。しかしこうして原液を直接注射した場合、その部位は鋭敏な性感帯として開発されてゆくのさ。素晴らしいだろう。おや、マキくんには少し刺激が強過ぎたかな」

両手で口を押さえて身体を丸め、ヒクヒクと痙攣しているマキを見下ろし、課長が楽しそうに言う。しかしその言葉は、マキの耳には入らなかつた。(な、なんなの、この感覚っ。舌が疼いて、おかしくなってるっ。身体も熱くてたまらないっ。私の身体、いったいどうなってしまったの?)

マキは処女であり、自慰すらもしたことがなかつた。それゆえ、性的快感を味わうのが初めてで、どう受け止めてよいかわからなくなっていた。しかもそれが、常人の何倍もの快感であれば、なおさらだった。

「ウフフッ。マキつたら、戸惑っちゃって。セックスどころか、キスもまだ

だつて言つてたものね。ねえ、マスター。マキにキスを教えてあげたいんですけど、よろしいですか?」

エリーがマキの背中から立ち上がり、課長にしなだれかかる。その瞬間、逃げるチャンスが生まれたが、マキの身体は上手く動かない。頼もしかった強化スーツが、今ではすっかり拘束具に成り果てていた。

さらにSDの影響で、マキの肢体は子宮の奥から指先まで、呼吸するだけでジンジンと疼き燃え盛つてしまう発情した淫らな牝の肉体と化していた。マキはただ唇を噛み締め、自由にならない肉体を震わせて、地面に転がっているしかなかつた。

「ああ。たつぷりと教えてあげたまえ。蕩けるような極上のキスをね」

「はぁい。……ひあぁいんっ!」

課長にしなだれかかつたエリーが舌を垂らすと、課長はその舌に、マキと同じようにSDを注射する。エリーはたつぷりとした爆乳をブルンブルンと揺らし、心地よさそうな声を上げて絶頂した。

「ウフフフ……。マキ、ファーストキスで、アクメさせてあげるう」

エリーがバイザーを外すと、SDの影響か、その瞳は悦楽にトロロンと潤んでいた。エリーはマキを仰向けにするのと傍らにしどけなく腰を下ろす。そして口を押さえている両手を引き剥がし、マキの顔に覆いかぶさつてゆく。

「エ、エリー……。や、やめ……。んぷ

っ?! ふむむわうーっ!!」

弱々しく抵抗していたマキだったが、エリーの唇が重なり舌をペロリと舐められた瞬間、舌がジクツと痺れて全身をビクビクと震わせてしまう。

「ふああんっ。ウフフ。マキ、キスつてきもちいいでしょう。もつと教えてあげるわね。レロツ、レロレロツ。ひやうんっ。ペロペロツ、ネチョ、ネロオオーッ、ひあぁいんっ」

嬌声を上げ、自らもビクビクと肢体を震わせながら、エリーはマキの口内をベチョベチョと舐め回してゆく。SDの影響で、エリーの舌もまた性感帯と化しているのだ。

「マキ。これがキスよ。ディーブキス。SDでクリトリスの何倍も感じる性感帯になった舌には、ベチョベチョと舌を絡ませるディーブキスはセックス以上の快感なのよ。ステキでしょう」

「ひああつ。ふ、ふざけないでっ。わたしはこんなの、ひやぐううっ!」

抗議しようとしたマキだが、再びエリーに唇を塞がれ舌をねぶられると、たちまち抵抗を蕩かされてしまう。ジュールジュルとマキの舌を吸いながら、エリーは豊かな乳房をスーツ越しにマキの身体にムニムニと押しつける。

「ジュールジュル、ジュパツ。ほら、わかるでしょう。大好きなマキとこんな激しいキスができて、ワタシの身体もすごく悦んでいるの。乳首がコリッコリに勃起しちゃうてるでしょう」

「んぷ、んばあつ。し、しらないわ、

そんなのっ。ひうっ、きやふうんっ」

「アン。そんなこと言わないで。マキ、ワタシのバストと乳首をもつと感じてえ。ンチュツ、ンジュール、ブチュブチュウツ。」

……あら? マキの乳首もピンピンに勃起してるわよ。かわいいわあ」

「ンチュパツ、ダメツ、触らないでっ。ひあつ、はひいんっ!」

スーツにくつきり浮き出た乳首を指で転がされ、マキは甲高い喘ぎを上げて、湧き上がる快感にクネクネと腰をくねらせた。

絡みあう美しき部下二人を笑みを浮かべて見つめていた課長は、やがてしやがみこむとマキの両足をガバツと開かせた。そしてポケットから特殊ナイフを取り出すと、鈍く光る刃をマキの股間にそつと押し当てる。

「やめなさいっ。やめてっ! ……イヤツ!」

次の瞬間、特殊スーツはバラツと紙のように裂け、マキの秘裂が露になる。「フフフ。マキくん、ずいぶんとSDを気に入ってくれたようだね。キミのかわいいマンコはもう、トロトロに潤っているぞ」

「み、見るなっ! だ、誰がこんなこと、ひううっ、触らないでえっ!」

鋭く課長を睨みつけたマキだが、股間を軽くひと撫でされると途端に甘い声で悶え鳴いてしまう。課長はマキの様子を楽しそうに眺め、指でクチュクチュと秘唇を掻き回しはじめる。



「強がらなくていい。エリーくんとの
デーブキスで、身体は湧ききつてい
るのだろう。キミのマンコはもう、い
やらしい汁でグチュグチュだよ。ほら、
聞こえるだろう」

「ンアアッ。い、イヤッ、音を立てな
いでっ。私のアソコを触らないでっ」

マキは目に涙を浮かべ、ブンブンと
首を横に振る。初めて秘所を男に触れ
られたこともショックだったが、それ
以上に、いやらしく潤い卑猥な音を立
てる自身の秘所が信じられなかった。

「ウフッ。マキったら、マスターにオ
マンコを触ってもらえて、アンアンか
わいく喘いじゃって。カワイイわあ。
でも、アソコなんて言葉じゃマスター
は興奮しないわよ。オ・マ・ン・コ
さあ、言ってごらんさい」

「い、言わないわ、そんないやらしい
こと。誰が言うのですかっ」

「もう。強情なんだから。そんなマキ
には……オシオキよっ」

エリーは右手の指でマキの舌を引つ
張り出すと、舌の根元を歯でギリッと
噛む。そして左手の指で、マキの乳首
をグリグリと捻り上げた。

「きゃひいひいっ!! エリー、そ、
それりやめっ、ひやめてええっ!!」

舌から全身へと走り抜ける電撃のよ
うな強烈な刺激に、乳首の焼けるよう
な感覚が合わさる、マキは肢体をガク
ガクと暴れさせる。マキの理性が、ポ
ロポロと音を立てて崩れてゆく。

「ほら、言ってみなさい。オマンコよ、

チュパジュパッ、ほらほらあつ」

「ひいっ! オ、オマンコッ! 私、
課長にオマンコをいじられちゃってる
のおっ! い、言っただわ、これでいい
でしょっ。だから、乱暴にしないでえ
っ」

とうとうマキはエリーの手により、
淫らな言葉を口にしてしまう。

「フフ。マキくんの口から、オマンコ
なんて言葉が聞けるとはね。私も興奮
してしまつたよ。そろそろ、マキくん
の処女マンコを味わわせてもらおう」
課長は口端を歪めると、チャックを

下ろして股間をまろび出す。そのあま
りの大きさに、マキは目を丸くし、お
ののいてしまう。

「マキくん、キミは幸せ者だよ。SD
により痛みを感じずに、初めてのセッ
クスで絶頂のみを味わうことができる
のだからね。さあ、たつぷりとセック
スの快楽をその身に刻み込むがいい」

トロトロに湧ききつていながらも手
付かずのマキの小さな膣口に、課長の
亀頭がクニツと押し当てられる。マキ
はイヤイヤと弱々しく首を振る。

「や、やめてくださいっ。やめてえっ。
……ひぐっ、アヒイイーッ!!」

肉棒がマキの狭い膣穴を貫き、膣奥
をゴツンと穿つ。その瞬間、マキは身
体がバラバラになりそうな感覚に絶叫
し、のけ反ってビクビクと身悶えた。

「アアン、マキったら、すっごくきも
ちよさそう。マスターに処女レイプさ
れながらアクメしちゃうなんて、うら

やましいわあ。チュッ、ムチュウッ」

マキの凄艶な絶頂にあてられたエリ
ーが、火照った身体をくねらせながら
マキに抱きつき、唇を貪りだす。

マキは抵抗もできず、ただ天井を見
つめ、絶望と、そして身体の奥から生
じる未知の感覚に呑み込まれていた。

(アア……私の初めてが、課長に……。
ハッ!? な、何を考えているのっ。こ
の男は、犯罪者なのよっ。街を、私を
裏切った、憎むべき相手のっ! 悔
しいっ。こんな男に初めてを奪われて
しまうなんてっ!)

あるいは状況が違えば、マキは課長
を受け入れられたかもしれない。しか
し今の課長は、マキにとつて最も憎む
べき存在なのだ。屈辱、怒り、そして
悲しみ。マキは様々な想いに苛まれ
瞳から涙を溢れさせる。

(アア、悔しい……悔しいのに……。
どうして、こんなに身体が熱いの?
もどかしく痺れてしまっているの?)

しかし、そんな想いとは裏腹に、マ
キの肉体は熱く火照りジンジンと疼い
て、課長との繋がり悦びを感じてし
まっていた。

「マキくんのマンコは、すごく気持ち
いいぞ。熱く湧けながら、グチュグチ
ユと締めまりよくチンポを締めつけて
さすがは我が課のメンバーだ。この分
なら、最高のザーメン奴隷捜査官にな
れそうだな」

マキの膣穴の締めつけを堪能し、課
長がそううそぶく。そしてパンパンと

腰を叩きつけつつ、課長がパチンと指
を鳴らした。すると、全身を黒のタイ
ツに包み、勃起した肉棒だけを露出し
た男達が、十人ほど周囲に集まつてき
た。

「アンッ、アアンッ……な、何っ!?
イヤッ、み、見ないでえっ」

マキは悶えながらも慌てて顔を隠そ
うとするが、しかしエリーが邪魔をし
て阻まれてしまう。

男達は、扇情的なスーツ姿でレイプ
され喘ぎ鳴くマキの姿を見下ろし、無
言で肉棒をしごきはじめる。

「この者達は、SDの被験者でね。過
度の摂取により快楽に取り込まれて
少々理性は薄れているが、しかしその
分、性欲と射精量は折り紙つきだ。そ
して私の命には従順に従ってくれる。
私の許可がなければ射精できないよう
になっっているからね」

「ひうっ、な、なんて恐ろしいことを
……人を、なんだと思っっているのっ」
マキは悦楽に呑まれそうになりなが
らも、課長を睨みつける。

「ククッ。SDがほしいと言っただは、
彼らなのだよ。一生女を犯して暮らし
たい、とね。そのおかげで、こうして
キミのような美しい女性にたつぷりと
ザーメンをぶちまけられるのだ。彼ら
も後悔はないだろう」

「な、なんですつてっ!!」

驚くマキの眼前に、何本もの勃起し
た肉棒が突きつけられる。

「SDの本当の意味を教えてください。」

黄昏を一人歩む少女
その秘められた裏の顔とは――

3年の
おおがみなつき
大神奈月
センパイ!

成績優秀
容姿端麗の
完璧女子高生!

手折られた 破魔巫女

蒼い肢体は
妖魔に貪られ

漫画
COMIC

ハマちゃん

おまけに
スポーツも…
この学校の多くの
生徒が憧れてる
センパイよ…

ちよつと
無口で近寄り
がたいけど…

え!? あなた
あの人を
知らないの?

え?

あ!
あれは…!

…ここで
間違いないな

私が人と
馴れ合わないの
には理由がある

私には人に
知られては
いけない秘密が
あるから

キーン
コーン…



微弱だが
かすかに気配を
感じる…



やはり
いたか…!

あいつらの…
モノノケの
気配だ…!

見たところ
まだ下級の
モノノケか…



まだ
大した脅威
ではないな…

今の中に
消させて
もらうぞ…!

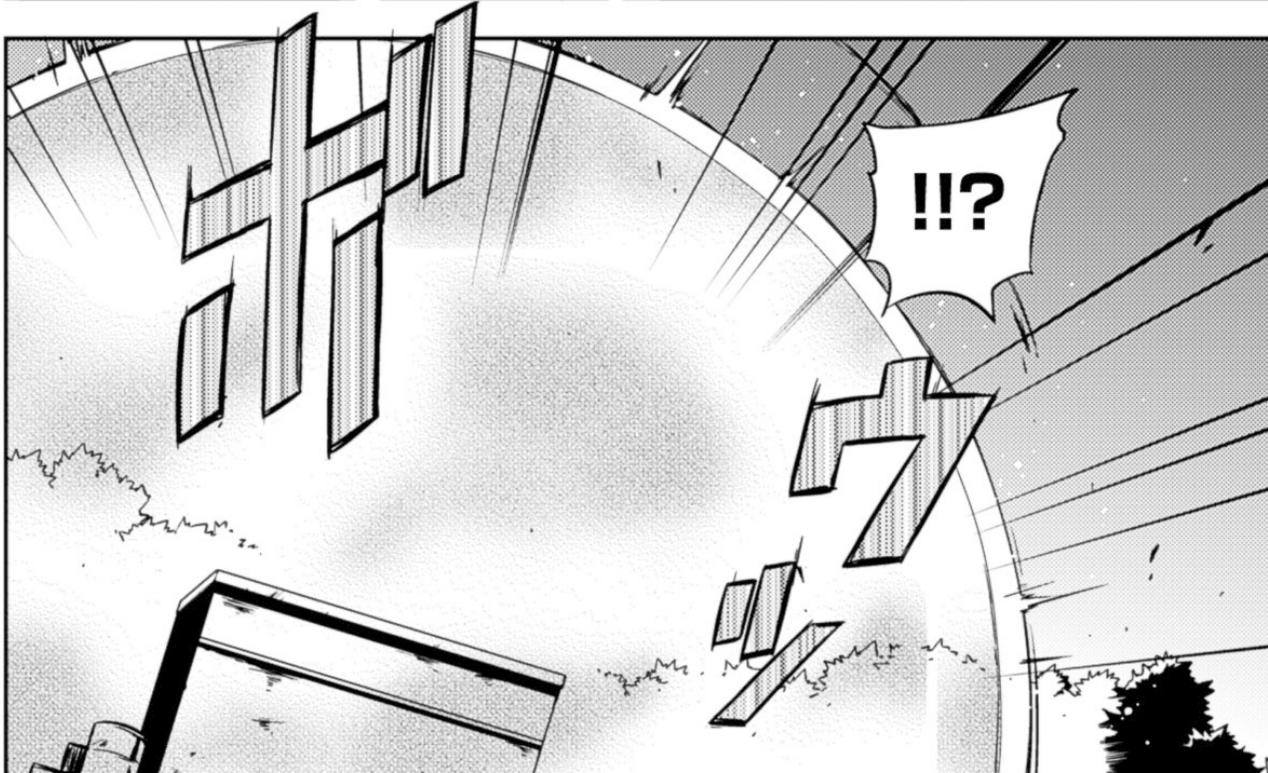


悪いが…
これで
終わりだ…!!



ふう…
遅いな…

そんな攻撃で
私を殺せるとでも
思っているのか？









勇者(実は魔王)とその仲間たちの
 ハチャメチャ冒険ストーリー!!!



シリーズ作品好評発売中!

無敵の姫騎士が
 DMに目覚めたようです
イラスト/池田謙宏



不死の吸血姫が
 DSのご主人様を
 募集しているようです
イラスト/にの子

邪悪な魔王が
 伝説の
 女勇者に転生した
 よめです

SATAN SEEMS TO HAVE BEEN REBORN FOR BRAVE GIRL

第二章 うれしはずかし産卵勇者!?

小説 NOVEL さかいひとし 酒井仁 挿絵 ILLUSTRATION ささひろ 笹弘

皿に山盛りになつてゐるのは、揚げたての海老のフリッター。

その横では魚介のたつぷり入った漁師風煮込みが食欲を刺激する香りを漂わせている。

「さあ、こつちの海藻サラダにはうちの特製ドレッシングをかけてくれ！」

健康そうに肥えたおかみさんがうずたかく盛られたサラダを置くと、少女剣士とその祖父は感嘆と共に目を輝かせる。

「うおおお〜〜ッ、いったきま〜〜す！」

「むほほっ、この海老のぷりぷり感と甘みは……はふ、はふふっ」

「ちよ、皿から直接食うなよジジイ！ つたく、行儀作法のできてない年寄りつてのは……」

祖父ケイレンの手をフォークで牽制する少女は少女で、煮込みの器をほとんど独り占めするように、ガツガツとかき込んでいる。

「うむむッ、魚介の味が濃厚なのに後口あとくちがなんて爽やかなんだ……この酸味、何かの柑橘類と見たぞ」

「おやお嬢ちゃん、鋭いねえ。この辺りの特産品、こいつの絞り汁が味の決め手さ」

そう言っておかみが投げて寄せた緑色の小さな果実の香りに、少女剣士にして女勇者、レスティーナはうっとり目を細める。

「ううん、サラダのドレッシングからも同じ香りがしてるな。こつちもうまそうだ。やつぱり海が近い町の飯はうまいよなあ……村じゃこんな新鮮な魚なんか手に入らなかつたし」

「お嬢ちゃん、見たところ旅の剣士のようにだけど、ずいぶん遠くから来たのかい」

「ええっ！ 私たちこそ伝説の勇者レスティーナとその勇敢なるパーティーッ。平和を乱す破壊神を

退治する崇高な旅に……ぐえっ」

「ウィル、飯食つてるときに立つな、バカ」

「ご、ごめん、ティナ。おかみさん」

ティナに襟を掴まれ、わりやり座らされた青年剣士は、何故かきこなく顔を赤らめる。

「ははっ、勇者さんのパーティーとは勇ましいねえけど、入り江の方には近づくかない方がいいよ。恐ろしい魔物が出るつてもつばらの噂だからね」

「は、はあ……」

ティナは青年の赤面に気づくこともなく、祖父の取り皿からフリッターを盗み食いする隙を窺いつつ、内心で次なる策を練っている。

（ふふふ……先日は失敗したが、まだ諦めたわけじゃないぞ）

美少女剣士にして伝説の女勇者レスティーナ。

しかしてその正体は邪悪なる魔王プロウ・プロウの生まれ変わり。再び魔王として君臨すべく、己の仇である破壊神を倒す旅を続けている。

（シユシユのヤツは私が魔王だつてとつくに知っていたが、ジジイとウィルに知られると面倒なことになる。早急に手を打たねば）

少女は品書きに目を走らせ、いちばん値の張る珍味貝の串焼きを三人前注文する。

「ティナ、ボクはいいよ。それはちよつと高い料理のようだし」

「バーカ、全部私のだ。おかみさん、フリッターも二人前追加でねッ」

「あいよ、毎度ありい！」

おかみさんの威勢のよさに微笑むレスティーナ、しかし心の中では世にも恐ろしい悪巧みが渦巻いていたのだ。

（クッククック……こうして浪費していけば、程なく旅の路銀は尽きる。そうなればパーティーで旅をするなどおぼつかなくなるはず。ふふふ、我ながら

己の非道ぶりが恐ろしいわ……）

ぐい〜つと名物の黒スグリジュースを呼ぶ。

そんなティナの顔を、黒フードを被った眼鏡の少女が無表情に見つめていた。パーティーの魔導師、シユシユは料理に手を付けてはいない。

自分の荷から取り出したクラッカーに、紫色とも紅色とも付かぬ謎のペーストをべそべそと塗りつけては、おちよぽ口で食べ続けている。

聞けば、これは魔導師にとって理想の食事なのでそうだ。

ティナは一度だけ味見をしたことがあるが、なんというか「舌が三六〇度ひん曲がつて元に戻ったよな味」としか言いようのない味だった。

その材料については、恐ろしくてどうとう聞けずじまいだった。

「……………ふう……………」

海辺の漁師町、先ほど食事を取った店からさほど離れていない通りを歩く青年剣士は、その背中にどつきりと荷を抱えたまま、溜め息をつく。

荷が重いわけではない。

剣士として、冒険者として鍛え上げたその肉体は、難攻不落と恐れられる霊峰にひよっこり登山しても苦にも感じない体力を誇っている。

ただ、靴からはみ出たものには少々問題がある。土産物屋で売っていた巨大な木彫りの面に砂時計に木刀。あるいは貝殻でできたカップパ人形にはいったいなんの意味があるのか。

だが、これはレスティーナの指示である。

旅の路銀を浪費させることでパーティーの財源枯渇を目論む、恐るべき魔王の悪巧みをウィリアムは知るよしもなかった。

青年の溜め息は「青春」の苦惱。「はあ……あの日以来、あのときのティナの姿が脳

裏に焼きついて離れないなんて」

下級モンスターである触手蟲に群がられ、半裸で悶えていた妹弟子の悩ましい表情。

火照った頬やたわわに突った真っ白な二つの肉球とピンク色の突起物は、健康な青少年にとつてはあまりに刺激が強すぎた。

(仮にも妹弟子をそんな邪な目で見るなんて！ まりてやティナは伝説の勇者なんだぞ)

ティナがどうして触手蟲ごときを相手に窮地に陥っていたのか。そんなことは多感な年頃であるウィリアムにとつては些末なことに過ぎない。

「それにしても……ティナもいつの間にかすっかり成長していたなあ。胸もそうだけど、腰つきとか、こうむっちりと安産型で……ハッ！」

思わず両手をわきわきさせていた青年は、あることに思い至り、荷を取り落としそうになる。

「ティナが見事勇者として破壊神を討ち滅ぼしたら、その後は一人の女の子として暮らすのが普通じゃないのか？ いつかどこかの男と恋に落ちて、結婚して、子どもとか産んじやって……」

みるみるウィルの顔が蒼白になる。

「こつ、恋!? 結婚!? どどどどこの誰とそんなッ、お、おとーさんは許しませんよッッ! いや誰がおとーさんだ、落ち着けウィリアム。だがそんじよそこの馬の骨になど、ティナは任せられないぞ。命をかけてティナを守り抜くとボクは誓ったんだ、い、一生をかけてティナを……一瞬たりとも片時も離れることなく、寝るときも風呂に入るときも手洗いに

行くときも……うぼはっ」

ぶぶつ、と鼻血を噴き出し、今度は茹で蛸のように赤面する。

いつしか町の子どもたちが取り巻いて、独り言と百面相を披露する青年を眺めていた。

そんなことにはまったく気づかず、ウィリアムは

美少女勇者と自分の甘やかな新婚ラブラブ生活を妄想してやに下がっていたのだった。

「……………ッ!? なんだ、何やらおぞましい妄念を感じたような。いや、それよりも続きた」

ばちばちばち……漆黒の魔力がプラズマ状に収縮し、手のひらに集まってくる。

「ハアアア……………」

先日まではどれほど集中しても開花することのなかった魔王としての力は、今やレスティナーの意志の元にコントロールされている。

「ファイナルッ、ダークサンダーッッ!」
バシユンッッ。

迸る闇の波動が大木に見事な穴を穿つ。だが魔王の転生であるところの美少女勇者は、自らの手を見つめて首を振る。

「我が最終興義ファイナルダークサンダー……しかし、あの破壊神に通用するとは思えぬ。やはりここは、新たな究極興義を開発すべきだろうか」

一人魔王の修練を怠らないレスティナーは、バツと右手を掲げ、目を閉じて精神集中する。

「むむむ……新たな技は新しい技名から。魔王のセンスと閃きによって、目覚めよ我が魔力!!」

技名はともかく、攻撃魔法の成否は破壊のイメージが大きく関わってくる。

己を滅ぼしたにつくき破壊神を打ち倒すイメージを心の中に構築し、その強力なパワーを右手に集中させ、言の葉が形作られるのを待つ。

(ファイナルダークサンダーを越える超必殺技……魔王にしか放てない究極すんばらしい攻撃魔法。よし、これだ!!)

「ウオオ……………」

無気味な呻き声と共に周囲の空気が歪む。空間が「バルバルバル……」と軋みを上げる。

カッと目を見開くや、少女の唇から恐るべき破壊の言葉が紡ぎ出された。

「魔王ッッッ!! ブレイク・ダークッ! サンダー……フェノメ」

「それ以上、いけない」

「のわあああああッッッ!!」
息もかからんばかりの至近距離にまで近づいていた眼鏡少女の白い顔に、ティナはバランスを崩してひっくり返りそうになった。

「シュッ、シュシュッ! 気配を殺して無言で近づくなつて何度言わせるッッッ」

剣士として一流のレスティナーは気配を読むことにも長けているはずなのだが、何故かこの少女だけはたやすく接近を許してしまう。

ただ存在感が薄いという以上の何かが、小柄な魔導師にはあるようだ。

「あやうくティナが人としてやってはいけないことをしでかすのを未然に防げた」
うんうんと一人納得して頷く少女に、レスティナーは長髪を振って肩を落とす。

「お前が驚かすから、技名を忘れてしまったではないか。ムムッ? 集まっていた魔力も消えてしまっている。これは」

「魔王の力、安定していない」

再び精神集中すると魔力は集まるものの、さつきよりもゆらゆらと頼りない。

「むう、安定させるにはあのとときのようなことをもう一度すべきなのか……ん、どうした」

くいくいと袖を引つ張る幼馴染みが、遠くに見える入り江を指さしている。

そういえば、食堂のおかみさんが「入り江に近づいてはいけない」と忠告していたことを思い出す。

「なるほど、入り江に棲むモンスターか、おあつらえ向きだな。というか、シュシュ」

「……？」

「お前は、本当にいいのか？ このまま私が魔王として覚醒したら、私はこの世を統べる本物の魔王になつてしまふかもしれないぞ」

ティナは少し声を低くしてすごんでみせる。

この無表情な少女の真意がいったどこにあるのか、ティナにも実はよくわかつていない。

「……私は——魔王になつたティナを、見たい、かも。しれない」

「そ、そうなのか」

「さあ、魔王の魔力を安定させるため、入り江のモンスターにえろえろぐちよぐちな目に遭わされに、れつらごー」

「いやな言い方をするなよ……」

釈然としなないものを感じつつ、入り江に向かう女勇者と魔導師。

そして二人が立ち去つた後、がさと草むらをかき分けて顔を覗かせたのは、白髭の老人。

「はて、二人揃つてどこに行くつもりじゃろう……ハッ、もしや！ 入り江でお肌を晒して水浴び!? 前回は何かバクレツソウの草原に迷い込んでしまつたが、今度こそ……」

頭を低くして孫娘たちの後をこつそりつつけるその姿は、ほとんど痴漢かストーカーである。

「あるいは人目を忍んで、ムフフで百合ん百合んな体験にでも耽ろうというのでは……祖父として、そのような非生産的でけしからんことは厳に戒めねばならぬのう、むっひよひよ……」

とても聖職者とは思えない淫らな妄想に頬を緩ませながら、ケイレンも入り江に向かうのだつた。

2

入り江の洞窟に棲む魔物の正体はすぐに知れた。

故郷の村での剣術修行には、魔族や魔物について学ぶ座学もちゃんどある。

魔物の棲みつく場所や生態を知つてこそ、一人前の剣士と言えるのだ。

「この生臭いにおい、食べ散らかした魚には牙の痕か……魚人と見て間違いなさそうだ」

水かきとヒレのついた手足と魚の頭を持ち、水辺に棲む魔物。

故郷の村にこそいなかったが、強さだけならレスティーナの敵ではない。だが、魚人どもを退治しに来たわけではない。

魔物に襲われることで相手の魔力を身近に感じ、魔王の力を活性化・安定するのが目的だ。

「よりよつて魚人相手とは……シュシユ、まさかわざとここを選んだんじやないだろうな」

なかなか洞窟の奥に入つていかないのも道理、雌雄同体の魚人には他の魔物には見られない、ある厄介な生態があるのだ。

「行かないの、ティナ」

「う……なんでお前は楽しそうなんだ」

「魚人特有の生態——他種族のメスに卵管を差し込み、卵を産みつける。卵の保護とも独自の文化とも言われているけれど、詳細は不明」

「魚人相手だと、そこは避けて通れない……それはわかつてるんだが、ううつ、想像するだけで気分が悪くなつてきた。だが、魔力を安定させるためにはそれしか……でも……ッ」

「さあ。卵管を色んなところに差し込まれて、生臭い魚卵を産みつけられに、れつらごー」

「れつらごー、じゃねえ！ もういい、お前はついてくるな、見られたくないッ」

意を決し、眼鏡少女に背を向けるとレスティーナはずんずんと洞窟の奥に入つていった。

水棲生物独特の臭気が奥に行くほど強まってくる

が、魔物の声らしきものはまったく聞こえない。(感じる……複数の気配、とつとつとこつちに気づいて、様子を窺っているな)

洞窟の天井には無数の割れ目があり、そこから差し込む日の光でかろうじて視界は確保されている。

水辺に慣れた魔物たちはわずかな岩陰に身を潜め、迂闊な侵入者を包囲しようとしている。

(ちえつ、相手の出方までわかっているのに、反撃もせず襲われるというのは、やつぱりなんか癩だな。けど、それが目的だし、うううう)

じり……じり……と包囲が狭まってくるのがわかる。一気に距離を詰めて襲いかかってくるつもりだろう、殺気が手に取るように感じられる。

レスティーナはのろのろと剣を抜くと、思いつきり棒読みで影に向かつて名乗つてみた。

「やあやあ、入り江に潜む魔物めー、このレスティーナ様が退治してくれようぞー」

「ギチッ、ギチギチギチギチッ」

堅いものを擦りあわせるような音と共に、背後から魔物が襲ってくるのを感じた。

振り向きざま叩き斬りたい衝動を懸命に抑えていると、背中をドンと突き飛ばされた。少女はばしやりと水たまりに膝をつく。

「うわー！ しまったー(棒読み)」

倒れた拍子にもものすごくわざとらしい仕草で、剣を水たまりに投げ込む。

「ギチチッ、ガリガリガリガリ……」

もはや気配を隠す気もないのか、ヒレを震わせながら、魚人がもう一体現れる。洞窟に巣くつているのはこの二体のつがいらしい。

魚人はヒレを擦りあわせることで、威嚇音を発しているようだ。

(これが魚人か……というか名前のまんまだな)

習つた通り、首から上は巨大な魚で、ぎよろぎよ

ろした目には高い知性は感じられない。

首から下は人間型、背中や肘、ふくらはぎに鋭いヒレがついているが、灰色の身体は鱗まみれというわけではない。

暗い灰色の身体はつるつとしていて、冷たく生臭そうだ。あまり触れたいものでないのは確かだ。

(こんな気持ち悪いヤツらに弄ばれなきやいけないのか……)

前後から距離を詰めてくる魚人たちは、ティナを繁殖の道具と見なしたようだった。

その証拠に、彼らの下肢の間から細長い管状のものが「ずるる」と伸びていく。

鞭のような、触手のような……異種族のメスに挿入して卵を産みつけるための卵管だ。

「お、おとなしくしてるから、乱暴はするなよ。ひやつ、つ、冷たッ」

背後から肩を掴んできた手の冷たさに、身を強張らせる。

前から近づいてきたもう一匹は、スカート部分の裾から伸びた、引き締まった太ももをべたべたと無遠慮に撫で回す。

ティナの肌の若々しさを確かめ、卵を産みつけるのにふさわしいかどうか確認しているのだろう。

ビスチエ状になった胸元、巨乳の谷間に縦に平べつたい顔をねじ込むようにすると、「ぶるんつ」と肉球がこぼれ出てしまう。

「ひゃひんつ、ぬらぬらして冷たい……くううううつ、や、やるならさつさとやってくれ。もつと密着してくれないと、魔力が反応しない……」

下等モンスターとはいえ、先日の触手蟲に比べる

と彼らの魔力は早くもレスティーナの魔力を活性化させ始めている。だが、魔王の強大なる力を安定させるには、もつと魚人と密着する必要がある。

「ひうう、そんな、べたべた撫で回すなんて……あ

うう、せ、背中に吸いついてくるな……ッ」

実際に、魚人が人間にどんなふう

に卵を産みつけるのかまでは習っていない。

だが彼らは手慣れているのか、少女の白い肌

に「ちゅつ、ちゅばつ」と口づけし、むき出しになった乳房やニップルを巧みに愛撫する。

(あ、脚に絡みついているのは卵管？

くねくねしながら、じわじわ這い登ってくる……わ、私の、私の中にこれを差し込むつもりなんだ)

ぞわわつとうなじの毛が嫌悪感で逆立つ。今さらながら、これから自分が魚人どもに慰み者にされると実感したので。

「キシキシキシ……ギギギギ」

ヒレの摩擦音のトーンが変わった。二枚並んだヒレを細かく振動させ、まるで会話をするようにリズムが早くなつていく。

(こいつら、いよいよ私に卵を植えつけるつもりなのか!? あつ、下着が)

ぬちよつと、と灰色の肌を濡らす粘液をなすりつけながら、魚人の指が小さな布地を引きむしるように脱がせていく。

卵管は太もものつけ根にまで迫っており、魔物の下腹部からは「ごぼつ、ごぼつ」と無気味な音が響いてくる。

(卵……産卵の準備をしてるんだ。やだ———なんか、怖い……!)

レスティーナの中で、魔王ではなく一人の少女としての意識がにわかに恐怖を感じる。

いくら魔王の力があるうとも、それは過去世での抵抗を覚えていた。

「ちよ、や、やつばやめとこうかな……くつ、この、馬鹿力が……ッ」

少しもがいただけなのに、魚人は獲物を逃すまい

と肩や腰をがっちり掴んで放さない。

いかにレスティーナといえども体術だけで彼らを振りほどくのは困難だ。

「シュルシュルシュル……シユフフフ」

羽音がさらに甲高く、卵管が乙女の股間をまさぐつてくる。

水かきのついた手で弄られたニップルはその冷たさに堅くしこつていたが、股間の花びらは無論潤つてなどいない。

それでも淫らな卵管は粘液を擦りつけ、先端をねじり込もうとする。魚人が前と後ろ、どちらの穴を狙っているのかわからず、ティナは羞恥と共に混乱する。

「え、ええつ、ど、どつちに入れようとしてるんだお前ら!? つていうか、どつちでもイヤだつて! あつ、いた、痛いッ」

「キリルキリルキリルッ」

ヒレを擦りあわせる音は、まるで無力な少女剣士を嘲笑っているかのよう。

「やだ、こんな……卵を産みつけられるなんて、孕まされるのと同じじゃないか……そんなのやつぱり気色悪いッ、は、放せえ……!」

これは強姦ではない、ましてや生殖ですらない。魚人たちはただ卵の育生場所としてレスティーナの肉体を利用しようとしているだけ。だがそんなことはなんの慰めにもならない

(偉大なる魔王の転生である私が、こんな生臭い連中に孕まされるなんて……ッ)

噴き上がる炎のような怒りと共に、破壊のイメージが心を満たしていく。

(コロシテヤル、我が肉体ヲ汚サントスル愚カ者ハスベテ……スベテ滅ボス!!)

破壊のイメージは少女の中で物理的威力を備えたエナジーとなつて、今にも迸りそう

だ。

だが、闇の魔力が放出される寸前、ティナの頭を白く細い腕がふわりと優しく抱き留めた。

「シュ……………」
「だめ。ちゃんと 魔王として真の覚醒を得なければ、元も子もない」

「ビビビビイイイッツツツ。」
気配もなく近づいていた黒ずくめの魔導少女に、魚人のヒレが驚き震える。

しかし銀髪の眼鏡少女から攻撃の意図は感じられない。愚かな魚頭の魔物は自分たちが九死に一生を得たことも知らず、少女がティナの唇を奪うのをじつと見守る。

「ん、んあ、ぶはあつ。お前ツ、お、女同士で、なんてことを……………あ、あひゃんっ」

意外な力で長身のティナに抱きついて舌をれろれる差し込んでくる。

れろっ、れる……………にゆるっ、くちゅっ。粘膜と粘膜が擦れあい、熱い唾液が互いの口内を行き来する。少女同士の口づけは単なる性欲以上に艶めかしく感じられる。

目を白黒させていると、シユシユは魔導師のローブの前をはだけ、スレンダーな肢体をさらけ出す。

なんと眼鏡の魔導師は下着を付けていない。
「わわっ、ぬるぬるした舌が入り込んでくる！ あ、甘い……………シユシユのよだれ甘い……………」

フーストキスを奪われたシヨックで、ティナの手足から思わず力が抜ける。

かくんとへたり込みそうになる腰を、魚人の手が背後から抱え込んできた。

下腹部を背後からゴリゴリと擦りつけてくると、完全に立ちバックで卵管を挿入する体勢だ。

「や、やばい、マジでヤバイってシユシユ！ んっ、ああっ、む、胸を押しつけたらしたら、乳首と乳首が、擦れちゃううううッッッ）」

魚人に弄ばれてしこつていたニッブルとシユシユの小さめの突起が摩擦され、じんじんと鈍い快感が波紋のように広がっていく。

そんなティナの姿に魚人たちはいつそう興奮したのか、背後から二匹の魚人が卵管をくねらせながら迫ってくる。

「ちよ、二匹ともこつちにきたら、確実に両方の穴を犯されるッツ。い、い、一匹はそつちに行けよほら、そつちだつていちおう女だぞ！」

「……………いちおう……………」
微かに不満そうにつぶやくシユシユに一方の魚人が気づき、シユシユの背後に回る。

眼鏡の少女は動じた様子もなく、むしろ自分から尻を突き出し、魚人を誘っているようにすら見える。

「ん、はあ……………相変わらず、よくわからないヤツだなお前は……………」

顔を離すと、唇と唇の間に唾液の糸が伝う。いつも無表情で真意を窺わせない幼馴染みの顔は

紅潮し、半開きの唇から突き出された舌が恐ろしく艶めかしい。

（げ……………こ、こいつなんか色っばい）
こんな状況にもかかわらず、ドキリとしてしまう。

ティナのような華やかな魅力とは違う、密やかで神秘的なシユシユの繊細な美貌を、レスティーナは決して嫌いではない。

かつて魔王だった頃の好みからすると、非常に嗜虐心をそそるといふか、敢えて乱れるシユシユを見てみたくなるというか……………

「つて、そんな場合じゃ……………ひゃあつ!! ちよ、そこお尻ツ」

異物感を感じたのは前ではなく、後ろ。
卵の産みつけ場所を求めていた魚人の卵管は、女勇者の菊門を探り当てていた。

たっぶりの粘液をすばまった口に染み込ませたか

と思うと細く尖った先端を「ずぶり」とアヌスに突き立ててきたのだ。

「んくうううっ! あ、ああ……………ツ」
見ると、目の前の少女も唇をぶるぶる震わせ、違和感を堪えている。

「ふ、太すぎ……………だろ……………ツ。前は前でイヤだけど、後ろも屈辱……………くううんツ」

「キシキシキシ……………ツツ」
向かいあわせになった二人の少女を押しつけた魚人たちが、ヒレを擦りあわせて歓喜の歌を歌う。

産卵場所を得たという喜びの歌だ。
（ちよ、直腸の奥にまでどんどん入って……………ま、魔王だった頃にも、掘つたことも掘られたこともないのに……………な、情けないツ）

細い卵管が身をくねらせ、挿入を深めてくる。粘液が潤滑油になつていたので痛みこそないものの、卵管と擦れる尻穴が熱く灼け、異物感は収まらない。

腸のどこまで卵管を差し込むのか、いったいいくつくらいの卵を産みつけるつもりなのかかわからず、ティナはおぞましさにわななくことしかできない。

そして……………

ぎゅむっ、ぼんっつ。
じゅずず……………ぐにゅ、ぐにゅうう……………肉が蠕動するよう無気味な音が聞こえ、卵管が跳ね回って内股にぶつかる。

「な、何……………なんだよこれ……………うぐうあああああああッツツ!!」

めりっ、めりめりめりッツツ。
突然の激痛は、尻穴を拡張される痛み。

「う、ぎい……………ッ。うああああああんっ」

めりっ……………ぼんっつ。
めこつ……………ぼんっつ。

（は、入つて、きた!! 魚人のたま、ご……………ほ、本

当に、産みつけられる、なんて……！」

痛みは最初の一個がアヌスを過ぎたところまでだった。

一度拡張された少女の肛門は、続けざまに送り込まれる球状のものを次々と飲み込み受け入れていく。

「ふあぁっ、あ、あっ……お尻熱っ？ くっ、こんなもん押し出して……お、押し出せない、た、卵で孕まされるウーッッ」

内臓を圧迫され、ティナは必死にいきんでみるが、魔物の卵は奥に奥にと流し込まれる一方。

同じく顔を歪ませつつ、眼鏡の魔導師がぼつぼつと状況を説明する。

「魚人の、卵……を、包む粘膜には、麻痺性を持った成分が含まれ……産みつけた卵が、排出されないようになって、い、る……っ」

「そ、そんな解説はッ、どーでもい……ひいひいんっ！」

アヌス拡張の痛みが引いたのも麻痺毒の効果か。しかしそのために却って、卵の一つ一つが卵管を移動し、自分の腹腔に産み落とされるのははつきり感じられる。

（くそっ、ただおぞましいだけならまだしも、なんか尻の穴がムズムズして、気持ちいいかも……；それにこれ、魚人の魔力だ……）

より内臓に近い卵管、そして生命の源ともいえる卵からも魔力が感じられ、レスティーナの魔王パワーがそれに反応している。

「ギチギチギチ……ギョリッ、ギョリッ！」

魚人たちはティナたちの腰をしっかりと固定したまま、順調に産卵を続ける。

しかしその格好はまんま立ちバックで犯されているも同然。この上、卵の魔力によがらされるようなことになったら、魔物に犯されてよがっているただの変態女だ。

それは避けたいと思っても、活性化する魔王の力に身を委ねるのは、正直とろけるほど心地良い。

「んっ、んふんっ。あつ、あん、また入ってくるううっ。ふひい、産卵、気持ちいい……ッ」

「ギョリリリッッッッッ！」

情けないと思いつつ、尻の穴が魔物の卵で満たされていく感覚に悶えるレスティーナであった。

3

「しまった……！ もう何もかもおしまいだ……！！」

がくりと膝をつき、青年剣士のうなだれた顔は絶望の色に染まっている。

「もう、おしまいだ……破壊神を倒す伝説の女勇者レスティーナとボクらの戦いは、これ以上続けることができないのか」

「がっん！ 握りしめた拳を何度も床に叩きつけ、青年剣士ウィリアムは慟哭する。

「ティナに渡されたメモの通りに買つてたら、路銀がなくなつてしまつたッッッッ！！」

それが魔王の転生した少女の悪辣な奸計とも知らず、素直な青年剣士はまんまと恐るべき罠にハマつてしまつていた。

「ウツ」

ふだんは糸目とどぼけた雰囲気ウィリアムは、顔をしかめて額を押さえる。

「うう、また額の辺りが妙に疼く……ダメだ、ボクがしつかりしなきゃいけないのに」

しかもぼんやりしていた理由はティナを女の子として意識していたからだなんて。

「と、通りでついうっかり結婚衣装の店なんか見ってしまったのはいけなかつた……」

しかし、妄想すればするほど幼馴染みの美少女勇者のウェディングドレス姿は美しかった。

そんなティナをお姫さま抱っこで抱きかかえ、新居で初夜を迎えることを想像すると、妄想はさらに激しくなつていく。

「ねえウィル、子どもは何人作るうかしら。最初は女の子、次は男の子がいいわ、一姫二太郎三ナスピつて言うものね」

「はっはっは、こいつらッ」

うふふえへへな激甘新婚スイーツなイメージが、純朴な青年をだらしなくやに下がらせていく。

「それに、こんなものまで買つてしまつたし……いや、これはボクのポケットマネーだけだ」

と、ポケットから取り出したのは貝殻でできたブローチ。

ティナのはしばみ色の髪に飾れば、少女の美貌がいつそう引き立つに違いない。だが自分にプレゼントを渡す勇気があるとも思えない。

「はあ、レスティーナ……」

ふと、何かに気づいたようにウィルは無人の部屋を見回す。

「ところで、ティナもシユシユも、ケイレン様もどこに行つたんだろう？」

「むむむ……これはなんとしたことじゃ」

岩陰に隠れた白髭の老人が、見るもおぞましい光景に息を殺してつぶやく。

「二人とも、あんな下級モンスターのときを相手に、何故抵抗もしないんじやろうなあ」

首をひねるケイレンの視線の先には、向かいあつて舌を絡めるレスティーナとシユシユ。

「ふあっ、んあぁ……シユ、シユシユ……んむっ、れちゅんっ」

「はあ、はあ……ティ、ナ……」

背後から少女たちの腰を抱え込んでいるのは、魚



面人身の魔物。

背中のはしを擦りあわせてギチギチ音を鳴らしながら、股間から伸びた管を少女たちの股ぐらに差し込んでいる。

管の中を卵が移動し、乙女の尻穴に送り込まれているのははつきりと見える。

「もしや、特別な術を用いて二人を惑わしているのでは……二人とも優秀じゃが、まだ年若く経験不足なのは否めまい」

うむうむともっともらしいことを言いつつ、老人の姿勢は何故か前屈みになっていく。

それも無理からぬこと、ティナの頬は赤く火照り、シユシュの指でニップルをこりこりつままれるたび、ひくひくと腰を震わせているのだ。

「孫娘の窮地を救えるのは、この偉大なる聖職者、白のケイレンをおいて他にはあるまいて」

ますます前屈みになる老人は、何故だか右手をそろそろと己の股間に伸ばしていく。

明らかに孫娘の痴態に欲情している老人は、聖職者どころか「性」職者そのもの。

祖父に覗き見されるとも知らず、美少女勇者は次々と送り込まれる球体に尻穴を広げられ、そのたびに悶える。

「んあああツツ、そ、そんなにいつばい、奥まで、入って……くるううっ」

しかし漏れ聞こえる声は痛みばかりではなく、尻穴を犯されて快感を感じているようにも聞こえる。

「いや、二人揃って術にかかることは考えにくい。何か深い考えがあつてのことかもしれん」

もはや老人の言葉はただ覗きを続行するための言い訳でしかない。

しかも呆れたことに好色老人は股間に差し込んだ右手をもぞもぞさせ、見るからに怪しい動きを始めたのだ。

「先日の触手に絡みつかれているティナもなかなかじゃったが、人型の魔物相手だといつそういやらしくて実に眼福、ではない、もう少し我が孫の深謀遠慮を見守るとするかの」

荒い息を吐き、肩をせわしなく動かし続ける。

「おほおっ!? 魚人のヤツめ、産卵が気持ちいいの腰をカクカク振り始めたぞ。なんとたる破廉恥な魔物よ……!」

東西南北どこからどう見ても変態覗き魔老人のケイレンに破廉恥呼ばわりされる筋合いは、魚人にもなかつたに違いない。

「おひよひよ、シユシュの控えめなお乳も趣があつて悪くないのう。ティナのたわわなおっぱいともども実にケシカラン……わ、わしも仲間に入れてもらえんものじゃるか」

「んああ……ツツ。ま、まだ入つてくる……ふわああ、お、お尻広がつちやううツツ」

にゅぷつ、にゅるるつ。粘液ででられてる卵管が妖しくくねる。

卵管を卵が通過するたびにアヌスが広げられ、絶妙な刺激に乙女の尻が熱く火照る。

「はあ、はあ……んっ。お、お尻に、もう卵産まないで……」

果てるともなく流し込まれた卵のせいで、腹部がぼつこり膨らんでいるのが、なんとも扇情的な光景である。

（くそ、いつたい……いくつ卵を産みつけられちまつたんだ……）

産卵の間隔は長くなり、魚人の鳴き声も細く、長いものになつている。産卵はそろそろ終盤に近いと思われた。

（うう、卵がごろごろ動いて気持ち悪い。苦しさがそれほどでもないのは、やはり卵の魔力を感じているせいか）

魔王の力の覚醒のために、イヤイヤ魚人に尻を提供している身としては複雑だが、胎内に収められた卵の魔力によつて、レスティーナの魔王パワーは確かになものになつている。

（それはいいけど、身体中が感じやすくなつていて、あううっ、シユシュのヤツ、さつきから右の乳首ばかり弄つて……!）

ティナと違つて魔力を受ける必要もない眼鏡少女は、同じように産卵されて相当苦しいはずだ。

なのに意外と涼しい顔をして、執拗にティナの首筋に舌を這わせたり、指でニップルを刺激するのをやめない。

「こら、シユシュ……この変態女ツ、い、いい加減に……はひやあんっ」

指先の小さな爪が突起物に軽く突き立てられ、びりびりと痺れるような快感に女勇者はあどけないよがり声を漏らしてしまふ。

「だめ。まだ……この程度の魔力じゃ、足りない。もっと神経を過敏にさせた方が、きつと有効」

「ちよつとおお……ツツ」

さすがは魔導師と言うべきか、いちいち言うことが間違つていないのが癪に障る。

確かに腸内の卵によつてレスティーナの力は飛躍的に活性化している。だが「もう少しあつた方がいい」という手応えを感じるのだ。

（でも、産卵ももう終わりみたいだし、いつたいどうすれば）

その予想を裏付けるように、魚人の腕が少女たちの腰から離れた。

「んんっ! ん、ふうう……ツ。お、おひり、抜けちゃ……ツツツ」

ずる……ずるる……にゅるるんっ。

粘液を滴らせ、卵管がアヌスを摩擦しながら抜け



この光は
魂…!!

こ…



何百人もの
人間の魂を
飲み込んでいた
私の中の…

力を失った
ミラルエルに
変化が!

一番奥に
のこされていた
魂…!!

槍の虜と 天使の光

漫画
COMIC

おおたたけし



「サキユバス
ディストニオン」
好評発売中!



この魂は
……!!

それも…

ウン…

前回までのあらすじ ● 子宮を犯され続けるマーニヤに対し、暴走天使だったミラルエルは—!?



さあ！
女神も魔王も
ふるえあがるが
いい！

お前らの力さえ
手に入れた
この虚空の槍で

今度こそ
お前たちの
世界を
消しさって
やる！！



?







たった一人の人間に無限の命を？

バカな!!

転生体だ
天使が人間の魂に自分の肉体をささげたのか!?



何っ!?

この槍を操っている...?
あいつは天使じゃない!



苦しめ
もつと
苦しめ...

この苦しみをすべて受け入れろ



見えるよ

槍の中にだれがいる

お前...

私が

お前が
殺したんだ

罰を
あがなえ!!

やらせるか

この死に
ぞこないの
天使が!!

リアリエル!

私です
リアリエル!
聞こえ
ますか!!

んっ
んっ
んっ

んっ



そうです！

このまま
槍と私の心を
つないで
おいて！

妹は私が
助け出します！

うん
がんばってね
ミラルちゃん！

このボクに
人間が逆らう
だって？

ボクが
君たちを創って
やったのに……っ！！

君たちまで
ボクを
裏切るのか！！

ちくしょうっ！

その天使の体を
吹き飛ばしてやるっ

裏切り者
なんかみんな
ボクの世界から
いなくなれ
っ！！

いけないっ
逃げて！！

『蝕区』シリーズで大人気の触手マイスターブランド

Lusteriseが送る新作退魔師陵辱AVGをクペライス!

日常に張り巡らされた触手の淫良に、
少女は搦め捕られてゆく……!!

気になるゲーム情報は166ページに掲載!!
描き下ろしの巻頭カラーピンナップも見逃すな!

蝕区

オトメ
〜処女を狙う黒い触手〜

原作 ORIGINAL Lusterise
小説 NOVEL すまっしゅぱんだ

挿絵 ILLUSTRATION ゆきむらはじめ
雪村一

「てつやあああああつ！」

可憐な少女の聲が、夜の校庭に響き渡った。少女の手には、闇を弾き力強く輝く一振りの霊刀が握られていた。

「ふう……これでこのあたりに巣食っていた妖魔はあらかた倒したな」

少女の足元には、両断された獣型の妖魔が三体、転がっていた。

「お、もう終わりか？ ご苦労さん」

そこへ、コンビ二袋を提げた少年がやってくる。

「……まったく、君には緊張感というものがないのか左源太」

少女に左源太と呼ばれた少年は笑う。「んなこと言っちゃって、お前になかなう妖魔なんていないだろ葵」

少女の名前は青葉葵。整った目鼻立ち。均整の取れたプロポーション。漆黒の髪は腰まで伸び、月光を弾くその色艶たるや、パーカーにプリーツスカートという俗な服装を勘定に入れても神々しい。

「だからと言って油断するな。というよりも何だそのコンビ二袋は。君には退魔師としての自覚はないのか？」

加えて男勝りな性格は、異性のみならず同性すら魅了する。

「俺には退魔師の素質なんてねえよ。できる事といえば、妖魔退治で疲れたお前にプリンを買ってやるくらいだ」

「まったく……君という奴は」

葵は短く嘆息すると、それでもうれしそうに微笑んだ。

「まあ、ありがたく頂くとしようか」

「んじや帰ろう。紗枝の分も買ったから、三人で食おうぜ」

「あいかわらず、君は紗枝に甘いな」

葵はそう言うのと、霊刀を収めてスタスタとひとり校庭を後にする。そんな葵の背中を見て、左源太は……それまでとは違ういやらしい笑みを浮かべた。

「まったくだ。だが……それもひとえに、お前達退魔巫女に復讐するため」

左源太は低く呟き、自らの手のひらを見つめる。そこには梅干の種に似た、ひどく不気味な色をした種がある。

「お前達退魔巫女は俺達妖魔から身を守る護符が子宮に埋められているが、この種をお前の体内に植えつけ精液を養分として開花させれば、その時の爆発的な妖気で護符は消滅するだろう」

左源太の顔がいやらしい笑みに歪む。「そうならばもうお前達はこれの俺……異華螺魔から逃れることはできん。力を吸って、吸い尽くし、俺の養分となつた後に、朽ちて果てる、退魔巫女」

左源太は、いや異華螺魔は妖魔の種を校庭へと放り投げた。すると、地面から生えた触手によって、種が絡めとられ、そのまま埋まっていく。

「そのために、この人間の身体を乗っ取ってまで屈辱の日々を過ごしてきたのだ。さあ、この俺を殺そうとしたお前達退魔巫女への復讐が始まる。既にこの学園の八割に、俺の触手が根を張っている。後は、畏に獲物がかかるのを、待つだけだ」

その瞬間、異華螺魔は胸を押さえた。

「むつ、ぐつ？ ぐおつ、ま、またか、貴様……左源太っ！」

「さ、させねえ。葵に手出しは、させねえぞつ！ あいつは俺の家族……血は繋がってなくても俺の大切な……」

「ええい、黙れつ！ 貴様はおとなしく見ていればいいのだつ！ 大切な女が、妖魔の触手によって穢されていく様をなつ！ クククツ、ハハハツ！」

異華螺魔は左源太の存在をねじ伏せ、荒く息をつく。

「ああ、はあ……そうだ、見ていろ。もうすぐだ。もうすぐ、俺をコケにしたあの生意気な退魔巫女を……」

「おーい、なにをしているつ！ さつさと帰るぞ左源太っ！」

校庭を出たところで、葵が振り返り、異華螺魔……いや左源太に声をかけた。

「ああ、分かったよ。今行く」

左源太はニヤニヤと笑い、歩き出す。深夜の校庭。外灯があるとはいえ、離れた場所に立っている葵には、その表情までは読み取れない。

そして……三日後。その時が訪れる。

肛門快楽責め
退魔巫女青葉葵の場合

ニチュツ、ジュルルツ、プチュツ。私は今、肛門を舐めほじくられている。「んっ、ふぁ……あつ、んっ」

椅子に腰掛け、私は……吐息を必死に押し殺している。

(こ、こんな……ことつて……)

授業中。チョークが黒板を打ち、生徒達のベンが忙しくノートの上を走る。どうしても漏れてしまう吐息はそんな音にまぎれ、かき消される。

(や、やめる……はあ、はあ……)

一番後ろの窓際の席で、私の肛門を触手が……犯している。椅子の座面から伸びたイボイボの触手が、舌のように器用に動き、パンスト越しに舐つてくる。既に触手はその先端の大部分を私の肛門の中へと捻じ込んでいる。

(くっ、卑怯な。じ、授業中でなければ、周りに誰も、いなければ……)

瞬きをするよりも早く、私はこの触手が擬態した椅子を、消滅させていただろう。しかし今は……

(入って……パンストごと、触手が……あつ、太い、舌が……入って……)

私のお尻は、椅子からやや浮いている。立ち上がろうにも、椅子から伸びた触手が私の腰を絡めとり、これ以上を許さない。かといつて腰を下ろしてしまえば、より深く、私の肛門を触手によってほじくられることになってしまう。私は汗だくになりながら、太ももに力を込め、中途半端な体勢でひたすらに触手の愛撫に耐えていた。

(はあ、あつ、んくっ、んはあ)

私の身体は、触手によって完全に拘束されてしまっている。制服の下を這いずり回り、四肢を絡めとり、自由を奪う。今の私にできることはただ、椅子に座らせようとすると触手の力に抗い、必死に腰を浮かせることだ。

授業中。チョークが黒板を打ち、生徒達のベンが忙しくノートの上を走る。どうしても漏れてしまう吐息はそんな音にまぎれ、かき消される。

(や、やめる……はあ、はあ……)

一番後ろの窓際の席で、私の肛門を触手が……犯している。椅子の座面から伸びたイボイボの触手が、舌のように器用に動き、パンスト越しに舐つてくる。既に触手はその先端の大部分を私の肛門の中へと捻じ込んでいる。

(くっ、卑怯な。じ、授業中でなければ、周りに誰も、いなければ……)

瞬きをするよりも早く、私はこの触手が擬態した椅子を、消滅させていただろう。しかし今は……

(入って……パンストごと、触手が……あつ、太い、舌が……入って……)

私のお尻は、椅子からやや浮いている。立ち上がろうにも、椅子から伸びた触手が私の腰を絡めとり、これ以上を許さない。かといつて腰を下ろしてしまえば、より深く、私の肛門を触手によってほじくられることになってしまう。私は汗だくになりながら、太ももに力を込め、中途半端な体勢でひたすらに触手の愛撫に耐えていた。

(はあ、あつ、んくっ、んはあ)

私の身体は、触手によって完全に拘束されてしまっている。制服の下を這いずり回り、四肢を絡めとり、自由を奪う。今の私にできることはただ、椅子に座らせようとすると触手の力に抗い、必死に腰を浮かせることだ。

授業中。チョークが黒板を打ち、生徒達のベンが忙しくノートの上を走る。どうしても漏れてしまう吐息はそんな音にまぎれ、かき消される。

(な、なんで、こんな、ことに)

それは、私にも分らない。いつもどおり授業を受けていたら、いつの間にか、拘束されていた。そして触手は私の肛門に興味を示したのだ。

(んふぁ、お尻……汚いの……)

触手は私の肛門をおいしそうに舐めている。ニチャツ、ニチュツと、パンスト越しに、ほじってくる。汚いはずだ、臭いはずだ。今は既に午後。私の股間は一日分の汗に蒸れて酸っぱい匂いを放っているはずだ。そして何よりそこはお尻の穴。排泄をするための穴なのだ。臭くないわけが、ない……

(な、なのに、なのに……)

触手はしつこくしつこく、私の肛門を舐めほじくる。私の肛門が犯され始めて既に三十分が経過している。

「あがつ、はへっ……あつ」

ゴリユツと触手がうねり、パンツの生地で敏感な直腸粘膜が削られた。私は思わず嬌声を漏らしてしまう。慌てて口を閉ざし、ノートに視線を落す。同級生の何人かは多分、私に視線を投げただろう。でも、幸い気のせいしか何かだと思ってくれたらしい、そのまま平穏に見せかけた時間が過ぎていく。

(ま、まずい……このまま、わ、私の、肛門……舐め、ほじくられたら……)

パンツは汗を、触手の分泌するヌルヌルとした粘液を、そして……私の膣穴から溢れ出る愛液を吸って……もう、ドロドロの、グチョグチョだ。

(こ、こんな……ので、わ、私……私

……か、感じさせられ、て……)

認めたくない。妖魔に犯されて、それも肛門をほじくられて、感じているなんて。でも、私の膣穴……オマンコは、どうしようもなく、濡れてしまっている。肛門をゴツゴツとした触手にほじくられ、かき回されるたびに、頭の中が真っ白になって、理性が蕩かされていくのが分かる。だめだと思っ

いても、今の私には、何もできない。(んはぁ、はぁ……はやく……授業、終わって、くれ……でないと、こんな……あつ、耐えられ、ない……)

私の身体は、限界が近づきつつある。膝がガクガクと震え、力が入らなくなる。このままだと、力が抜けて、椅子に、太い触手の生えた椅子に、全体重を乗せることになってしまいかねない。

「葵君？ 青葉葵君。さつきから呼んでいるんだがどうした。生徒会長ともあろうものが授業中にボーっとして」

先生が、私の名前を呼んでいた。いったいいつから呼ばれていたのか、先生は私の顔を見て、呆れたというよりも、心配そうな表情を浮かべていた。

「す、すみませ……あつ……」

先生だけでなく、同級生の視線までが集まる。そんな中、私は立つことができず、ただ膝を震わせていた。

「どうした、具合でも悪いのか？」

スカートの中で、肛門がグチュグチュとかき回される。その気持ちよさに、私は思わず俯いてしまう。

「す、少し……少し、だけ……」

私は震える声でそう言った。それが、精一杯だった。口を開けば、嬌声が漏れてしまう。私はそれきり、きつくきつく口を閉ざし、唇をかみ締めた。

「そ、そうか。まあ、無理はするなよ。辛いようなら保健室に行きなさい」

私が生理だとも思っただのか、そのまま授業を再開した。同級生達の視線も、先生に促されて黒板へと向けられる。助かったと思う……でも、何も助かっていない。私は今も……パンストごと肛門をほじくられているのだから。(んぎつ、はっ、はへぁあぁあつ！)

それまで肛門をかき回していた触手が突然引き抜かれ、そしてあろうことか、パンストごとパンツをずり下げた。(い、いやっ、やめる、やめっ……)

丸見えだ。触手に、舐めほじくられすぎてポツカリと開いた私の肛門が晒されている。逃げようにも逃げられない。戦おうにも戦えない。状況が、そして触手が、私から自由を奪い続ける。(んぎつ、あつ……)

私の肛門に、直接触手が捻じ込まれた。ピクツと、私は全身を痙攣させた。それまで散々いたぶられてきた肛門に突然そんな太い触手を捻じ込まれれば、私の身体は……

(あがつ、だめっ、ピクツて……ピクツて、なるっ……あぁあつ！)

イポイポの触手が、私の直腸粘膜をゴリゴリと削る。プチュツ、グリユツと下品な音が私の耳にまで届く。

(肛門がッ、あぁあつ！ めちゃくちゃ

に、かき回されて……はへえっ！)

触手が私の肛門を好き勝手にほじくる。先端がカリ首のように太くなったその触手は、イポと一緒に私の汚い肛門粘膜を引つ掻く。

(だ、だめっ、このままじゃ、あつ！あつ！だめっ、だめええええっ！)

触手が、ズロロロツと勢いよく私の肛門から先端だけを残して引き抜かれた。それはまるで、強制的に……ウ○チをさせられているような、そんな刺激を私に味わわせる。(はへっ、はっへええええっ！)

何度も何度も、私は擬似的な排泄を味わわれ、いつしか唾液を滴らせ、悶えさせられていた。私の肛門は、私の意思を無視してきつく締まる。当然だ、こんな異物を入れられているのだから、排泄しようとするのは当たり前前の反応。

(んはっ、んんっ！だめ、こんな……激しく、かき回されたら……)

でもその当たり前の反応が、私を狂わせる。肛門の中で、触手が太くなっていく。より激しく、より乱暴に、私の粘膜が犯されていく。

(私、お尻……肛門、犯されて、るのに、あつ……いやだっ、いやだっ！)

私は心の中で喚き散らし、必死に擬似的な排泄によつてもたらされる……快感を否定する。

「んぎつ、ひっ……あつ、んっ……」

否定する。否定したい。なのに……私の身体は、肛門は、こんな卑怯な、

妖魔の触手によって感じさせられていく。プチュツ……プチュツと、私の肛門が触手にかき回される。もう、だめだ……。頭の中が……真っ白で……。

「あ、だめっ！ いやあああああっ！」
触手がそんな私を嘲笑うかのように直腸奥まで捻じ込んできた。ジュブウツと、太いゴーヤのような触手に私の肛門が挟られ……。

「んくっ！ んっ！ んんっ！」

私はビクンツと身体を痙攣させた。

「あ、あつ、あつ、んああああつ！」

まるで獣のように、私の頭の中で言葉にならない嬌声が爆発する。

「な、なにつ、これっ、あつ！ んひいっ！ お尻の中に……肛門に、なにかつ、あつ！ 熱いの、入ってっ！」

それが精液だと気づくのに、あまり時間は要らなかつた。ドクンツ、ドクンツと、触手が脈打ちながら私の肛門に精液を吐き出ししている。

「あ、葵君……？」

絶頂を迎えさせられた私は堪えきれず、痙攣を起こしていた。身体が跳ねるのにあわせて、ガタンツ、ガタンツと、机と椅子が音を立てる。

「あ、だ、大丈夫……で、です……。すみませ……あつ……」

恥ずかしい。恥ずかしくて死にたくなる。なのに私の身体はビクビクと痙攣し、一向に治まってくれない。

「ああっ！ いやっ、いやあつ！ 見ないで……私を、見ないでっ！」

同級生の、特に男子の視線が私の身

体を貫く。幸いというべきか、触手は制服の下に隠れていて見えないはずだが、私がビクビクと痙攣をしていることに、変わりはない。

「んふあ、はあ、はあ……や、やつと、射精……終わって……」

すべての精液を私の肛門に吐き出し終えた触手は、ズルツ、ズルツと引き抜かれていく。

「んふあっ！ んひっ、か、完全に、ああつ！ 触手、抜け……た……」

ブポツと音がして、私の肛門から触手が引き抜かれた。散々犯され、ポツカリと開いたままの肛門を私は慌てて閉じる。今の射精で妖魔は力を使い果たしたのか、私の身体を拘束していた触手は瞬時にして塵と化していく。

「す、すみません……体調がやつぱり思わしくないの、保健室に……」

「あ、ああ……誰か付き添いを」

「だつ、大丈夫です。私ひとりです」

私は自由になった身体で立ち上がり、と、逃げるようにして教室を後にした。

「はあ、はあ……あくつ、んふあつ」

廊下を歩く私を、激しい排泄欲求が襲う。それもそのはず、私の腸内にはさつき妖魔に出された精液が、たっぷりと詰まっているのだから。

「んくっ、はあ、はあ……と、とにかく……と、トイレに……」

誰もいない廊下を、私は壁に手をつきながら歩いていく。散々に犯された私の肛門は思うように力が入らず、走

ればすぐに漏れ出してしまいかねない。ゆっくり、ゆっくりと、私は額に脂汗を浮かべながら廊下を歩く。

「はあ、はあ……早くお腹……痛い……早く、早くっ、しないとっ！」

今にも肛門が決壊し、排泄物が漏れそうになる。私は祈るような気持ちでそんなことを呟きながら、歩く。

「だめっ、漏れるっ漏れるっ！」

一秒がまるで、一分のように感じられる。早く、早く、トイレに、トイレに駆け込みたい。ドロドロに濡れた下着をずらして、便座にお尻を乗せて……

「ああっ、だめっ、漏れるっ！」

「いやあつ……絶対、絶対、そんなの……そんなのっ、いや、いやあつ！」

私は必死に菌を食いしばり、壁に手をつきながら歩き、十分をかけてようやく女子トイレにたどり着いた。

「はあ、はあっ、はやく、ああっ、漏れるっ、もれちゃうっ！」

トイレが近づくほどに、肛門が緩む。もうここまで来ると、いつ漏れ出してもおかしくない。一番近くの個室に駆け込み、鍵をかける。

「漏れるっ、出るっ、出るッッ！」

スカートをめくり上げるのももどかしく、私はパンストと下着に指をかけた。下り下りそうとした。しかし……。

「んぎひあああああああつ！」

私は、一瞬何が起こったのか分からなかつた。私がパンストをずり下ろす前に、私の肛門が何かによってこじ開けられていた。便器に腰を下ろす間も

なく、私の肛門から排泄物がブリュツとひり出されることもなく、太く熱いエラの張った触手が入り込んでいく。

「そんなっ……ここにも、妖魔……」

この時の私の心を支配していたものは、怒りではなく、絶望でもなく、驚嘆でもなかつた。また、犯される。トイレに……便器に擬態していた妖魔に、私はまた犯される。ただその事実だけを、私は認識していた。

「あがつ、んぎあああああつ！」

私は、悲鳴とも嬌声ともつかない声を発していた。当たり前だ、私のお腹の中には、いまだにたっぷりと精液混じりのウ○チが溜まっていて、それを出そうという時に触手で犯され……栓をされたのだから。ウ○チを出すことに頭の中がいつぱいで、トイレに妖魔が化けているなんて、考え至らなかつた。完全に無防備だった私の肛門に捻じ込まれた触手は、教室の時よりも数段荒々しく私の直腸粘膜をかき回す。

「んひっ、ひっ、あがああああつ！」

触手は私のことなど構いなしに、プチュプチュと抽送を続ける。まるで私の肛門を使ってオナニーをしているかのようなぞんざいな扱い。そしてその認識は正しく、触手はすぐに私の肛門内へと、精液を吐き出した。

「あへっ……んっ、んんっ！」

ただでさえ限界を訴えている腸内に、更なる精液が撃ち出された。ビュクツ、ビュルツと、私の耳にさえ届く音を響かせ、射精し続けている。

「あへっ……んっ、んんっ！」



「やめっ、はへっ、あへえっ！　いっばい……私の中、もう……」

私は注ぎ込まれる新鮮な精液の熱さに腰が蕩けそうになる。しかし私は必死に理性にしがみつき、快感に耐える。「もうっ、出すなっ、あがあっ！」

便器の中から飛び出した触手が、私の四肢を拘束している。足を無様にも蟹股に開かされ、肛門を突き出す格好を強いられている。射精を拒もうにも私の手が後ろ手に拘束されていてはどうしようもない。

「あはっ、んふあっ、あっああっ！」私はただ、間拔けな格好を強いられたまま、無防備極まりない肛門に精液を注ぎ込まれるしかなかった。

「ひやめろ……あはあ、こ、肛門が……あはあ、と、溶ける……」

教室にいた間中、私の肛門はずっと舐めしやぶられ、かき回され続けてきた。触手の抽送を執拗なまでに受け、擬似排泄を味わわされるうちに第二の性感帯として開発されてしまっている（な、なんで、これ……こんなっ、きもちっ、いっ……んひっ……）

真っ白に染まる頭の中、そんな言葉が浮かんで、消えていく。気持ちいい、気持ちいい。しかしそれは、退魔巫女として絶対に受け入れてはいけない禁断の感情だ。私は必死に頭を振り、その言葉を追い出す。

「はひっ！」
そんな時、私の全身を、ゾクゾクッと悪寒が駆け巡った。一瞬ではあるが

爆発的な妖気を感じ、子宮が直後から熱を持ち始める。

「な、なんだ、これは……か、身体が、急に、熱っぽく……」

妖気を浴びすぎると女は発情させられてしまう。しかし退魔巫女は子宮に埋め込んだ護符の力で、その妖気から身を守っている……はずだ。

（なのにつ、なのになんで……。私の護符が、効いていないということ、なのか、これは……）

鼓動が激しくなり、身体だけでなく、顔や耳までが熱くなっていく。膣穴からは愛液が染み出し、ショーツはもとよりパンストにまで染み渡り、太ももにまで染みを広げている。

「あ、うあ……もう……やめ……」

これ見よがしに、私の目の前を触手が動き、股間へと近づいていく。その触手は今までのそれとは異なり、ひどく醜悪な……まるでドリルのような形をしていた。私がそんなことを思っていると、その触手はギューイイイイッと回転を始めた。ドリルのような……ではなく、事実ドリルなのだ。それが回転しながら、私のパンストの中へと入り込んでいく。

「うあ、うあっ、あがああああっ！」私は恐慌状態に陥る。しかしそんな私を嘲笑うかのように、ドリルは回転しながら、私の膣穴をその先端でつつく。肛門を犯され、そして膣穴……私の処女までもこいつは奪おうというのか。いや、退魔巫女である以上、いつ

かこういう時が来るかもしれないとは思っていた。でも、それが今だとは……まだ、私は自分の好きな男にも……身体を許していないというのに。

（い、いやだっ、やめろっ！　ああっ、やだっ……は、入って、くるっ！　なんでっ、どうしてっ、護符は……どうして機能しない……やめろっ、このままじゃ、このままじゃ……）

ギョルルルツと回転しながら、触手は私の処女穴に入り込んでいく。

「ひっ、あっ、あがああああああっ！」

私は声の限りに叫んでいた。恥も外聞もなく、髪を振り乱して抵抗する。必死に膣穴を閉じ、入り込もうとする触手を拒む。それでも、触手はそれ以上の力で膣穴をこじ開ける。処女膜は限界まで伸ばされ、今にも千切れ飛びそうになる。

「んひっ、んひっ！　やめろっ、あっ、やめろっ……私、まだ……まだ初めて……ああああああっ！」

私はあらゆる限りの憎悪を込めて触手を睨みつけた。だが相手は妖魔だ。思考能力はなく、ただ女を犯すという本能に従うだけの存在。そんな相手を睨んだところで意味はない。意味はないのだ。でもそれが分かっている。睨まずにはいられない。数年間守り通してきた処女が奪われようとしている。その時に、笑ってなどいられるものか。「こ、ころしてやる……。殺してっ、殺してやるぞっ！　入れてみる……お

前を骨すら残さず、消し炭に……」
処女膜が破れた。

「あっ」

呆気ない。本当に呆気なく、一生に一度きりの体験が、終わった。もう二度と、私は処女には戻れない。これから一生、私は妖魔の触手に処女を無理やり散らされた女として生きていかなければならない。もつとも、妖魔に犯されて普通の生活に戻れるなんて思うほうが、おかしいのかもしれないが。

「あっ、ぎっ、あがああああっ！」

私は破瓜の痛みを悲鳴を上げていた。目じりから涙をこぼし、破れたばかりの処女穴を蹂躪するドリル触手の刺激に耐えようとする。

「さ、左源太……」

どうして今、左源太の名前を私は口にしたのか。そのことをなぜか冷静に考えている自分がいた。私はその時、ようやく気づく。私は、左源太のことが好きなのだ。しかし……もう遅い。私は……私はもう、妖魔に、触手に、こんな場所で、よりによって、トイレなんかで、処女膜を、破られたのだから。私にはもう、普通に恋をする資格はないのだ。

「んぎひっ、んあああああっ！　やめろっ、あっ！　動いて、中で、あっ！　前と後ろ……そんなっ、だめっ、動くなっ、動くなあああああっ！」

私の膣穴と肛門とを、二本の触手がかき回している。ともに一時間前は誰の侵入も許したことのない穴を、今で

くっ
クッッ!

ひッ

た…助けっ…

ハアアアアッ!

姫騎士紅麗の
ロースタイル見参!

ぐああああッ!

退けッ!

戦意無き者は
武器を捨てよ
既に勝敗は決したッ!!

もはや貴様等に
勝利などないッ!
速やかに投降するのださもなくば

我が軍が誇る最強の
鋼の精鋭兵達と…



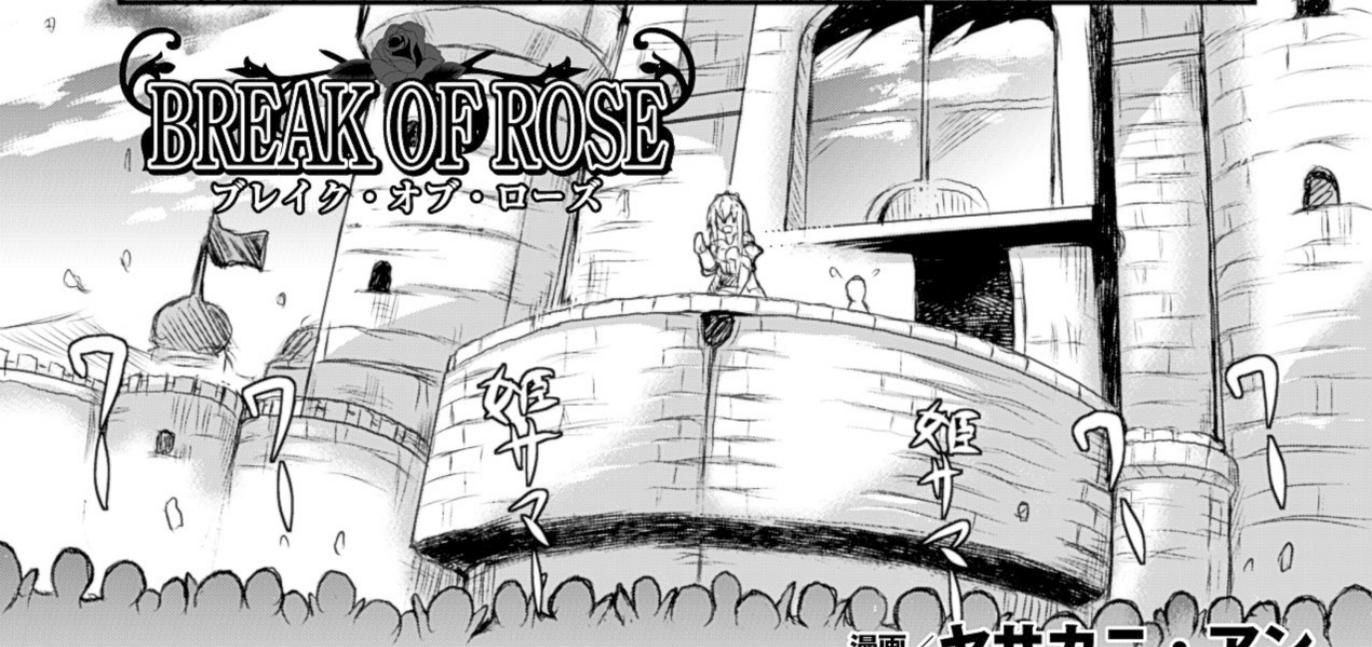


この
紅麗のローズメイが
貴様等の血をもって
この場で赤い薔薇を
散らす事になるだろう!!

憶えておくが
いいっ!

BREAK OF ROSE

ブレイク・オブ・ローズ



漫画 COMIC ヤサカニ・アン



姫様っ
まだ戦の後で
お疲れでしょうに

あまり無理を
なさってはお体が...

気になる大臣よ

ここに居る
民達の笑顔や
声を聞いて疲れなど
吹っ飛んでしまったわ

ですが...

まったく...
くどいぞ?
大臣は...



国の繁栄を築き
民の笑顔と幸せを
守る為に私は
この世に姫として
産まれて来たのだと
思っている

それに我が父
ガーベラ王がこの世を去り
民達が不安になってる今だからこそ
その意志を継ぐ者が皆の前に立つ
事に意味があるのだ

ううっ…姫様っ
なんてご立派な…!
ガーベラ王も天国で涙して
喜んでおられますぞっ!

今夜行われる
王位継承の儀式を
迎えるのに
大変相応しい日に
なりそうですなっ!

うむ…
そうであったな!
大臣よ支度の方は
整っているのか?

はいっ
もう既に準備は
出来ておりますぞ
姫様っ

こうして迎えられた
王位継承の儀式の日
…私は
十二名の高僧に
祝福を受けながら

亡き父の意志を継ぎ
皆に王として
迎えられて行く…!

—以上をもって
ここにローズメイを
王位継承者とし
ガーベラ王として
認める事をここに示す

そなたに
神の祝福が
あらんことを…

王になることで
民と国の皆が
安心出来るのなら
私は…

そして…



屍しかばねの上に築かれた
呪われし王たる者に
黒き神の鉄槌を



ひ…姫様ツ？

ローズメイ
様っ！



…姫には少し
眠ってもらってる
だけです

そう…王になった
ばかりの姫には
宴うたげの華なまけになって
もらわなければ…



賊がツ!! 司祭に化けて
ローズメイ様に
近付きよってツ!!

貴様ツ!
一体姫様に何を
したのだツ!!

私の黒の宴を
飾るのに相応しい
紅い薔薇にね…

きゃめめめ！

何だッ？

城から
触手のような
モノがッ！？

!?
な…なんだ!?

ち…
地中からッ!?

んっ…

…あれ…
…ここは…
…一体…

私は…

!?

ようやく
お目覚めに
なれましたか
ローズメイよ…

だ…誰だ!
貴様はッ!!

…!?
お前達ッ!

姫…様…

な…なんだ
これは!?

…触手が…
…ぐっ…ぐっ!
振りほどけないッ!

フフフ：初めまして
私の名は、バカラと
申します

先代ガーベラ王にご挨拶を…
と思いましたが亡くなられた様では
貴方に代わりをして
もらわなくてはならないですね

んああ！
ひあああ…っ！

一体貴様は
何者なのだっ！

何の目的があつて
こんな仕打ちをするっ！
支配と権力を得るのが
目的かっ！

支配？ 権力？
そんなものには
興味はありません

私が興味あるのは…

貴方達への
復讐です…

隷娼騎士 リアリス

たかお かち から
小説 / **高岡智空** 挿絵 / **niko**
NOVEL ILLUSTRATION

怨嗟に捕らわれた麗しき令嬢騎士は
排泄娼婦へと姿を変える！



冬を目前にした冷たい空気が、痛い
くらい肌に突き刺さっている。

いや、実際は城の建築デザインや大
きな二重窓、それに遮光カーテンのお
かげで、それほど外の寒気が室内に影
響を及ぼしているわけではない。

ただ、自分の置かれている状況が部
屋の空気を冷たく感じさせるのだ。

「……………これより……………は、はし……………
たない、い……………い、ん……………の……………」

思ってもいない言葉を口にする屈辱
その羞恥が頬を熱くさせ、少しだけ寒
気が和らいだようにも思えた。

腰まで伸びる艶やかな黒髪を床に垂
らし、跪いて三つ指をついた緑眼の少
女は、悔しそうに唇を噛む。

「はしたない、淫売のつ……………わ、わた
くし、が……………できうるかぎり、お客様
のおもてなしを、させていただきます
ので……………ど、どうぞ、ご寵愛、くださ
い……………ませ……………」

周囲の男女が椅子に腰かけて自分を
眺め、ニヤけた笑いを浮かべているの
を把握しながらも、彼女はそう口にし
るしかなかった。

（このような恥辱を……………ですが、これ
も国のため……………くっ！）

光を跳ねて輝く黒髪とは対照的な
透き通るように白い少女の肌にはサツと
赤みがさす。

（ああ、なんとということでしょうか……
……国を守る騎士であるわたくしが、ま
さかこのような格好を……………）

桃色に上気するか細い肢体を包むの

は、下の肌が透けるくらい薄い絹地の、
黒いコルセットのような下着。

ブラのカップは卑猥なシースルーで、
たわわに実った豊乳がたゆんだゆんと
はしたなく揺れ躍っているのがよく見
える。むっちりとした柔らかな太ももの付
け根を覆う布地も、股間を剥きだしに
する扇情的なデザイン、これまた黒
い、大人びたショーツだった。

（……………いいえ、これもわたくしのせい
……………わたくしの力不足が、すべての原
因なのですわ……………）

暗く沈んだ表情に苦悩を滲ませ、少
女は王が遠征に出るからの、自らの動
向を思い返す……………。

◇

北方大陸の覇国、ダリアノークスの
若き王が、蛮族平定のために東方遠征
に出たのは、即位して僅か半年後のこ
とだった。

当然、その間の代理を任されたのは
国の貴族たち。中でも特に有能と見ら
れた二人の若き当主が、内政と軍備
それぞれの権限を与えられていた。

そうして二ヶ月——与えられた重任
にもなんとか慣れたころ、ようやく若
き王の心配をする余裕が生まれた貴族
騎士の少女は、執務室にて苦悩に頭を
抱えていた。

（もうふた月……………一度として陛下から
の早馬はありませんわ。もちろん、そ
んな余裕がないことくらいはわかって
いますけれど……………）

額を隠す程度で前髪を揃えた黒い口

ングヘア、陶器のように滑らかで白い
きめ細やかな肌、宝石のごとく淡く輝
く緑色の丸い瞳、咲き綻んだ桜花のよ
うに可憐な唇——王女と紛うほどに美
しく、清楚で神々しく見える少女。

勇ましいプレストプレートと愛らし
いロングスカートを身を包む彼女こそ、
王から軍権を託されたフロレンス家
の当主、リアリスである。

ただ——いまの彼女の頭にあるのは、
遠征に出た婚約者でもある若き王、グ
レンのことだけだった。

（こんな気持ちを抱えて過……………すくらい
なら、無理やりにでもついでに行ってい
れば……………あぁ、グレン様！）

「ちよつと、リアリス！」

「えつつ！ あつ、はい、なんでござ
いましょうか、フィオーヌ様！」

テールにガンガンと頭をぶつける
奇怪な行動に、メイドたちも声をかけ
られなかった中、見かねたように声を
かけたのは、濃紫色の短い髪を指先で
弄ぶ、赤いツリ目の美女だった。

「いつまでそうしているのかわからな
いけどね、陛下が遠征に出られた理由
も、わかってあげなさいよ」

「は……………も、申し訳ございません」

王の不在に国政を任された、ダリア
ノークスの筆頭貴族シャスレウォル家
の当主、フィオーヌの言葉に、リアリ
スはシュンと肩を落とす。

「……………ま、気持ちはわからないでもな
いわ。なにしろ、愛しいフィアンセが
危険な地に赴いているのだから」

ストリートな指摘を受け、カァーッ
と顔が真っ赤に染まってしまふ。それ
を見て呆れたようなため息をついたフ
ィオーヌは、論ずように続ける。

「……………ただその陛下は、自分が王に相応
しい人間だと国民たちに示すため、遠
征を決めたのよ。隣国との戦争を勝利
に導いた先王や、それに命を賭した貴
女の父上——そして貴女にも負けない、
己の武勲を示すためにね」

「わかつております、そのことは……………
ですけれど、心配は心配で……………」

モジモジと指を絡ませて物憂げな表
情を見せるリアリスの姿に、これは処
置なしとばかりに、フィオーヌはまた
も深くため息をつく。

「は……………そんなに腑抜けていて、国
を守っていきけるのかしらね」

「……………そ、それはもちろん！ 騎士として
防備を任されたのですもの、この身を
投げだしても果たす所存ですわ！」

家と自身の誇りのため、覚悟を示す
ように、表情を引き締めて訴える。

「国内の見回りは強化し、騎士たちの
鍛錬も怠っておりません……………いついか
なる状況に陥っても、勇猛に戦ってご
覧に入れましょう」

キョッと唇を固く結び、覇気に満ち
た瞳をフィオーヌに向けて、リアリ
スは心からの想いを伝える。

「……………それが、亡き父上の誇りを守る、わ
たくしの矜持ですもの」

「……………そう」

雰囲気の一つかり変わったリアリス

の姿に、紫髪の美女は息を飲んで小さく呟くも、すぐに頬を緩ませた。「ふふ、ごめんなさい。だけど、それだけの覚悟を見せてくれるのなら、頼りにさせてもらおうわよ」

——そんな話をしていたときには、リアリスは心から思っていた。

この国だけはながあつても、自分たちで守つてみせるのだ——と。

騎馬の巻き上げる土煙、響く剣戟の音と、騎士の氣勢を上げる声——

城門の数里先に広がる平野は、いまやすっかり戦場と化していた。

「やはり油断なりませんわ、フアブニアという国は……先王の締結された停戦条約はまだ、十年以上も期間を残していましたのに……」

条約を破り、宣戦布告もなく隣国が侵攻してきたのは、フィオーヌと会話をしていた直後のことだった。

落とされた砦からの早馬を聞き、すぐさま迎撃の準備を整えたリアリスは前線で指揮を取り、勢いに勝る敵軍を足止めしていたのである。

（数はあちらが半数ほどですが、状況は五分……ここはなるべく被害を減らし、民の避難を済ませ、籠城にするべきですわね……）

城内での民の先導はフィオーヌに任せ、何人かの騎士もつけている。あとは城内から連絡が来れば、速やかに兵を引いて城に籠るのみだ。

（備蓄食料は全国民の二年分……城壁

を上手く使えば、被害なく退けることができるはずですよ……）

とにかくいまは、この野戦での被害を限りなくゼロに抑えることだ。

そう考えながら相手の陣形を見極め、後退のタイミングを図るように兵を動かしてゆく、と。

「おおおお——つつつ！」

思いもかけぬ音が城門の向こうから響き、リアリスは思考の中断を余儀なくさせられる。

「つつ?! な、なんですの、いまの声は……城壁の内側で、なにが……」

いまの間違いなく関の声——その瞬間、嫌な予感が胸をよぎる。

（そんなはずは……わたくしたちが城門を固めているのに、敵が入れるはずも……つつ!）

軋む音を立てて、城門脇の古びた木扉が開かれる。そこから現れたのは、憔悴した様子の紫髪の美女だった。

「フィオーヌ様?! こ、このような所に出てこられては……いえ、それよりも城内でなにが……」

城門まで駆け戻り、口早に問いかける。それに彼女は微かに首を振り、ささやくように答えるのだった。

「フアブニアの工作兵が……ごめんなさい、リアリス……民が人質に取られては、どうにもできなくて……」

微かに身体を震えさせながら、フィオーヌが顔を伏せる。悔しげに固められた拳と目元に光る滴からも、彼女のやりきれない感情が伝わってきた。

「工作兵の侵入を許したのは、わたくしのミスです……フィオーヌ様がお気に病むことではありませんわ。ともかく、こうなつては……」

やりきれぬ思いを抱えながらも冷静に状況を捉え、リアリスは戦場に白馬を歩ませる。

「リ、リアリス様?! いまの声は……」

……よもや、城内に敵がつ……」

関の声を聞いて動きの鈍った戦場の騎士たちが、次々に状況を問いかけてくる。ともすれば暴動でも起きかねない動揺が広がっているのを感じ、リアリスは表情を引き締めると、胸を張って声を響き渡らせる。

「——静まりなさい！」

氣迫溢れる騎士少女の声に、馬上の騎士たちもピクツと身を竦ませる。

「動揺は敵に付け入る隙を与えるばかり、まずは落ち着くことですよ……大丈夫、わたくしにお任せなさい」

守るべきものは一つだけ——それを思いながら、敵軍後方へ歩みを進めたリアリスは凛とした声で告げる。

「フアブニアの国王陛下に、ご拝謁を願いたく存じます」

民に、そして懸命に戦った彼らには、なに一つ責任を負わせはしない——。「此度の戦を終わらせ、民の保護をお願いしたく、会談の場を設けさせていただきます……どうぞ、城内にお入りくださいませ」

「ふふふ、お初にお目にかかる。ワシ

がフアブニア国王のラダムIIアドリオットだ。貴女の英断により、双方に大きな害が出ることもなく戦争を終えられたこと、誠に感謝しておるぞ」

見慣れた城内の会談室、楕円形のテーブルを挟んで向かいあう、敵国の王からそんな言葉をかけられるが、耳にその内容が入つてはこなかつた。ただ、心の奥から湧き起こる怒りが全身を震わせ、叫ばずにはいられなくなる。

「こ、これは……いったいどういうことですの?! お答えください！」

「ふむ、それは条約を破り、貴国に攻め入つたことか……それとも……」

不敵に笑う太った国王がチラリと隣席に視線を向けると、それを受けた女性——紫髪の美女が、いやらしく唇を歪めて言葉を継ぐ。

「あたしがフアブニア側の席に座っていることかしら? あはははは、無様なものね、リアリス! 王の寵愛の上に胡坐をかいた結果、国を守れなかつた騎士の姿というものは!」

豹変したようなフィオーヌの嘲笑に、リアリスは絶句させられる。

向こうには国王ラダム、側近の将などに加え、フィオーヌを含む数名のダリアノークス貴族が座り、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

対するこちらは自分一人。相手側には給仕のメイドまで控えているというのに、孤立無援の状態だった。

「……裏切つたと、そういうことですのね……フィオーヌ様!」

ブニアのものとなる」

——などと、どのように解釈しても人権など欠片さえも考慮していないとわかる、最低の申し出だった。

(こ、このような……まさか、これが目的だったとでもいいのですか?)

リアリスの尊厳を踏みにじるためだけの文面、とても承諾などできない。

「ふっ……ふざけないでくださいまし! わたくしが……ダリアアノークスが、こんな提案を呑むなど……」

「あらあら、拒絶できる立場かしらね、リアリス国王代理?」

怒りを剥きだしにする騎士少女の態度も、美女はクスリと微笑んで受け流し、隣のラダムに視線を向ける。

「この条約を締結すれば、少なくともダリアアノークスの自治権は残るのであぞ? まあ、自身が大事というのであれば、国民を犠牲にするがよい」

「ふふふ……帰ってきて国が植民地になつていけば、グレン陛下もさぞ嘆かれるでしょうねえ」

「うっ、ぐ……ううっ、くううっ! 貴方がたは、いったいどこまで卑劣なことを……恥をお知りなさい!」

そう叫ぶも、国と国民を盾に取られてはどうすることもできなかった。

「……なぜ……なぜのですか? わたくしにそうさせること、ファブニアになんの利があると言うのです!」

「わからなかな? この国の顔であり、剣であるお前を奪うことで、勝利した証を立てる——それがワシの目的だつ

たということだ。もつとも、公用娼婦にするという条約内容にしたのはフィオーヌだかな」

その言葉を受け、紫髪の美女がクスリと妖艶に微笑みを浮かべる。

(そ、んな……それほどまでに、フィオーヌ様は、わたくしを……)

根深い恨みと憎悪を感じ、心が締めつけられるように痛くなる。

だが、悩んでいる暇はない。自分さえ犠牲になれば——騎士として、ここに選択の余地はない。

「こ、これで……よいのですか……」

リアリスは震える手に羽ペンを持ち、時間をかけて羊皮紙に名前を記入する。父から受け継いだ誇り高い家名を、低俗な約束事のために書くことは、まるで父をも汚されたように思えて我慢できなかった。

「どれ……ふふ、いいわよ。貴女が娼婦として売り渡される、国際条約の証明ができたわね。いかがかしら、次期王妃の座から一転……公用娼婦に落ちぶれた気持ちは? あははははっ!」

(~~~~~)~~~~~(~~~~~)

恥辱のあまり憤死してしまいたいようなほどの怒りを燃やしながらも、自らのサインに重なるように押印された家印を見ると、その瞬間——心の中でなにかが砕けたような気がした。

(ああ……申し訳ありません、グレン陛下……わたくしは、もう……)

王家に名を連ねるわけにはいかない、貶められた貴族となったことを心から

詫げる。本来であれば、この気持ちを慰めてくれたのはフィオーヌだっただろう。けれどその彼女は、いまや自分を貶める側に立っている——それが、どうしようもなく辛かった。

「さて、これでめでたく条約が締結されたわけだが……それではさっそく、試させてもらおうとしようか」

「え……こ、これ以上、なにをさせよう……?、きやああつ!」

背後から二人の兵に両腕を取られ、机に上半身を押しつけるように倒され、拘束されてしまう。

「なにをすすんですのつ、無礼者!」

「あら、無礼なのは貴女のほうよ、リアリス? 公用娼婦の分際で、国民様に逆らうだなんて……ねえ?」

薄ら笑いを浮かべたフィオーヌがそう問うと、ラダムも舐めるような視線を向け、こちらに迫ってくる。

「むふふ、大陸中に名を轟かせる美女が娼婦となるのだ、所有国の王として、味見せねばなあ」

「なっ、なにをおっしゃって……ひっ、やっ……いやあああつ!」

腰回りに触れるゴツゴツとした手の感触に、嫌悪感が背筋を撫で上げた

「刹那、ドレススカートが一気に足元まで引きずり下ろされる。」

「ほおおつ、これはこれは!」
ストラリと伸びた脚線に突き刺さる、中年男のねつとりとした視線を感じ、カアアツと耳元まで赤く染まる。
「みっ……見ないで、ください……く

つ、うっ、うううんっ……」
肌を隠そうとするも、屈強な兵たちによって手首はテーブルの上に固定され、膝を掴まれて脚を肩幅の倍以上に押し広げられたまま、腰が動かぬような体勢を取らされる。

「たつぷりと肉のついた、よい尻をしておるではないか……肌も雪のように白く、染み一つないとはな!」

「ひっ、やっ……きやうううっ!」
脂ぎった手が尻肉を撫で上げ、ムチムチと張りのある肌を揉みしだくように滑ってゆく。嫌悪感が一瞬にして背筋を伝い、リアリスは腰をくねらせて逃れようとする。けれど——。

「どうしたリアリスよ! そのように尻を振りおつて、そんなにワシの手が気持ちいいのか? ぐふふふっ!」

動けない状態でその仕草は、まるで相手の手にお尻を擦りつけ、はしなく媚を売っているようにしか見えな。擲楡する下卑た声に頬を熱くしながらも、唯一自由の利く頭を振る。

「そっ、そのようなことありませんわ! 貴方のような人に触られて、誰がっ……ひうっ!」

震える声で叫び返すと同時、太い指先が左右の尻タブを鷲掴みにし、思いきり割り開いてくる。汗で濡れた肌に冷たい空気の流れを感じ、背中がビクンツと跳ねてしまう。

(いやあああつ! み、見られてしまますっ……お願いですわ、し……下着だけは……ひやうううっ!)

「むふふ、邪魔な布切れたな。たつぷりと汗を吸って、美味そうな匂いを立たせておるが……ほれっ！ ほほおつ、出てきおったわ！」

ナイフで断ち切られ、濡れたショーツがグチョリと床に落ちる。割り開かれた尻房の奥で怖気に震える、不浄の窄まりに視線を感じ、騎士少女は羞恥と悲しみに絶叫を上げさせられる。

「ひっ……きやあああつっ！ いやっ、み、見ないでえええつ！」

「これを見るなどというのは冗談がキツイぞ？ ほう、これが美と武で大陸に名を響かせる、貴族騎士のケツ穴か」

「きやうううっ?! さ、触るのはありませんわっ、やっ……ひいっ！」

太い指に菊の窄まりをつつかれ、キウウツと括約筋を締めつけて自衛の姿勢を見せてしまう。その恥ずかしい反応まで見られている恥辱に身体中が熱くなり、動かないとわかつていながら、恥部を隠すために両腕をバタつかせずにはいられなかった。

「み、見ないでっ……いやあつっ！」

「ふははっ、桃色の肉をいやらしく、ヒクヒクと蠢かせおつて！ おお、動いてはいかんど。抵抗するなら、条約は破棄ということになるからな」

押しつけられた指先が、キツく締まった肉皺を解すように、螺旋を描く動きでグリグリと圧迫された。

「あぐっ、うっ……くふううっ、ひっ……卑怯、ですわあ……んんうっ！」

秘すべき菊皺を穿られる屈辱に、全

身から嫌な汗が溢れる。けれど、そんなリアリスの嫌悪感など気にもせず、括約筋をこじ開けた爪先が、腸粘膜壁をカリカリと引つ掻き始める。

「はひやあああつっ！ あうんんっ、やっ、ですわ……お、やめ、にい……」

「ふむう……なかなか柔らかいアナルではないか。しかし、さすがに貴族の令嬢であっても、ここの匂いだけは、そこらの女と変わらぬわ」

「くっくっ！ なにをおっしやいますのつ、ぶ、無礼……きひいっ！」

不潔な尻穴の臭いを嗅がれ、耳を塞ぎたくするような恥ずかしい指摘をされて、羞恥に身悶える。けれどそれを糾弾する間もなく、声は悲鳴にすり替えられてしまう。

「な、にいっ、お……んくっ、くあああつっ?! あひゅっ、うううっ！」

——ズリユウユウ……ニチュ、グチュ……ズリユウユウ……

僅かな隙間を押し広げ、ナメクジのようなヌルつきが菊皺を覆うように這い回り、腸奥へ滑り込んでくる。大きく頭を跳ねさせ腰を震わせた瞬間、脂ぎった肌の感触が尻肉に挟み込まれ、谷間の汗ばんだ体臭を思いきり吸い上げられたのを感じる。

「ひっ、やっ……ま、まさかっ……いやあああつっ！ やめっ……おやめなさいっつ！ あああつ！」

「んぶっ、じゆるうう……ぶははっ、ぐふふっ、やめるわけがないだろう。大陸一の美女の尻だ、奥の奥までその味

と香りを愉しませてもらうぞ」

「いやっ、いやあああつっ！ あふっ、んうううっ……きうっ、ひっ、ひふうううっつ！」

唾液に塗れた舌先が菊皺をペロペロと舐め上げ、不浄の肉壺を押し広げるように突き刺さってくる。

「ぐじゅっ、べろっ、べろおお……むふふっ、いやらしい不浄の匂いと味だな、リアリス……」

抜かれては埋め込まれ、腸粘膜をくまなく舐めしゃぶられて、菊皺を犯される——排泄のための器官を男の味覚に晒すという変態じみた行為に、心が張り裂けそうだった。

（し、信じられませんが……）

なんの目的でこのようなの……おかしい、異常すぎますわっ、この変態っつ……いやあつ、やあああつっ！

お腹の中を吸いだされるような感覚にヒクヒクと腰が跳ね、脚が弛緩してみつともなくガニ股になる。緩みきった括約筋は、だらしなく肉皺を開いたままにして、腸奥が外気に晒される。

「むっふふ、いい味じゃったが……どれ、次はこちらだな……」

「んっつ……くひいっ！ あひっつ、そ、こはああ……ひううっ！」

尻に突っ込まれていた顔が脚に沿って滑り、黒い恥毛に覆われた秘部に髭面を擦りつけられる。

「ほほう、まったく触れておらぬマンコが、すでにドロドロとは……フィオーヌ、これはどういうことかな？」

「まあ……それが真実なら、リアリスはケツ穴をしゃぶられ、だらしなく感じて股を濡らした、淫売の変態女ということなのではないかしら」

わざとらしい二人の会話が耳に突き刺さり、リアリスは恥辱を噛み殺しながら顔を伏せることしかできない。

（こ……このような、こと……）

リアリスとて、貴族の家に生まれて王家と婚約を果たした身だ、それなり

の性知識は持ち合わせている。そして、人によっては性器の濡れやすい体質の女性もいると知っている。だから自分がそんな体質だったと聞かされても普通ならば耐えられた。

けれど、このような異常な状況で、性器でもない尻穴を舐められてはしたない状態にされたという事実——それを敵国の王や騎士、さらには同性にまで見られたということが、誇り高い騎士少女の心に深く爪を突き立てる。

（さ……最低っ！ 最低最低最低っ……最低ですわっ！ こ、このような辱めを……わたくしが……っ！）

声が溢れそうになるのを、血が滲むくらい唇を噛み締め、なんとかこらえる。しかし尻奥を舐めていた男の舌は、容赦なく膣に襲いかかってくる。

「んひいっ、はくっ……う、はっ……んあつ、ああ……ひいんっ！」

——ズツ……ニチュツ、グチュウウ

「……ブチュツ、クチュウ……」

太ももを滴るほど大量に、ドロドロと陰唇から流れる蜜液を吸り上げられ、

腰がガクガクと震えてしまう。

「っは、あぐっ、ううんっ！ んはっ、やあっ……あひゅっ、ひい……」

蕩けた牝の細胞をヌラつく舌がつつき回し、淫肉を掻きだすように舌がぐねり、ニチュニチュといやらしい音を立て、挿挿を繰り返す。

（うあっ、ああああっ……ひうんっ、の、飲まれ、て……ます、わっ……あひっ、ひいっ！）

大量の牝蜜を、ラダムが喉をゴクゴクと鳴らして飲み下すのを耳にし、屈辱で頭の中が塗り潰される。

けれど、穿られる淫壁は舌先の感触にビリビリと痺れ、下腹部が迸る甘刺激に貫かれる。こんな卑劣で、醜悪な男にそんな感覚を与えられることが悔しくてたまらないのに、予期せぬ部分を擦られると背中が大きく震え、目の前に火花が飛び散らされる。

「きゅああああっ！ ひっ、やっ、そこおっ……んくっ、くうんっ！」

「おぶっ、んじゅぶうう……ふはははっ、感度はよいようだな。さて、もうひと押しというところか……」

「んんんうううっ!! ひあっ……」

鼻先で膣口を刺激するようにグイグイと顔が押しつけられ、そのまま伸ばされた舌が、陰唇の上部をチロチロと舐め擦ってくる。

——グリユッ、レロツ……レルンッ！ チュブツ、グリユウツッ！

包皮を剥き上げて勃起していた濃桃色の肉芽が、舌先で完全に露出させら

れ、淫肉に押しつけられてしまう。

（だめっ、ですわっ……あきゅっ、んっ、く……りゅうっ……ひはっ、こ、れえ……きちやい、ますのおっ！）

胸の奥を焦がす炎がジワジワと広がり、自分が自分でなくなるような恐怖に全身を包まれた、刹那——。

「んひいっ、はっひゅうう——っ！ ひはあっ、はぎっ、ひきいっ！」

ヒクついていた肉真珠が粘膜に押し潰された瞬間——頭の奥で神経が灼き切れたように、パチパチッと激しい電流が弾け飛ぶ。

「んきゅっ、ふやっ……ひぐうううっ、あぐっ、んああああんっ！」

キャパシテイを超える圧倒的な肉悦が、下腹部に注ぎ込まれ、目の前が真っ白に染まる。ガクガクガクウツッ！と壊れたカラクリ人形のように脚が痙攣し、ラダムの顔上にドロドロになった陰唇を密着させて腰かけながら、そのまま動くことさえもできない。

「ふやっ、はひっ、ひいひい……」

キュウツと太ももを締めつけ、相手の顔を挟み込んだままで、ビクビクと下半身が蠢動する。股間から噴きだすおびただしい量の淫水を男にぶっかけてしまう羞恥に、全身は茹で上がったように真っ赤だった。

（ひっ、やああ……うっ、くう……こ、こんな、これ……ぜ、絶頂を、させられてえ……あぐっ、ううっ！）

身体中にまったく力が入らず、騎士たちが手を放すと、たちまちテーブル

から滑り落ちてしまう。ガニ股の股間とお尻を突きだした伏せのポーズで床に伏す騎士少女の頭上から、聞きなれた美女の声で嘲笑が響いてきた。

「くっ、ふふっ……あははははは、みつともない騎士様だわ！ ほらっ、だらしなくお尻振ってないで、さっさと立ちなさいよ！」

扇子の先で尻房を引つ叩きながら、フィオーヌの言葉は続く。

「これくらいじゃ、全然足りないのよ？ あたしの理想の未来のため、貴女にはとことん惨めな……もっともつと汚らわしい、生きているのも辛いと思うほどの屈辱を与えてあげるわ」

そう締めくくると、フィオーヌは控えていたメイドに指示をだす。

「お色直しよ。衣装とメイクを彼女に……ふふ、手を抜かないようにね」

「はい、かしこまりました」

絶頂の余韻に身体中を弛緩させたりアリスは、心の奥で呟いていた。

（な、にを……んくっ……た、企んでいますの、フィ……オー、又……）

◆

会談室の床に跪き、成立した条約締結書の前で、娼婦であることを宣言する屈辱の口上を述べさせられたリアリスは、震えながら歯噛みする。

（わ……わたくしは、なんということを……自分が許せませんわっ！）

身体は清められ、意識と身体の状態はいつもの感覚に戻っている。しかし——だからこそ、先ほど受けた忘れが

たい仕打ちがはつきりと脳裏に刻まれており、消え入りたくなくなるような羞恥と燃え滾る怒りに震えさせられる。

（しかも、この姿っ……こ、これがフィオーヌの公用娼婦だなんて……なんと軽薄で、慎みのないっ……）

先ほど、姿見で見せつけられた姿——淫らな下着に包まれ、顔に色濃いつけでケバイメイクを施したあれが、いまの自分だなどと信じられない。

アイラインを濃く縁取られ、唇を厚く見せる派手なルージュを引き、肌は必要以上に白く塗られていた。首筋には娼婦であることを示す、男女のマークが絡みあった記号が描かれ、手足の爪もピンク色の薬品で色づけられている。髪型は子供っぽい二つ結びに変えられ、常に笑みを強要される——それがいまの、リアリスの姿だった。

「ぐふふ……なかなか娼婦姿が似合っつておるではないか、リアリスよ」

「そうねえ。もしかしたら天職なのかもしれないわよ、よかつたわね？」

椅子に腰かけて自分を見下ろしている二人の言葉に、リアリスはキュッと拳を握って怒りをこらえる。

「それじゃ、娼婦が天職になるよう、技術も磨いておきましょうか……ほら、なにをしているの、リアリス」

「えっ……なにを、とは……？」

戸惑った声で問い返すと、フィオーヌが呆れたようにため息をつく。

「娼婦の技術を磨いて、奉仕なさいっつて言っているの。ほら、そのメイド



人物紹介

恥を忍んだ結果

思わず...



如月鈴音
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



お姉え!!

え……?
鈴ちゃん?

ある朝の事…



もーやっ!!

おねえがそんなだから生活苦しいんじゃないのお!

もー!!
うちはいつも生活ぎりぎりなんだからああ!!



如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。



出張御祓い
双子巫女よ!!

私達が出向いて
依頼人の除霊を
する!!

ニリヤミジャー!!



だって…折角うちに
来てくれたのに…

しかも女学生
だったから
お金取るのも…

客は
客なの!!



まあ!!

すわいわわ!



ひどいわっ!
鈴ちゃんっ
私だっ
頑張ったのに…

そんなにお金が
欲しいって言うなら…



鈴ちゃん
主役をやるの?

文化祭の劇
じゃない!!

私絶対
見たいわ!!



私夜のお仕事
しちゃうから!!

それはそれで
いいかも…?

なんでもおねえさん
おねえさん
おねえさん
おねえさん

逃さない…っ!!



徹夜したのに…!!



しっかり者



いいだしっぺ



暴かれる京子の過去！
しかしその身体は
悦楽から逃れられない！！

SLAVE DOLL

スレイブドール
紅眼の女特務捜査官

Mission
3 真実の散華

小説 NOVEL うつせみ 空蝉 挿絵 ILLUSTRATION ぼっしい

登場人物紹介



黒崎京子

国家警察特務機関所属捜査官。肉体を義体化した“ドール”として反政府組織への秘密工作を任務としている。

ジャン

反政府組織「イージス」への単独潜入捜査中を行っていた京子の同僚。京子とは恋人関係にある。

前号までのあらすじ

西暦2150年。世界大戦の折に確立された義体化技術により、発展を遂げた小国マルタ。義体化で肉体を強化した特務班の“ドール”黒崎京子は、反政府組織「イージス」との戦いに身を投じていたが、その最中、相棒のジャンが任務中に失踪したことを知る。彼を追い、捜査を進める京子。強化された肉体と死の魅力を武器に足取りを速くする彼女は、テロリストの陵辱に晒されそうになりながらも、ジャンと再会するのだった。久しぶりの再会の夜に束の間の情事を過ごし、新たな任務へと飛び込む二人…。

「……戸の向こう。左右にそれぞれ一名」
水路から侵入後、歩き始めて数分でたどり着いた古い鉄製扉の向こうに、生物反応を感知する。

「了解」

目と目の合図の後、発砲。

「があっ……」

事前にもたらされた情報によればテロリスト拠点への侵入経路である鉄扉の向こう側。見張りに立っていた男一名を、まずは女捜査官の放つ光弾が鉄板ごと撃ち抜いて始末し。

「な、なんだ、お、おいつどうし……ごばあつ」

声で位置を測ったジャンの銃が、即座にもう一方の標的の頭蓋を一発で貫き仕留めた。

「相変わらず、勘がいいわね」

実際は勘だけでなく経験もあつてのことだが——。障壁越しであっても体温などで標的の正確な位置を探れる完全義体の身と、ほぼ同等の精度で狙撃をこなした相棒を褒めながら、もうじきその彼と別れねばならない寂しさに身を浸す。

「じゃ、俺は上で待ってる特務の連中と合流する」

「ああ」

作戦では、水路という退路を潰した後にジャンは

地上で待機する増援と合流。強化義体である京子はそのまま先行してテロリスト幹部を捜索、という手はずになっていた。

「俺と一緒にやないと不安か？」

「……馬鹿を言うな」

軽口を叩く彼は、この期に及んでも笑みを湛え足取りも軽やか。不安を微塵も感じていないらしい。だとすれば、嬉しい。地下水路を泳ぎきった直後に見た恋人の笑顔に、冷えた身体が温められるのを感じ、実感する。最高の相棒との共同作戦だ、今回もきつと生き残ることができる——。

「列強諸国に口を挟まれたくないんだらう。だから、連中の首領を特務ではなく公共機関——警察の手で捕縛させる」

「なんらやましいところなどないと、列強に見せつけるため……か」

「さらに表向きはテロリスト同士が仲間割れで自滅したように装い、大々的に公表して既成事実とする……ってな寸法だらうさ」

互いに濡れた髪を掻き上げての対話はドライな内容に反して軽妙なテンポで展開された。慣れたやり取りに自然と口元が綻んでしまう。

「……それゆえの少人数作戦、つてわけ？」

ああ、と答え先に歩き始めた彼の顔は窺えない。「事後、情報操作を行うには、真実を知る人間は最小限であることが望ましい」

(痕跡が残りにくく、辻合わせが楽だから、か) それだけの理由で、危険が増える少数での作戦を執行するのだろうか。浮かんた疑念は、「そういえば自分は頑丈なだけの鉄砲玉だった」と——己の身分を思い出すことで易々氷解した。

(捨て駒扱いは、私ひとり……か) だが、それでいい。この身が危険に向かうその分だけ、ジャンの生存

確率が増えるのならば。

(なにも、戸惑う必要などないさ。これまで通り、目の前のミッションをこなす)

そうして生き残れば、自分だけの居場所を——彼の腕に抱かれる喜びを失わずに済む。確実に任務をこなせばいい。ただ、それだけのことだ。

「すぐに行くから、無茶するなよ」

「了解」

むぎむぎ壊されてやるつもりもなければ、最愛の相棒を他の誰かに譲るつもりもない。

「水路を破壊後に、私は中枢へ潜る。そちらこそ、私以外の誰かに撃たれて死ぬな」

「はは、ラジャー。マイハニー」

コンと重ねた拳の合図に押されるように、ふたり分かれたたそれぞれ道の目を向けながら、心は確実につながり合っていると、信じていた——。

タンツ、タ、タタタンツ——。

「ぐばつ」「げふあつ……」

女捜査官の踵が刻むリズムと、獲物どもの断末魔が重なる。光学迷彩で姿を消し、天井からぶら下がって見回りの標的を待ち伏せ。一体は真下を通り過ぎようとしたところを脚で羽交い締め。そのまま相手の顔を股間で押さえつけ、あぐらをかくような体勢で首を折り。もう一体は地に降り立ったその脚で大腿にハイキック。揺れる乳尻を拝むことなく、獲物は崩れ、息絶えた。

紅の瞳に映し出された死体は、これで合計六つ。(できうる限り戦闘を避けてここまで来たが……そのそろはれる頃合いか)

すでに現在位置はジャンが手に入れた拠点情報に記されていた中枢部分へと迫りつつある。よほど間抜けな組織でないのなら、さすがにもう侵入者の存在に気づいているはずだ。

ジャンたちが到着するまでに、敵の首魁が逃げ出すというシナリオだけは避けたいところだが――。

（ジャンを待つてから仕掛けるか。それとも）

地下拠点であるこの場にある退路は、破壊した水路を除けば、地上へ続く道――ジャンが確保した道ただひとつ。そこから詰めていた特務の連中がジャンとともに向かってきている。テロリストどもは袋のネズミ状態だ。

警察機関に常時位置を発信している義体のこの身自体が、敵本陣の目印にもなる。刻々と流れる時を、全容を見渡せる屋根裏から監視してただ待てばいいだけのはずだった。

（まだ……）

五分、十分。経過を待てども増援は来ない。聴覚には絶えずざわめくテロリストどもの協議する声と、怒声とがひっきりなしに聞こえてきているというのに――。

（なにかあったのか？）

恋人との会話専用を開いた脳回線にも、応答はない。なにか、想定外の事態に巻き込まれたか。それとも、ひとり地上へ出る際に、テロリストどもの手にかかって――。

ありえない。首を振って否定する。光学迷彩もあるし、銃の腕だつて超一流の彼が、そう簡単にやられるはずがない。

（だが……前回のようには半義体化の相手が地上への通路側いたら？ あるいは完全義体の敵が……）

結局のところ不安は尽きずじまいだった。

「まったく、たちが悪いな。義体化もしてねえつてのに連中、死をこれっぽっちも恐れちゃいねえ」
不意に思い出されたのは、半年前。ジャンとともに初めて臨んだテロリスト掃討作戦の折。彼が発した台詞だった。

「それはあなたでしよ」

股間の逸物以外は、との続きは呑み込んだ。

「俺は京ちゃんを守ってくれるつて信じてるし」
嬉し言葉に胸躍つたのを、今でも身体と心が覚えてる。

「……あなたの盾くらいにはなれるわね」
けれど心の動きを気取られたくなくて、口は勝手に強がりを吐いた。

「おいおい。寂しいこと言うなよ。俺たちはパートナーなんだから一蓮托生。だろ？」

死ぬ時は一緒、か――。

（そうだ……あいつが、勝手に死ぬはずがないじゃないか――）

腹積もりが、決まる。ジャンの身に何があつたにせよ、必ず無事でいる。そうして任務を全うし、この場に増援を連れてやってくると信じて。

足元の換気孔を蹴破り、任務再開。

広めの室内――おそらく会議室に相当する部屋に集まっていたテロリスト連中の只中へと二本の脚で降り立った。

「な、ッ!? もうここにまで……っ」

「国家の犬め……!」

突如現れた侵入者に驚きながらも発砲する、テロリストたち。その浮足立った足元をすくうように。

「シッ――」

しゃがみ、地を這うように射抜いた右脚が連中の足首を、次いで地についた手を支点に高々放たれた左脚が銃を構えた腕を叩き折る。

「ぎやあうううっ!」

（主導者以外はここで始末しても支障はない）

突如の襲来に相手が戦陣を整えられないでいるのが、最大のチャンスだ。だから躊躇なく、両の足を地を踏むや否や光弾を乱射した。

（必ず、連中は主導者の盾になるうとする――）

目論見通り。一番奥にいた男を守ろうと身を張つ

て、次々とテロリストたちは倒れてゆく。

「ラッ、ド……っ」

「ラッドさんっ……あんたの、ためにっ」

中にはナイフを構え、身を盾にしながら向かってくる者もいたが――あえなく刃先をかわし、絡めた腕で首をへし折つた。

「あ……ぐ、俺たちの、思想をっ……」

口々に吠え、うなりながら死にゆく連中にかばわれ、栗毛のまだ若く見える男は敢然とした視線を殺戮者へと向けたまま。逃げ出しもせずに仁王立ち、仲間死を見届ける。

「テロリスト集団イージスの主導者だな」

ああ、と答えた男の憎しみの視線を受け止めても意志は揺るがず。特殊スーツに覆われた巨峰が、踵の刻むリズムに合わせて上下に揺れた。

先ほどの銃撃戦で数発の弾丸を浴びたものの、スーツのおかげで外傷はほぼ皆無。唯一類をかすめた一撃が薄皮を裂き、赤い血を滴らせたにすぎない。

「赤い血……ドールも赤い血を流すんだな」

予想よりも幼く聞こえる声音で、主導者の若者がぼそり。

「……お前は、連行させてもらう」

冷淡な声でイージスの主導者であろう男――まだ見た目に十代そこそこの若者へと意思を告げれば。

「お前らの腹積もりにつきあうつもりはない」

短く、淡々と、けれど深い憎しみ混じりの低い声音に変えて、若者は拒絶の意思を伝えてきた。

「逃げ道はどうせ塞がれているのだから。ならば俺は、誇り高き死を選ぶ。この身は朽ちようとも、必ず同士が志を継ぐ」

「つくづく青臭い男だな。……では、少々痛い目にあってもらう」

まるで悪役の台詞だと自嘲しつつ、男の足なり腕を撃ち抜いて動きを止める。そうするつもりでトリ

を撃ち抜いて動きを止める。そうするつもりでトリ

ガーにかかった指先が。

「——!?!」

完全に絞りきる寸前で、まるで金縛りにかかったみたいに押しとどまる。

(なん、だ……なぜ、止まった?)

義体の身で目覚めて日が浅いうちは、思い通りに四肢が動かせないこともままあった。だが、それは血のにじむ努力の末に克服したはずだ。それが、なぜ今になって——言い知れぬ不安に息が乱れ、わずかに紅の視線がぶれる。

「……? やらないのか。仲間たちのように俺を撃つがいい」

身は朽ちようと志は死なぬ——男は諦観とも、達観ともつかぬ面持ちで、強い意志のこもるまなざしで射抜いてきた。

(ちっ……!)

青臭い男の態度に少しの苛立ちが吹き荒れたのも束の間、強化された脳髄は、我が身に起きた異変の対処に追われた。

(どうして……動かない? 理由はなんだ……!)

焦りは、死に直結するものだから、努めて動悸を押さえ込み、たつたひとり生き残った標的への警戒は解かぬまま脳細胞をフル回転。どうにか変調の理由を突き止めようと策動する。

義体の損壊、劣化は現状認められない。となれば、警察関係者に発砲できないのと同じ類のプロテクトか——その可能性も、脳内検索により否定された。

「どうした。早く俺も……のように殺せえつ!」

「ツツ!!」

ジツ——突如、脳裏に直接熱した銅線を押しつけられたような、強烈な痛みが奔り抜ける。男が誰かの名前とおぼしき言葉を発した、その部分だけがノイズがかかったように聞き取れず、遅れてやってきた強烈な頭痛とめまいに侵され、意識が揺らぐ。

「なん、だつ……今の」

どうにかふらつく身体を立て直したものの、そこに及んでの初めての事態の連続に、戸惑いと焦りは広がるばかりだった。

「どうあつても撃たない気か? ならば……」

男の手が近くの引き出しからナイフを取り出し、自らの首へ刃先をあてがう。

(やつを、死なせるわけには……つ!)

頭痛が治まらない。それどころか男の顔を見ているとどんだん痛苦が酷くなるようで——顔を背けた。けれど任務のため、それは許されない。

痛い、苦しい。強烈な吐き気とめまいに、意識が潰されてしまいそうだ——脳内麻薬が分泌されない点を考えても、これらが外的要因によるものでないことは明白だった。

「……最期にひとつ、聞かせてくれ。あんたはなんのために戦っている」

あの世への手土産にでもしようと考えたのか。不意に、自身の首筋に刃を当てたままの男が尋ねてくる。

「生きるためだ……つ」

答える必要などないはずが、気づいた時にはすでに口が動いて本心を吐き出していた。痛みをせいで、警戒に気を回す余裕がなかった——そうではない自問、自答。

「頭痛を引き起こしたのも、引き金を止めたのも、目の前の男がファクターだ。なにかが。この男と自分の間にはあるのだと、自然と考えが行きついて。」

(そのなにかとはなんだ!?)

今の自分が知りえないもの。それはつまり、失った記憶の果てにある、なにか。今の自分にはないもの。おぼろげな答えにギリ、と歯噛みした瞬間。

「——そこまでだ」

背後。天井の通気孔を除けば唯一の出口である扉

向こうから、響く声と同時に光弾が突き抜け。

「ぐあつ……!」

光の軌跡を追った紅の視線が行きつく先で、右手を撃たれた若者が、膝をついてナイフを放り出し、苦悶の顔を浮かべる。

「お待たせ。京ちゃん」

「ジャン……」

今しがた空いた穴付きの扉を開き悠然と現れた相棒の姿に、巣食っていた不安は束の間暗れ、瞬く間に安堵の想いが広がってゆく。

そしてそれからすぐに、彼の背後に増援の姿がないことに、小さな疑念を抱いた。

「増援は……なにがあつた」

「なにもないさ。滞りなく作戦は遂行されてる」

増援を連れていないにもかかわらずジャンはいつも通りの調子で、首を振りながら天を仰ぎおちやらける素振りまで見せていた。

「……滞りなく? だからどういうつ……痛ッ」

不可解な相棒の言動。治まる気配のない頭痛とめまいに乗じて、いったんは鎮まったはずの不安が再び増長する。命を互いに預けあう作戦下で、なにか隠し事をされているのではという不安が、根を張るように心臓に果食い、ジワジワ染み広がってゆく。

「ハナから増援なんぞいなかったつてことさ」

「どういう……ことだ」

疑問の声は、テロ主導者と女捜査官。ふたりの口から見事にシンクロして響いた。

「特務が……私たちを切り捨てたというのか?!」

いいや、とジャンが首を振る。

「なら、一体なぜ……増援は来ないツ!」

頭蓋を脅かす痛苦に耐え発した声に対し、彼は。

「この強襲計画そのものがブラフ。存在しない作戦だからだよ」

平然と、作戦を根底から覆す内容を告げた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「狙いは、京ちゃんとテロ主導者をサシで戦わせること。で、俺はその顛末の見届け役ってわけだ」
混乱も、痛みも鎮まらぬうちに矢継ぎ早に繰り出されるジャンの言葉。

冷静に事態を把握できるはずの電腦が、ぐちゃぐちゃと掻き回され、混濁する。

「なぜ……そんな必要がある」

また。主導者と女捜査官の音が被さった。ハッと振り向いた先で、相手もまた驚いた顔をしてこちらを見つめていることに気づき、あわてて目を背け、見つめ続けてはいけない、そんな予感めいた想いが胸から噴き出していることにも気づき、戦慄する。

——なぜだ。なぜ。見知らぬはずの男にこうも心乱される？

「このままいけば国は表向き、テロ組織員同士の仲間割れによる自滅だと発表するだろう。主導者であるお前と」

ジャンの指がテロ主導者の若者を指し、そして。

「その恋人である……の同士討ちって筋書きでな」
ジツ——！！

「あぐつ……」

また。脳髓に響き渡るノイズと苦痛。意識が断ち切られそうな鋭い感覚に、眉をひそめ、唇を噛み、それでもこらえきれずに膝をつく。ジャンの指先は、こちらを指差し、止まっていた。

「……だと、あいつは、あいつはお前らがっ」
「死んだはず、か？」

（なんのことを言っている、一体誰の……つ）

吠える若者。鼻で笑うように彼を見下す、ジャンふたりを交互に見つめた瞳が、困惑を示すように紅から黒へ、また紅へとせわしく変化する。頭蓋を叩く鈍痛は、天井知らずに勢いを増し続けていた。

「そうだッ……あいつはお前らに殺されたッ……」
「二年前の作戦により捕縛された彼女は特務の手で

記憶を抹消。そのうえで強化義体の実験素体第一号となった」

ドクン——直接手でわしづかみにされたように息詰まる心臓が、激しく弾む。義体の身で目覚めて以後ついに感じることもなかった悪寒。寒気が、全身を奔り抜けていった。

（何を……言っている、それ、では、それは、まる……でっ）

なまじ電腦の出来がよいがゆえ。また生来の察しのよさも手伝って、誰のことを話しているのか、心の底では理解できていた。

チラチラと、紅の瞳に視線を重ねてくる相棒の意図に気づかぬわけもない。

だが、その事実を呑み込むことを身も心も拒絶する。吐き気とめまいがひと際強まって、地についた膝がみつともなくカタカタと震え出し始め。

「嘘を……つくな」

こぼれたのは、吐いた己が目を刺くほどの弱々しく怯えた声音。そのことにまた、強烈な吐き気を覚え、うずくまる。

「この場で俺が嘘をつく理由がないだろう？」

いつも通りの、優しく、軽薄な響きだった。そのことがいつそう真実味を増させ、彼の言葉を鋭い刃に変えて女捜査官の胸に突き立てる。

「馬鹿……なっ。それでは、この女がっ……」

「顔も変えてるからな。……気づかなかったのかい、結婚まで誓った女だつてのに」

ドクリ——強張った心臓が跳ねる。

（けっ……こん？ 私が……私は義体化を自ら志願して。いや、違う。それは……データで見ただけの……では、本当の、本当の、私はっ……）

悪ふざけはよせと彼を小突けばすべてがチャラになるような気がして——けれど、場に張り詰める空気がそれを許さない。声こそ軽々しいものの、ジャ

ンの表情はついにぞ見たことがないほど真剣味を帯びて引き撃った薄笑みを浮かべていたから。

「なぜ、そんな非道をッ」

「組織としては単純に、手ごろな素材——適合者がたまたまイージスの組織員だった。それだけのことだろうさ」

絶句した若者を前にして、ジャンはすべてを暴露していった。

「後は、この任務さえ遂行すれば。記憶を技術が凌駕することが証明されさえすれば、これまで通り……ダメなら廃棄して新たな適合者を待つ。それがお偉いさんの判断さ」

苛立つた声を紡ぐジャン。らしくもない激情剥き出しの姿は、彼が嘘をついていない何よりの証拠であるように思われた。

「京ちゃん」

若者に銃口を突きつけたまましゃがみ込んでくる。ちようど顔の真横にやってきた彼の唇に、いつもと同じ口調で優しく耳朶をくすぐられ、反射的に四肢の強張りが取れてゆく。

「な……せ。今……さらッ」

クレバーを捨て去った心で、切に想う。どうせなら最後まで事実を隠し、騙したままでいて欲しかった。そうすれば、特務もたやすく役立たずの義体を解体なりできたはずだ。

テロ主導者の若者を警察に引き渡した後で、裏切りにも気づかぬまままで逝かせてくれればよかったものを——。

これまで屠ってきた相手がかつて志を同じくする同士であったなどという実感は、まだ一向に湧いてこない。今はただ、恋人に欺かれていたことに傷つき、自身の過去を消されていた事実、純然たる怒りを覚えていた。

「俺の力だけじゃ、京ちゃんの廃棄処分を覆せない

からね」

「どういう、ことだっ……」

「すでに強化義体の充分なデータは取れた。記憶が戻った際に、本来の心と上書きされた職務への義務感との間で軋轢を起す可能性のある人格は、消去もしくは再調整される予定になってたのさ」

それはつまり、黒崎京子という個の抹消に他ならない。渴いた唇が、喉が震える。人事のように言葉を連ねる恋人に——偽りの恋人に、なにか文句を吐こうとして、言うべき怨嗟すら上書きされたデータなのではとの疑念に侵されて、喉がつかえ。

「うぶっ……う、げっ、えううう……」

嗚咽の中で絶望を食らい、押し出されてあふれる嫌悪と恐怖を、込み上げる胃液ごと嘔下する。冷えた汗がにじむ。底冷えに怯えるように、スーッと奥の肢体が、何度も何度も身震いした。

「特務は京ちゃん一人にイージスを殲滅させ、帰還後に整備と称して記憶を消す腹積もりだった」

何を信じればいいのか。元々信ずるべき土台すら持たぬ空虚な義体の身で、記憶すら偽りのものだというのに。

「そうして犯人として逮捕し、とつくにできあがってる死亡診断書を添えて、廃棄する」

「どうしてッ……なぜ、……っ」

なぜ、特務の目論見通りに「知らぬままで」逝かせてくれなかったのだ。魂の慟哭に、ジャンは淡々と感情のこもらぬ声でもって応じた。

「だけど、今の人格が任務の妨げにならないことが証明できれば、あるいは」

「ッッ!!」

ジャンの手が、指が、震え強張ったまま銃を握っていた女捜査官の拳の上に重ねられる。その温み。汗ばんで、ごっごつとした、慣れ親しんだ心地に、抑えきれない悦びが、胸一杯に染みてゆく。

(この感情までが、偽りなのか……っ)

「……に触れるなあっ!」

ジッ——! また。ノイズ混じりの痛苦が脳髓を焼く。このまま記憶ごと、人格ごと消されてしまうのではないかという不安が、この身を案じてくれた若者に対し敵意の目を向けさせた。

「ぐうあああああっ!」

その男が、両足の腱と両肘を撃たれ、食い縛った口の端から苦悶と血反吐を吐きながらのたうつ。

「観客は観客らしく、黙って見てろ」

撃ったジャンは苛立ちを隠さずに吠え、そして「あの男を撃つんだ。そうすれば、これまで通りでいられる」

優しく、いつも通りの調子で語りかけてくれた。

(これまで通り。昨日までと同じようにジャンと一緒に……?)

上書きされた記憶に溺れる心はそうなることを欲して、引き金にかかる指先に力を込めようと足掻き続ける。だが、身体はなくなった記憶に従うかのように、頑なに光弾を放つことを拒絶した。

「……ッッ! 目を覚ませえッ」

若者がノイズ混じりの名を叫ぶ。それが自分の名だという実感が持てぬまに、ざわめく胸を抑えつけ、ジャンの手の添えられた銃口を彼へと向ける。

「——撃て」

酷薄に冷えた声音が、命令を下す。

従い、震える指に意思を込めようとし。

「ぐっ……うええええッ!」

胃を押し上げる酸味に抗えず、再度膝をついてえずき、嗚咽ごと吐き漏らす。構えていた銃を取り落とし、後から後から吐き出される吐しゃ物にまみれた唇と、押さえ込もうとする手のひらを交互に見つめ。言いようのない悔しさと、相反する安堵感情と

が、解凍された心根の内ではせめぎあう。

(だ、めだ——)

もう、人を撃てない。指の隙間から吐しゃ物を漏らしながら、確信する。

「……この二年間は、無駄だったってことか」

ふたりで共に生きた時を無駄だと言ったその声は。昨日、ベッドの中で愛をささやいた、その口が告げたとはいえぬ冷たさで胸に響く。

「……ッッ!」

怒り、哀しみ、そして刃物のごとき鋭さで心臓を抉る、絶叫。言葉にならない雑多な感情が、胸の内を吹き荒れ、ズタズタに心を裂いてゆく。

(嘘……だッ。嘘……嘘嘘嘘嘘嘘オオオオッ!!)

吐き捨てるように告げられた言葉が、決定打だった。この、胸を突く哀しみも、裏切られたという怒りすらも、上書きされた感情により引き出された偽の想いにすぎない。突きつけられる現実には打ちめされて、ただ深い絶望の闇だけが身を覆う。

「貴様ああああああッ!」

「ッッ!」

声なき叫びを上げようと、紅から黒に戻った瞳に飛び込んできたのは、今しがたまで地を這っていた男の血濡れた身体と、咆哮。不自由な四肢を飛び上げられ、感情剥き出しの形相をして、彼はジャンに飛びかかり、殴りかかった。

「貴様らはどこまで人を弄べば気が済む! どこまでッ……ぐぶッ!」

「……ッ。熱くなるなよ、ガキが」

馬乗りになって、なおジャンの顔面に自らの血溜る拳を打ち下ろそうとした若者の胸を、反動を利用してジャンの肘鉄が突き飛ばす。

感情任せの若者に対し、どこまでもジャンは冷徹だった。

パシユッ——!

「ぐがあああああッ!」

「お前らが始めた戦争だろう。泣き言を言うなら、ハナっから吠え立てず寝てりゃいいんだ」

即座に形勢は逆転し、若者は再度地に転がされたうえで念入りに四肢を撃たれ、肉抉られ風穴が空くその都度吠えながらもんどりうつ。

「相手のデカさに今さら気づいたってのか？ 浮かばれねえよ。お前みたいなお前さんの理想に巻き込まれて死んだ市民がな！」

侮蔑。ただひとつの感情のみを宿す言葉とまなざしを若者に突き刺し、それから。

「どうせ廃棄されるんなら最後に。ここで、愛しあおっか、京ちゃん」

向き直ったジャンはつい先刻離別を告げたのと同じ口で唐突に、少しも感情のこもらない愛の言葉をささやいた。

「い、アツ……！」

嫌だ。まるで、見知らぬ男に抵抗すらできず犯されるような不安と、恐怖。生まれて初めて——正確には、戦闘人形に生まれ変わらされてから初めて味わう感情に怯え、地に着けたままの尻を無意識に後ずらせてしまう。

「そういう顔は、似合わないって」

ささやきながら回り込んだ彼の足に、尻肉がすぐるようにベタリ。

「ひアツ……！」

足指で尻の谷間をなでられ、否応ない悦び——慣れ親しんだ、愛しい感覚に引き込まれて歓喜させられた。

「イヤあつ！」

まるでだだをこねる子どものように振り回した拳には力がこもらず。生身である彼の手でいともたやすく受け止められ、優しく。いつも以上に丁寧に、指の谷間にまでキスされる。

「ひやう……つ、ア、ああ、イヤ……だあつ……」

特務が危惧した通り。起伏する感情が戦闘人形の機能を阻害し、鈍らせて。唇と舌だけを武器に迫ってくる男ひとりすら立ち向かえなくさせた。

耳の裏をなめられ、しびれる愉悅に引き込まれ悶てる。身をよじり暴れる素振りをしつつ、背中を覆うように包み込んできた彼の温もりに、抗うすべなく取り込まれた。強張る頬が震え、見開いた黒い瞳は、それでも彼から離れられなかった。

「……から離れるオツこの糞野郎オオオツ！」

（痛い……！ 頭と、胸が……ズキズキ、引きちぎれそう……！ やめる、やめるやめるやめるオオ！）

ノイズ混じりの若者の叫び。悲痛なその声と、涙に濡れて見開かれた漆黒の視線に晒されていると思うと、強く意識するほどに恥の意識が増大する。心臓を直接羽虫に這いずられたかのようなもどかしさと焦燥感が、嗚咽となって喉を突く。

「見る、なつ！ 見るなあああああ！」

脳が理解するより早く、唇が勝手に叫んでいた。「少し、いつもの京ちゃんらしさが戻ったかな」

「そんな名前と呼ぶな！ 私は、京子じゃない、わたし、は……！」

出てこなかった。なくしてしまつた過去の自分そのものである、名前がどうしても。

背後の彼に対し振り回した拳が、すんでのところで止まる。特務が義体に施した、同僚に対するプロテクト機能。身に危機が及ぶと判断しなければ解除されることのない機能が滞りなく働いていた。

（まだ私はこの男に……ジャンに心を許しているというのかつ、まだ……！）

「ほら、こっち向いて」

身を反転させられ、向きあう形で抱き締められて実感する。非道な事実を告げられてなお、身も心もこの男に囚われているのだと。

（この、ままつ……）

ささやかれた声の響きに、身を奔る甘美が重なつて。今日起こつたすべてを忘れて、どこまでも甘えてしまいたくなる。

昨晩同様、震える頬に、まなじりに。全身にキスを浴びる、そのたび。優しく颯られ隆起したスーツ越しの乳首を彼の胸板に擦りつけ、身体は仕込まれた快楽を好き放題に吐き出し続けた。

「くウ……んんん！ あ……み……み……み、イツツ！」

耳朶を這う舌先の艶めかしさに、まだ直接触られてもいない股根からは蜜汁をにじませて、応えてしまう。

「このまま……今だけ、溺れてしまえばいいよ」

今日が最後ののだから。そうささやいた彼の唇が浅く、幾度となく耳たぶを食む。身じろぎする分だけの隙間を作つて抱き締める腕が、恨めしい。

丁寧かつピンポイントに弱点を責めてくる手管があまりにいつもの通りで——嬉しくて、哀しく、泣きたくなる。

「んつ……ふあ、あつ。ば、かあ……またつ……」

うなじに這つた彼の指がスス——と滑つてくすぐるように。

「お尻を向けて」

次いで告げられた言葉への拒絶反応を掻き消すほど。すり寄せた乳首が切なく脈打つほどに彼の手つきが好ましく、天井知らずの愛しさを孕まされる。

言われるがまま。ろくに抗えもせずに、彼の手で四つん這いにさせられた。腕、腰、彼の指が這つたすべての部分に残る余熱が、徐々に剥がれてゆく。

スーツにムッチリと浮かぶ双臀のすぐ真後ろで脈を打つ彼の股間が、遠ざかってしまう。そんな錯覚すら覚え、波打つ寂寥に身震いし。

とうになくした——最初から存在すらしなかつたかもしれぬ愛を失う恐怖に、ただただ怯えた。

「目を覚ませ……」

頭痛を誘発する涙声に視線を上げれば、若者が黒目を見開き引き攀った顔を振り向けている。血濡れの、光弾で穴だらけの四肢を這いずらせ、こちらに近寄ろうとしては自らの血海に滑り、阻まれて。それでもなお若者は足掻くことをやめないでいた。

「れちゅうっ……」

「ひア！ あっ、ああ……ジャ、ンツッ……！」

若者の怒りと哀しみに彩られた瞳に引き込まれかけた——その瞬間を狙ったかのように、尻の谷間へとジャンの舌がベタリ。張りつくなり、スーッ越しでも位置は熟知しているとでも言いたげに、舌先は割れ目部分をなぞり上げ、勃起した陰核へと一直線にたどり着いてみせた。

「いつもより、硬くなってない？」

「——ッッ!! そんなはず……」

ドキリと弾んだ胸が、じきに期待と恥辱の渦に吞まれて燃える。口づけたままでしゃべられ、むず痒さと甘いしびれが混濁する。腰の芯にまで彼の舌の温みと湿り気が伝わり、微細な振動にまで応えようと自ずから腰を押しつけてしまう。

彼が口を離そうとすれば、追いかけて尻を高く掲げ、また谷間へと愛しい唇を導いた。

「誘りを取り戻すんだッ……!!」

ドクン、と心の奥底でなにか、なくしてしまっただがそれも、混じるノイズの煩わしさと、ジャンの舌のもたらす甘美な衝動の前にあっさり消失した。

「ほら。お尻のほうもヒクヒクしてるし」
「や、あ、ひいウツ、そんッ、なア、どこ、おっ！ さ、触るなああッ」

グリグリと、おもむろに空いていたもう一方の手で尻穴を探られ、ほじられる。

これまでも、恥ずかしいから嫌だと何度言っても改めてはくれなかった。ほじられ慣れた排泄穴が、まるで磨耗する精神を体現したかのように薄まりゆく股布越しに、肉の悦びを求めヒクつき続ける。ぴたりと動きを止めた彼の指を吸うように蠕動し、また腰の振りもいっそう卑しく、狂おしさに跳ねる。

「……ッッ!!」

また、ノイズ。蕩けかけの瞳に映る若者は、出血の止まらぬ四肢を顧みもせず、足掻き、吠え立て、涙に暮れる視線を逸らそうともしない。

(見るなッ……!!)

恨めしい彼の視線に晒されるたび、胸の奥底でサワザワと、羞恥とも懺悔ともつかぬ感覚が膨れ上がりはする。

だが結局は黒崎京子としての感情と感覚。ジャンに対する恋慕と、彼の手で一から仕込まれた肉の悦びへの渴望が競り勝ち、ざわめきは快楽のスパイスへと成り下がっていった。

「キュッて縮まって、濡れた中の肉が物欲しげに指に絡みついてる……いつでも、いつていいからな」
「くウ……ン、ンンツッ……!!」

股に張りつく舌の速度が増し、繰り返し繰り返し割れ目部分をなめ扱かれた。じれったくもあり、ほろ酔いにも似た火照りを与えてくれるスジなめもガチガチに勃った陰核をついばむように突つつかれ味わう、腰ごと持っていかれそうな重たい衝撃も抗い難い甘美となって胸を焦がし、知らず知らず勃起乳首を床へと擦りつけていた。

(染み出て、きてるっ、奥からどんどん……漏らしたみたい、グチユグチユウ……!!)

涙を流せぬ瞳の代わりにヒク、ヒクと蠢くヒダとヒダの隙間から止め処なく蜜液がにじみ出る。湿る股根をすり合わせて、蒸れた尻を振り、一段と薄くなった股布越しに感じる彼の愛撫を甘受した。

(ざらついた舌が……イ、イイところにはかりイッ……擦れて、吸われてっ、溶け、るううッ!)

すでにコンドームレベルの薄さになってしまった布地ごとズボズボと、窄まる尻穴へと二本の指も突き入ってくる。

「ンあつあ、イッ……イッ! 音、やつんうう!」

染み出た腸液が掻き混ざる、浅ましくもイヤらしい粘着音が響き渡る、それだけでも恥を掻き立てられるというのに。

「京ちゃんがエッチい汁をケツからこぼさなきゃ、音もしないんだけどね」

陰唇に張りついた唇がくぐもった台詞を吐く、その内容にまで犯されて、羞恥に震えながら肉の唇が歡喜する。

「んぢゅッ……ぢゅぢゅるるるっ」

火照った肉唇に、薄布越しの彼の唾液の粘りと熱が移って、なお。吸られる際に発生する微細な振動にすら子宮が泣いて、呼応する尻穴もギユウギユウと彼の二本の指を締め上げた。

(イクまで、うう、いつてもきつとずつと……! ずつとこの、ままああつ……)

何度も何度も果てさせられて、それでも彼の責め手は休まらないだろう。

意固地になるほど口数を減らす彼特有の癖から、その本気ぶりを再認識させられた。

(欲しいっ、もつと奥まで、もつとずつと奥の奥まで太いのでっ……埋め尽くして、欲しいいっ)

心はこんなにもさらなる快感と至福を求めているのに。渴いた喉と唇、舌は、心の叫びそれだけを頑なに拒み、吐き出させてくれない。

ぐりゅッ——!!

「ひぐうっ! うあつひうっんあアア——ッ!」

股布ごと尻穴をほじる指先が鉤状に折れ曲がって腸壁を掻きほじる。舌先も股布ごと腔内に突き入っ

てきて、へその真下あたりを執拗になめ扱く。

時折尻穴を、まるで若者へと見せつけるように扱げられる。その際に雪崩れ込む外気の冷たさと、若者の熱視線の温度差に、煩悶させられる。

ルーチンワークじみた愛撫を続けられ、真つ白なシャツに落ちたコーヒー染みのごとく、心に空いたどす黒い穴が広がってゆく。

反して、身体は正直に芯まで突き抜ける肉悦を満喫し、肛門は濡れた粘膜を震わせつつ引き締まる。薄壁一枚隔てた子宮は、じかに肉の楔で押し潰して欲しいと延々うずき、こちら止め処ない蜜液を漏らし続けていた。

「イツ……あ……うあ、ああん……ツツ！」

弱い部分を的確に責められて瞬く間に快楽の高みにまで迫られ、漏れかけた絶頂の合図を生唾ごと呑み下し。視線の行きつく先でのたうちながら吠える若者の姿を捉えた瞬間。心臓と子宮が、溜め込んだ熱を吐き出すみたいにひと際強く弾んだ。

ぐぢゅつぢゅぼぼつ、ぢゅづううううつ！

「ひあつ！ あああつ、くウ……ツツ！ ひあああああつ！ イツ……やあああああツツ！」

心拍の上昇に乗じて激しさを増した彼の指愛撫と舌愛撫に、こじ開けられた唇が今しがた呑み込んだばかりの合図をあえなく吐き漏らす。

放散する媚熱に浸り、ドロリ溶けた蜜液と超汁の攪拌音にも犯され、恥じらいと昂奮に彩られた表情が蕩けゆく。尻穴がジャンの指を奥へといざなうように収縮していた。

振動と、鼓動と、脈動。蠢く膣ヒダの渴望に負けじと引き攣れる腸内で、どつとあふれた切ない衝動を後押しするようにピストンする、太い指先。ズンズンと腸壁に突き刺さっては脳天まで届く甘美を刻む、その彼の意思に導かれるがまま。

パクつく股根に張りついた若者の視線に煽られて、

潮を噴く。

「いあ……あああ、やあ、ツ……~~~~~!!」

ビクンッ、ビク、ビクビクビク！

縦に弾もうとした腰が彼の手で押さえ込まれ、愛しい体熱に包まれたままで絶頂を迎える。

（これっ、欲しかったのっ、これえええっ！）

身体のを貫く、切実な叫び。甘く蕩けそうできてその実ズシンと重たくのしかかつて子宮と胸奥を焦がす快楽の大波をもちに被り、無様によだれまで垂らしてイキ果てながら。

カクカクと揺れる腰に突き刺さる、憐れむような、恨むような、泣き腫らした若者のまなざしに気づき、言いようのないごちゃ混ぜの感情に支配されて、また潮を噴く。

ただジャンに与えられる温もりと快楽を糧に日々を生きてきたこの身は、最初から、強さなど持ち合わせてはいなかったのだと。腰の芯を叩く衝動に押し上げられながら、思い知らされた。

「まだまだ、だろ？ いつも、続けてイカされるのが好きだもんな、京ちゃんは」

それから間髪入れずに連続四度。

「あひやあおおうつ！ やあつ、あぐ！ まらつ、くるううううつ！」

いつしか防壁を破られ刺き出しとなった尻穴をほじられ、昂奮した彼の吐息に恥毛をくすぐられながら、丸見えの前後両方の穴隅々にまでたつぷりと唾液を塗り込められて。腰骨はおろか心の底までグズグズに蕩かさされ、寄せては返す絶頂の大波を味わわされた。

（ま、た……泣いて……る、くう、うんアアア！）

どんどんと消失する股布からとうとう剥き出しとなった尻がこぼれ出る。アナルへと注ぐジャンの視線に胸焦がされ、ばつくり咲き綻んだ肉の花びらから、蠢く彼の顔めがけ、歡喜の潮を噴き散らす。

その都度霞む視界の隅に映る、うずくまり震える肩と、吸り泣くみじめな響き。それらにすら被虐の炎を灯らせて。硬く、小指の先ほどに膨れた乳首を、鎮火を願ってか、あるいは炎を煽るかのどく繰り返し床に擦りつけ続ける。

「ふくア！ あつ、あ……ツツ！」

ツボツボと抉られた尻穴から、泡立つた音色が轟く。その衝撃が侵入してくる彼の指ごと舞い戻っては、ぬかるんだ腸壁を揺すり、さらに粘ついた腸液を噴き出させてもう一度。意識が途切れかけるほどの高みへと押し上げられた。

「ツツ……つあ、はつ、はあつ、は、ひ……！」

呼気が乱れる。視線が泳ぎ、四肢の脱力と心地のよい倦怠感に、どこまでも沈んでしまいたくなる。

そして、胸の内にある想いは、よりいっそう強く、抑え難いほどに育っていった。

「ケツ、やらしくくねってるぜ」

（言う、なつ……知っている、くせに。私が何を欲しがってるか、全部、全部わかっているくせに！）

意地悪で周到。狡猾で、どこまでも優しくして——憎らしいほどに愛しい、この男は——。なくした記憶に引きずられて頑なにおねだりを拒むこの口に、是が非でも卑猥な台詞を吐かせるつもりだ。

「京ちゃんこそ知ってるだろ。俺が、君を恥ずかしがらせるのが大好きな変態だつてこと」

ささやく彼の手で寝転がされ、床の上に仰向けに横たわる。床の冷たさが身に染みても、淫欲の焔の鎮火には至らず。むしろいっそうチロチロと煽られ盛る炎の勢いは増していった。

（あんなに、硬く……へそにくつつくほど反り返って……つ、あ、あれで奥、つ、突かれたらあつ）

音もなく彼のスーツの股布部分が消失し、こぼれ出るなり天を突いた肉の凶器に目を奪われる。ささやかなる言葉の端々に感じる懐かしさ愛おしさに自

然と胸躍らせ、股の奥からは蜜があふれた。

「ほら、もつと弄ってあげる」

「ひやう！ン！ンンッ！ま、たお尻ツ、イツ
イイツ……！」

絶頂直後の、まだヒクヒクとうねり余韻に浸る腸内を、好き放題に往来しては卑しい音色を奏でる。腸壁の浅い部分をつままれ、にじむ腸液を搾られては、ズシリと胎の奥まで響く切ない騒動に溺れた。

「こんだけトロトロなら……もう入るかな」

二本の指で目一杯伸ばされた腸内に、室内の淀んだ空気が流入する。空寒さに震えた腸壁はじきににじむ蜜液の熱気で外気を絡め取り、いっそう勢いの増した鼓動に合わせてまた新たな蜜を吐く。

「あつあアア……ッひ！」

ちゅぽん——音を立て抜けた彼の指先と、尻穴との間で粘ついた液の糸がだらりと垂れた。

（ま、だあ……まだ、いつてないっ）

「もうちよつとで、またイけそうだっただろ？」

すべてお見通しの彼のささやき。同時に囁まれた耳朶がぶるりと震える。首筋、鎖骨、そして唇と続けざまにキスを浴び、即座に反抗の萌芽は摘み取られた。

「んっ、あ、あああつ……」

それどころか、期待を体現した尻は彼の手で再度うっ伏せにされるなりクイと持ち上がって、挿入に適した角度を保ち。

「やめろおとおおおお!!」

若者の悲痛な叫びがこだまする。それを聞き留めてなお。彼の嘆きと怒りのまなざしに煽られ昂った、汁まみれの尻を振る。

「……いい子だ」

褒められ尻をひとでされた。ただそれだけの嬉しさに、またドロリ。潤み開きつばなし、覗かれつばなしの前後の両穴から、粘ついた蜜を吐いた。

（欲し、い……ジャンの……っ!）

奥まで突き入れてくれとねだる子宮のうずきに応じて腰を振り立て、すぐそばで待つジャンの亀頭をなで抜いてしまう。

（う、あ、先つぽおっ、は、いつてっ……）

ズブリと、背後から浅く食い込んだ肉傘を締めつける。ヒダも肉の唇もすべてまんべんなくよだれ代わりの蜜で潤って、よけいに牡肉を深く、奥へと啜え込もうと蠢動した。

「くそおっ。くそつくそおおおっ！」

四つん這いで男にのしかかられるかつての恋人を見つめ、傍観者になり果てた男が悔しさ一杯の叫びを上げる。

胸のざわめきに引きずられて、わずかに意識がそちらへと逸れた、その途端。

ドクンッ——!

「ッ——!」

また、不規則な心拍の乱れに見舞われた。叫んだ男の思い描いた光景を電脳が情報として読み取ってしまったのか、それともなくした記憶の断片が呼び覚まされたか。いずれにしろ不意にまぶた裏に浮かんだのは、見知らぬ光景と男女の姿だった。

微笑む若者——今よりもさらに年若い、目の前でのたうつ彼だ——と、見覚えのない長い黒髪の娘。黒髪の少女に若者が笑みを投げかけて、彼女のほうもはにかみを返した。

「……」

頭痛を誘発するその言葉に振り向いた黒髪の娘が、幸せそうに頬を染めて若者の唇を受け止める——。

（やめろっ、やっ……）

衝動的に抱いた、胸を掻きむしりたくなるほどの罪悪感、誰に対してのものであったのか。考慮する暇もなく、ジャンの声が耳朶をかすめた。「マンコもいいけど、やっば……こつちでッ……」

ぬずるうっ……!

「ッひあつあああはあうううっ?」

背中を押され一気に引き抜かれる肉棒と一緒に、まとわりついた膣ヒダまでもが引きずり出され、振動と外気の冷たさに悶え狂わされる。

（ひ、くっ、ううう……切、ないっ、は、早くうっ、埋めてええええっ!）

支柱を失った肉壁が、口を伸ばたままうねり悶えて蜜を吐き散らす。肉棒から剥がれた膣ヒダが、寂寥と刺激に耐えかね、痙攣しつばなしで膣内へと舞い戻ってきた。もがきながらも、再度の挿入を懇願する尻がフリフリ揺れる。

そんな、抑え難い焦燥感に潰されそうになっているところに、ズブリ——。間髪入れずぬかるんだ肛穴へと、雄々しく猛つた肉の楔が突き入った。

ちゅつぽぶぶぶぶぶっ!

「ケツの中までうねって……京ちゃんの感激が伝わってるぜっ……!」

言いつつ手を引く彼の胸板に、背中が当たる。床にあぐらを掻いた彼の上に落とした腰が歓喜に震えながら、奥の奥まで猛つた肉幹を呑んでいた。

「んぐっうううう……ひあつあつあぐうふううううう……!」

獣がうなるような低い声を吐き出しながら、狭い腸を埋める肉の熱と鼓動に感じ入り、またドロリ。蜜まみれの腸壁を歓喜に震わせながら、ジャンのささやきを遠くに聞いた。

（い、きなり深、あああいいいいっ! 腹の奥の奥まで……ジャンでいつばいつ、イイツ!）

卑猥に押し拡がる尻穴の奥の奥にまで押し入った義体ベニスは、さっそく腸内をみっちり埋め、内部から圧迫をかけてくる。

仕込まれた肉体はたやすく多幸感に浸かり、快樂の元である肉棒へとすがりついて、いっそうの歡喜

を享受しようとしていた。

「っは、あ、あアア……ッッ！」

息が詰まるほどの圧迫に晒され、グルグルと腹の奥がうめきを上げる。なのに。

「あひ、いああっ！ 中でっ、あ、熱いのか、かつたあああ……あつ」

肉の温みと圧力に歓喜したペニスが腸壁に先走りぶちまけた。その熱と脈動に感応した直腸は収縮間隔を狭め、ここぞとばかりに肉の幹を欲待する。

すがるほどに肉棒との摩擦は強まり、彼が呼吸する、ただそれだけの振動ですら擦れた腸壁は甘くしびれてさらなる蜜をあふれさせ。あふれた蜜をまぶされた肉棒は一段と密着を強めて腸壁を擦った。

「……ッッ、相変わらず、きついっ。やっぱ……俺、京ちゃんのケツ、大好きだわ」

「い、うなっ……ふうっ、あア！ 指、這わせるのも、なでるのもだめえええっ……」

じゃあ、もんじゃう——脇からすり寄った手で痕が残るほどに強く尻肉をもみ立てられ、痛みに先んじた甘美が腰を突く。相手を瞬時に殺せる威力を秘めた拳が、今は地にへばりついてなすがまま。ただ恋人の愛撫を待つ処女のように震えながら、快楽を甘受する。

そうしてまた、ギチギチと腸内の肉棒を締めつけ、膨らみ続ける肉棒と隙間なくびったりすり寄って、微細な牡の鼓動にさえ、頭の芯まで突き抜けるほどの衝動を味わわされてしまう。

「全体的に筋肉質だけどき。ケツはでかくてプリンとしてるし。……胸ももちろん好きだけどな」

言いつつ、背筋から腰へ。さらにもう一方の手は指の動きに合わせて背中の中のしかかっってきた彼の

温みが、たまらなく愛おしい。這われた部分が熱を放ち、煽られた心臓と腰の奥とで爛れた熱気が好き

に渦巻き、染み上がる。

それはまた、止め処ないもどかしさをも女の胸に孕ませた。

（み、みっちりイイッ、イイのおおっ……グリグリップ、すり鉢ですられてる、みたいでえええっ！）

奥まで突き入るなり、それ以上動く気配のない肉の先端。凶悪な角度でエラ張った亀頭に押し込まれたままの腸内の曲がり角が、待ちかねた女自身の腰の揺らめきにに応じてズリズリと擦れる。

かゆい部分を思いきり掻いた時にも似た達成感と、男に征服されているという充足感。腹の底から染み出る随喜にあてられて、ますます腰の動きは貪欲になっっていく。

ツルリとした腸壁は仕込まれた通りに亀頭を締め上げて欲待し。狭い排泄穴を内側から押し上げられる感覚——偽りの恋人生活で細胞にまで刷り込まれた悦楽に、抗うすべなく吞まれていった。

「っく。ハハ。調子出てきた、かな？」

嬉しげに笑った彼の手に引かれて、自然と指同士を絡めあう。その様を見開いた若者の目が凝視している。気づいた遠端になぜだかキウキウと腸壁がざわめき、ますますジャンの逸物を締め上げた。

「く、ふうう……！！ ひイッ……あ……っ」

ジャンもまた男の視線を捉えてか、ひと際猛々しく肉の幹を弾ませ、またドロリと粘るカウパーを腸壁にぶちまける。

その衝撃に、すぐさま若者から背後の彼へと、渦み蕩けた視線が揺らぐ。

「……っ！ 思い出してくれえっ！」

若者がノイズ混じりに聞き取れぬ名を呼ぶ、その都度。彼と手をつなぎ歩いた公園。安酒片手に理想を語らった、彼の部屋。そして——初めてを捧げるつもりがはぐらかされ、代わりに愛の告白を受けた自室。見知らぬ想い出たちがまるでスライドショー

のように移り変わり、思わず閉じたまぶたの裏に映り込む。

少しの覚えもない光景のはずが、執拗に意識下にこびりつくせらに、心が激しく掻き乱された。

（やめる、やめるやめるおっ！ もう、これ以上私を……惑わせるなッッ！）

今つないでいるのは若者の手ではないのだ。何度も何度も優しいキスをくれたのも——。

渦巻く苛立たしさと不安から、若者の目を厭うように首を振り、心の奥底で「惑わせるな」と叫ぶ。それこそが、過去ではなく今。京子という今の己に執着している何よりの証拠なのかもしれなかった。

「ほら……脚、閉じてちやダメだぜ」

触れあう彼の温みと、腸内を埋める肉の熱。汗噴き出すほどに気だるく、心地いい熱気に蕩かされた下肢が、より汗ばんだ彼の手で左右に割られる。

まるで若者に見せつけ「これは俺のものだ」と言わんばかりに——ジャンの瞳と指は、若者が吠えるほどに熱を帯び、猛々しさを増していく。

「い、あつ……見せ、ないでええっ」

つないだ温みが失せた寂しさと、腰肉をなでられる悦びとに身震いしたのも束の間。

尻穴ではなく前の穴に——そう言わんばかりにパクつく膣口が。蜜で湿った恥毛を張りつかせた肉の唇が、物欲しげに開閉する様が自身と、正面で倒れ伏す若者の眼前に余すところなく晒された。

「奥……突いて欲しいかい？」

「……っ！！」

わざとだ。最大限羞恥に濡れたこの瞬間を狙って、さらなる羞恥の上塗りを求めている。ジャンは、彼は意地悪で、この身の味わう快楽のすべてを知っているから——。

「ッッ、は、あ、ああつ……っ」

拘束を解かれた上半身が前のめりに倒れかかり、

ばざりと黒髪が舞う。汗ばんだ背をツツ、となでられ、小さな喘ぎをこぼしながら尻穴を締めつけ、腰を振らされ——わずかばかりの逡巡の果てに、湿った声を吐き漏らしていた。

「う……い、て」

「もつと、大きな声で」

あその小僧にも聞こえるように、と彼のささやき。言葉の内容に戦き、胸昂らせながら、耳朶にかかった吐息の甘さに溺れて両乳首を尖らせる。

答える代わりにいつそうはしたなさを増した腰を左右上下に振りたくり、たつぷりと彼の肉棒を抜き立て。暗く沈みゆく若者の目を見て、張り裂けそうな胸を掻きむしり、甘い痛痒に溺れ、懇願した。

「はや、くうう！ 早く奥までっ……欲しいッ欲しいのよおおおっ！」

我慢などできるはずもないではないか——これだけが、彼の温みを味わえるこの時だけが生きる意味のすべて。糧だったというのに——。

「ほんと、肉付きよくていいケツだよ……っ」

腰の上で弾む尻肉の量感にうっとり目を細めて彼がささやいた。悦び度合いを示すように肉の棒は際限なく硬度とサイズを増し続け。

「ああ、これ、ええっ……！」

腸と膣を隔てる薄壁越しに、凶悪な角度に張ったカリ首が行き来する。その刺激を求め下ってきた子宮が、切なくうずいてたまらない。

「……子ども、欲しがってたまんな……」

亀頭で、降りてきた子宮の感触を感じ取ったのか。腰を進めてズコズコと、集中的にそこばかりを突きながら、彼がまたささやく。

「どお、し、てっ……くああアア……ッん！」

なぜ、今そんな話をする？

問うよりも先に彼の両手のひらが乳の下弦を押し上げるように、ひしゃげるほど強くもみしだく。

「ココも、気持ちよくなりましたが……」

汗を含んだ彼の熱が、薄布越しの乳肌から伝わってきて、切ない衝動はますます増長し続ける。クルクルと乳輪まわりを指先で円を描くようにしてくすぐられ、あえなく胸部分のスーツも消失した。

黒く光沢を放つスーツと、こぼれ出るなり揺れる肌色とのコントラスト。

（見られ、てる、うっ……！）

背後から脇乳を眺める彼のねっとりとした視線。そして目前から突き刺さる、血走った熱視線。対照的でありながら共に乳肌を熱くさせる視線に侵されて、とうに尖っていた乳首が悶えながら、またムクリ。一段と硬く勃起する。

「ずちゅちゅぶぶつ、ちゅぶつ、ぐちゅぶううっ！」

「くア……！ つひ、ア！ あっあア！ 両、方ッ同時、にいイイッッ！」

乳首を指の腹で転がされながら、腸壁を突き上げられた。うずいていた子宮が悦び勇んで震え、蜜を吐き漏らし、腸内はあふれた先走りを含もうとキツキツに縮まって牡を欲待する。つるりとした腸粘膜に彼の熱が、粘り気が、においまで染み入る気ええして、煩悶する腸肉は小刻みな痙攣を続ける。

「……ッ！」

また、若者が誰かの名を叫んでいる。どうしても己のものとは感じられぬ、見知らぬ名を。

牝としての生殖本能に駆られる子宮のうずきに沿うようにして思い出されたのは、またも見知らぬ光景と、初々しい男女の会話だった。

「俺たちの悲願が達成されたら……結婚しよう」

「こ、子ども？ そうだな……まずは男の子で、でも、女の子も欲しいかな」

理想を語る時同様、熱に浮かされた様子で未来図を語る若者に、長い黒髪の少女が苦笑いを浮かべ、

照れている。

——これもまた、己の過去ののだろうか？

（じゃあ今の想いは？ この、腹の奥まで満たされて幸せなっ！ ジャンを欲してる私は……ッッ！）

混乱を忌避するように心はズブズブと、胸奥からせり上がる、底なしの甘美に呑まれてゆく。二度と抜け出せぬという実感とともに、上の唇は甘い鳴き声を、股下の唇は蕩けた蜜のよだれを吐き漏らす。

「そろそろ……だろ？」

喜悦と苦悶の入り混じるさなか。愛しい彼が——ジャンが耳たぶを噛み噛み、尋ねてくる。なんのこと言っているのか。しきりに乳首をこねくり回してくる彼の手つき。そして期待で雄々しく脈打つ肉棒の様から、すぐに見当はついていた。

「ふ、く、ううっ……。あ、は、あああつ……。ああ……ッも、お出、るううう……！」

切なさや甘美をなげき含んで、子宮が薄壁越しの亀頭にキスをする。まるで子を孕ませてくれとねだるように収縮する膣に同調して腸内も引き撃れ続け。肉棒とのわずかな隙間からブポブポと卑しい攪拌音を漏らし悶えていた。胎と胸が至福に染まる。それと同時に勃起乳首が迫り出し、感情ごと。

びゅっ——びゅぶぶう——！

「ひぎゅううううっ！ 出て、つ、る……ッッ……お乳ッ、出……てえええええっ！！」

奥を突かれ、腸壁を挟まれるその都度。スーツの胸元に広がる黒い染み——底なしの不安と、腸粘膜に溶ける先走りや熱の甘美。競うように腰からへそ、胸へとせり上がった雑多な感情に押し出された乳液が、左右同時に噴き漏れる。

乳腺より噴き出す乳液と引き換えに、放射状に染みて突き刺さる肉の衝動。愛しい声が、腹の奥に沈んだ肉の楔が、ともに悦びの響きに震えているせいで、なおさら乳と腰奥がうずいて揺らぐ。



びび

ねえ

お兄ちゃん
いるっ!?

例の像に
ついでに記述が
この巻物……

に……っ!?



おん

もどぶ……っ!? ハ

いいから……
アレ見てみる

そりやって
貴方は……

いつまでも
シラを切る
つもりですの

この
コオ||サミア||
シルビス相手に?

なにやら見慣れぬ二団が……

聖なる鈴の 啼くセカイ

第8話 企む者達

漫画
COMIC

ことし
琴慈





シラをって
言われても
ねえ...

私は
本当に持って
ないんだし

もしあなたの言う
像ってのがこの店に
あっても無くて

お客様からの
預かり物なの
渡せないのよ

ね?

だから
諦めるか...

直接持ち主と
交渉するのね
お嬢ちゃん

キェ



元々
長期滞在予定
でしたもの

店主部屋は
空いて
いて?

スイート
一室なら
すぐ用意
出来るわよ

一泊600万G

.....



一ヶ月分
払って
おきなさい

はっ!

まじごー♥

.....

...にゃにあれ?

——まあ
よろしいですわ

あ

あの……

おっ
エマさん

私の祖国
シルビスの
第三王女――

今の方
その……

私の
見間違いで
なければ

コオIIサミアII
シルビス姫様
……ではないかと……

ええつ

私も式典でお姿を
お見かけした
くらいしか
存じませんが

あの
《シルビス》の印
魔法兵団の方々……

間違いないと
思います

おっ

王室の人が
なんでこんな
ところ……

あ!!
まさか

ええその――
彼の方も
『聖鈴』を求めて
いらしたのでは……

——まったく

疲れましたわ

…あ…

やっと辿り着いた樹海にはこんな宿しかありませんし

このような控えの間のとき場所がお部屋ですって？

一刻も早く『聖鈴』を私のコレクションに加え

国に戻らなくては…

はい…

コオ様…

ちや

ちや



罰として
貴方は後ろで
見ているだけに
しなさい
……っ

誰が勝手に
達していいと
言いましたの？

も…
申し訳…

おと
ほ



あ…くっ
ももっ…

コオ様…っ…



…あ…

—お前
舌使いがなかなか
私の好みですわ

……褒美が
欲しい？

んあああ…っ♡

うあ…!

コオ…様…っ!!

コオ様の
お望みの
通りに…

良い子ね

お



紅一点の少女が敵の調教洗脳の餌食に！
正義の特撮ヒロイン
陵辱劇が始まる！！

特護戦隊 オーダス

快楽洗脳の脅威

小説 NOVEL **木森山水道**
きもりやますいどう
おおつきわたる
挿絵 ILLUSTRATION **大月渉**

けても、女幹部はビクともしない。吹いた風に金髪がなびく。背は、高硬度金属触手の巣窟となっていた。

戸惑う二人がその隙を突かれ、吸盤がびっしりついた触手に捕まった。

空中に投げられたかと思うと、地面に叩きつけられた。クラッカーの様に仲間同士で衝突させられもする。二人のブーツから何度も火花が飛んだ。

苦痛の叫びも動きもなくなった彼等を放り、女幹部はピンクを見た。

「お前はもっと鬨ってあげるわあ」かざされた手から、無数の触手が放たれた。ピンクは刀を滑らせる。

両断。が、地面でピチピチ跳ねている内に再生する。斬っても生え揃う触手を相手にしながらピンクは感じた。

じり貧だ。仲間の被害も気になる。早く倒さねば。だがブルーの砲撃も、レッドの鉄拳も弾かれた。果たして、斬りつけて効果はあるのだろうか。

女幹部が口元に手を当てて「ホーホッホ」と嘲笑っている。触手の隙間から白い肌が覗いていた。

閃くものがあつた。よく見ると、関節部分が露出して見える。可動範囲を確保する為か。

瞬時に作戦を組み立てると、彼女はヘルメットのインカムを起動させた。

「決着をつけようか、エルカティナ」大仰に刀を振りかざした。切っ先の延長線上には女幹部。

「なあにい？ その自信ありげな声はあ。状況分かっているのよ」

敵は相変わらず得意顔だ。全く警戒していない。勝利を確信している。

ピンクが地を蹴った。女幹部から数体の触手が伸び、駆け寄る彼女に襲いかかる。

それらを斬り捨て間合いを詰める。残り十メートル、五メートル――。

「きゃあああああ！」幹部が絶叫。戦隊員の攻撃を受けたのだ。インカムで指示を受けた重傷の彼等は、身体に鞭打ち手持ちのガンで隙間から覗く素肌を撃つたのである。

ピンクが飛んだ。大空高く舞い上がり、自由落下に乗る瞬間に空を蹴る。流星の勢いで女幹部に肉薄し――。

「流星、V字斬りっ!!」幹部は咄嗟に動いたが、両腕の肘から先がなくなった。絡む触手ごと、地面へ届く前に塵となって消えていく。杖だけが軽い音と共に地面に転がる。

「覚えてなさい、ピンクっ」憤怒の女幹部は這いつくばり、口で杖を咥えると音もなく掻き消えた。

「すまない。しとめ損なった」眉の端がしなっと垂れて、端麗な素顔が翳っている。

柳の枝と同じく細い眉。強い意志方に輝く瞳の切れ長の目。横一文字に引き結ばれた唇。

お尻まで届くロングストレートが、滝の清廉さを彷彿とさせる。髪を纏めるカチューシャは愛嬌を加えている。凛とした性格と心根の清楚さが如実

に現れた顔貌は、平素ならば見る者に勇気を与える。

基地にいる今は戦隊員の制服姿。皆を見守る。と言う本懐をイメージしたロゴ入りジャケットを羽織り、タイトスカートを穿いている。左手には変身ブレスレッドが巻かれていた。

戦闘スーツ程ではないが、制服も身体に密着する作りだ。彼女の美体ラインが浮き上がっている。

「次に、確実に倒せばいいだろう？」

「あの姉ちゃんが最後なんだしな」

「最後の一人かあ……」

気遣う仲間の言葉を聞いていた司令が呟いた。合成音でありながら親しみを感じさせる声か曇っている。

戦隊のロゴに手足がついた可愛らしい姿だが実体はない。彼等を選出したコンピュータが作る立体映像なのだ。

「何か気になるのか、コマ」

「コマは司令の愛称だ。本名が味気ないので三人で考えてつけた。

「お前達の言葉を使うなら、我らはテンタクル・キングダムと呼ぶがよい」と彼等は最初に言ったよね」

「それが何だって？」

「王国なら王がいなきや。でも、そんな奴が出てきた事はあつた？」

「真打がいるってのか？ まさか。壊滅寸前で出張らない親玉がいるかよ」

「それはそうだけど……ただ、念の為にアレの開発は進めとくよ」

ピンクが顔を上げた。

「アレか。進捗状況はどうなのだ？」

もう使って構わないのか？

「メンゴ！ もう少しなんだけど」

「そうか。完成すれば心強い。よろしく頼むぞ、コマ」

「合点！」

コミカルなロボは大見得を切った。

「うあああああああ！」

王国のアジトで最後の幹部が暴れていた。杖を振り回しては壁や床に大穴を開け、稲妻を滅茶苦茶に飛ばす。以前は仲間で溢れていた広間も、今は誰もいない。戦闘員は増産中だが、いても枯れ木も山の賑わい程度だ。

ひれ伏す女幹部は額を床につけた。
「さあ、反撃だ」
映像のピンクを見ながら宣言した。

「ヤケになったのか？」

「そんなタマじゃねーと思うがな」
前回と同じ山間で、再び王国が活動しているという情報をキャッチした司令は、オダスリーに出勤を命じた。

彼等が現れるや否や、女幹部は戦闘員をアジトに戻らせ、独りで決戦を挑んできた。例の触手装備もなしでだ。

「今日こそ決着をつけようじゃない」
杖から稲妻が走った。雷鳴が大気を大きく揺るがす。雷の速度は以前よりも速く、数は倍以上だ。

レッドとブルーは肩をすくめると右へ飛んだ。緩慢な回避運動だった。

ピンクも軌道を見切って身体を捻ったが、彼女の動きは機敏だった。

結果、余計な動作が多かった男二人に何筋かの雷が命中し――。

ドガアアアアンンツツツ！
大爆発。二人は猛烈な勢いで岩肌へと吹き飛んでいった。一瞬、視界一杯に閃光が広がり、メット越しでも耳をつんざく爆音が辺りを席卷した。

「なん……だと？」
バイザーの奥でピンクの目が見開いた。予想を遥かに上回る攻撃力だ。

「アハハハハ！ 舐めてるからよお。パワーアップは、正義の戦隊サマの専売特許だとも思ってたあ？ 今までは違うのよお」

恍惚とした表情で、杖の頭をしきりに撫でている。
と、杖の先から何かが二つ飛んだ。

「うあああああああ！」

それは大蛇型触手の卵だった。戦隊員の身体に貼りついた途端、孵化して急成長。戦隊員の身体全体に巻きついて、ギリギリと締め上げている。

「そいつは、相手のエネルギーを吸収して育つてねえ。さしものオダスリーサマもご覧の有様にい」
癩に障る声音で、歌う様に笑う女幹部。大蛇触手で巻巻き状態のレッドもブルーも、振り解こうともがくが相手はピンクともしない。

「さて、お前は直々に倒してあげる」
唇の両端を吊り上げたまま杖を掲げ、例の触手武装姿に変身した。

「そうそう、言い忘れていたわあ。お仲間のエネルギーはワタシに流入中ですねえ。再生も回復も全自動よお」

ピンクの背中を冷たい汗が伝った。真実ならば冗談ではない。しかし。

「いくぞぞ！」

ピンクが吠える。狙いは前回同様、触手の隙間から覗く素肌。

「流星、V字斬りっ！」
女幹部は棒立ちだ。口の端を上げて睥睨している。両手を広げて狙いがつけ易いようにすらしている。

一閃。切斷。即再生。複数の触手が結合し、新しい四肢になる。

「ぐわあああ！」
仲間の悲鳴。再生の為、多量の力を

吸い取られたのかもしれない。

女幹部は動揺するピンクをじりじりと傷つけた。本気の雷撃を掠らせ、吸盤触手を絡ませて動きを封じ、高硬度の金属触手で叩き伏せる。

徐々に攻撃を受ける回数が増えていく。傷を負い、消耗しても彼女は必死に戦うのだが、状況は好転しない。

「ふふ、そろそろそつちの二人に止めを刺すわねえ。間近で見届けなさい」
仲間が転がる場所に、ポロボロのピンクが吹き飛ばされた。

「……まだ意識はあるかピンク」
「アレやるぞ……このままくたばるよりは万倍マシだろ……？」

か細い声。死にかけた。けれど、彼等はまだまだ戦うと言っている。

「分かった……必ず勝ってみせる」
二人から差し出された、重体のせいで震える指を握り、アレの発動をイメージする。

「な、なんなの！」
女幹部が目を剥いた。

それまでのダメージを感じさせない立ち上がり方をしたピンク。全身が赤、青、桃色に明滅している。

女幹部が後ずさりした。
ピンクが遙か上空まで飛ぶ。

「何だか分からないけどっ」
生物触手、機械触手の順にドームを形成し、でき上がった二重構造のシールドが女幹部を覆い尽くす。

ピカアアアアアアアアアアン！
刀の刀身が桃色の輝きを放ち出す。

輝きは巨大な刃の形を形成した。

「超、流星V字斬り!!」
ザムンツツツツツツ！

戦隊の総力で生まれた光刃が、防壁をV字に抉った。両断された触手がポトポト落ちる。倒れた幹部が呻く。

「くっ……再生が…………」
起きない。

「やっただ……みんな……」
ピンクは仲間のエネルギーを受け取ると自分のを上乗せし、途方もない破壊力に変換して解放したのだ。

この形態は未完成だった。吸う量も使う量も制御できないのだ。だから、倒れたオダスリーは起き上がらないし、女幹部も回復しない。

「なかなか面白かったよ」
冷たく鋭い声が響き渡った。

前触れなく、女幹部とピンクが掻き消えた。後には、変身が解けた戦隊員のみが残された。

薄暗くて陰気な石部屋。空気が湿ってひんやりしている。その中央に、戦闘スーツ姿のピンクが捕われている。

天井から垂れる鎖で手首を縛られ、Yの字で立たされていた。

目の前には軍服少年と女幹部。基地で回復したのだろう、後者は息災だ。

「僕は、テナタクル・キングダムの君臨者。総統という名の王様です」
容姿端麗な少年が微笑んだ。

「僕の部下になりませんか？ だからこそ、治療をしてあげました」

ピンクは彼の目を見据えて即答。

「断る。私は正義の戦士だ。悪の尖兵になる位なら死んだ方がましだ」

少年の眉がピクリと動いた。

「なら、力づくだね。僕は、何が何でも欲しいのだから」

言葉に酷薄さが混じった。少年は彼女のベルトを掴み、乱暴に引きずり倒した。屈んで、這いつくばる彼女のヘルメットのバイザーへ手を当てる。

メリツ。

ピンクの眼前にヒビが生じた。

「……っ！」

特別頑丈にできている部分に当てられている指が、少しずつ食い込んでいく。亀裂は更に大きくなる。

「まさ……か……！」

亀裂は止まらない。

ピシッ！ ……バリッッ！

とうとう砕け散った。破片が床に落ちる音は酷く軽かった。

メットがなくなつた事により、お尻まで届くピンクの長い髪が舞った。

「キミが寝ている間に、この戦闘服の解析は済んでいるから……それにしても、素顔もとても魅力的なんだね」

暫し彼女に魅入り、

「もう一度訊くね。僕の部下になってくれれば相応の身分を保障するよ」

得意顔で畳みかけてくる。

「くだい、答えは同じだ！」

ヘルメットを粉砕されても、素顔のピンクは気丈だった。

細い眉も凛々しい目も力強く吊り上

り、キツと敵へ向けられる瞳は悪への反骨精神に溢れている。

「そう……そうだ。スーツの発信機能はそのままにしておいたよ。だから、いづれ助けが来るかもね」

「……？」

「どうしてって顔だね。勝負をしたいだけさ。助けが先か、僕がキミを従属させるのが先かと言う勝負をね」

総統は薄く笑った。

「仲間達の助けが先に決まってる！」

ピンクは不敵に笑って続けた。

「さっさと何でもすればいい。私は決して屈服しないがな」

虜囚らしからぬピンクの態度に、女幹部の唇が笑みのそれに歪んだ。

「総統閣下、最初はこの貧相な胸を苛めてやりましょうよお」

総統は頷いた。幹部はピンクの胸元を蹴り上げ、再びY字に立たせた。ピンクは僅かに呻いただけ。痛み程度では、悪への形相は崩れていない。

女幹部は背中を反らし、ピンクを上回る巨乳を誇示しながら指を鳴らす。

天井が蠢いた。よく見ると、天井一面に様々な触手がひしめいていた。

真珠大の瘤だらけの触手。吸盤がびっしりついた触手。歯の代わりに柔突起で溢れる大口触手。生物的な物だけでなく、銀色で細長い金属型もいる。

人知を超えるおぞましい光景に、流石のピンクの眉もピクッと跳ねた。

先端がイソギンチャク状の物が二つ降りてきた。ブラジャーよろしくピンクの胸部に貼りつく。

触手の内壁は微細な柔突起で一杯だった。それらが粘液を吐きつつ、ナノ単位のスーツの隙間に入っていく。

「くうっ……！」

数えきれない指で揉まれている感覚だった。息に熱がこもりだす。

触手の本体が動く。右乳房の物は右へ、左のは左へと移動する。

ピリッ……！！

スーツの悲鳴。触手はガッチリ嵌まり込んで離れず、スライドを続ける。

「ッ！ こんな触手にスーツがッ」

戦闘服の悲鳴は叫びへと変わっていく。今まさに、弱小生物の力で強固なスーツが破壊されようとしていた。

「オーダピンクの貧乳うご開帳♪」

ピリリリイイイッ！

薄布の引き裂き音が響き渡った。首の下から上腹までがすっかりはだけ、胸部が丸見えになってしまった。

「……なんですって！」

幹部が驚愕を目を見開き絶叫した。胸の中央には、真っ白なサラシが巻かれていた。乳房は鏡餅と同じく縦長の丸になっていた。

但し、鏡餅とは違ってはちきれんばかりに膨らんでいる。解放されれば、見下し顔だった幹部と同等以上か。

巻きついたサラシは肉果実には食い込んで濃い影を作っている。布からはみ出した柔肉には玉の汗が。汗で瑞々しさの増している乳房は、敵が絶句するほど艶かしい。

ピンクは洗面だった。勿論、見られる事にも羞恥を覚えるのだが。悪に秘密を暴かれた衝撃が苦々しい。

（見られて……私の胸が……！）

由緒正しい家の娘として、また戦士として切磋琢磨する時、女としての意識は邪魔であった。だから、その象徴を封じていた。仲間も知らない事だ。

「へえ〜」

感嘆の声を上げる少年。胸のサラシに手をかける。ピツ、と破れ目が。

「やめるっ、卑怯者め！ これが王のする事か!!」

少年は構わない。それどころかニッコリ笑ってさえる。

ピリイイイイイイイッ！

押さえつけられていた乳房が転げ落ちた。屈辱で目が眩む心とは裏腹に、サラシの残滓が落ちる中で、とても嬉しそうに弾んでいる。

ハギレが落ちきり、完全に露出したそれはまるで肉メロンだった。張りも十分で、下の肌に影ができています。

肉房の中央に、サラシがつけた赤痣が走っていたが、徐々に消えていき、程なくして蒸れ乳がで上がった。

「立派な巨乳だね、ピンクさん」

敵は鼻先まで顔を近づけて、隅々まで鑑賞している。汗の臭いも体臭も、嬉々として吸い込んでいます。

「み、見るなあ！ そんな嬉しそうな顔で鼻を鳴らすなっ!!」

手で隠す事も離す事もできず、ただ怒鳴るしかできない。必死にそうする



彼女を、幹部が引きずり倒した。

総統が舌を突き出して、眼前に降りてきた右乳房の乳輪を舐める。

量感溢れる乳房に比べ、乳輪は控え目だ。大人の親指の腹大のそこを、ザラザラした小さな舌粘膜が這いずる。

乳首の周囲を時計回りに一周し、終われば反時計回り。放射線状にする時は、内から外、外から内へと動く。

「まあいいわ。この胸をいやらしく変えてやる楽しさは変わらないもの」

敵幹部の舌が左乳房に。大人の女の舌が、一片一片を鈍足に渡り歩く。

「塩辛いわあ、サラシで蒸れていたのね。全部舐め取ってあげる」

気味が悪い程に優しい所作だ。

（あうう……身体がおかしい……）

胸の内部がじんわり火照る。舌が乳輪をなぞり、あるいは肉メロンを這う度、うなじが粟立つ。

少年が舐める乳輪の熱さが増す。張り詰めた肉へたは、少年の舌愛撫を受けて更に膨らむ。

緩急をつけて舐められている内に、いつしかピンクは、遅い時にはもどかしく速い時には爽快感を覚えていた。

小さな舌が速く動く時を待ち望み、遅い時はそれを待つて耐え忍ぶ。

「うふ、乳首がおつきし始めたわあ」

その言葉でハツとした。

（馬鹿な！ 敵に辱められているというのに、私は何を考えていたのだっ）

ニヤつく敵は各々、ベルトからガンと刀を引き抜いた。その高硬度の柄を

肉へたに押しつけて、グリグリ抉る。

「——ッ！」

クリツとした甘い痛みが連続で乳房を駆け抜け、挟られている乳輪が、火がついた様に熱くなる。

（乳首が……起きる……！）

赤熱する乳輪の真ん中が、皮膚を伸ばしながら膨らんで、鎌首をもたげて立ち上がっていく。

「アハハッ！ 敵に自分の武器をいやらしく使われた上に、勃起乳首を見せつけて……恥ずかしくないのお？」

幹部は乳房を根元から掬い上げ、充血乳首を間近で見せつける。

上向きの紡錘形にひしゃげた肉メロンの先端が、ビクビクしゃくりあげている。色は完熟トマトと同じだ。

（く、悔しい……でも……）

ピンクは奥歯を噛み締めるしかなかつた。返す言葉が浮かばない。恥ずかしくて堪らないのに、乳首はジンジンと疼き、刺激を欲しがっている。

「言い返せない？ ん？ 赤い顔で俯くだけ？ 格好わるい。でもね、こんなのはまだ序の口なのよねえ」

小指位の太さで銀色に輝く機械触手の環形動物型触手が降りてきた。

機械が右の乳首に、生物が左乳房の根元までかぶりついた。

「ああアッ！ こ、今度は一体……」

乳首の機械触手は内部が細分化。充血乳首の表面に隙間なく吸いつき、電

動歯ブラシの震動を送り込む。

乳房をがっばりいった方は、ヌメヌメの肉ブラシで表面を愛撫。柔突起の一本一本が、出鱈目に押しつけてくる。

「ふあっ、ああ……」

肉責めは熱さと痒さをもたらし、意識が遠のいていくのだが、奇怪な事に、少しずつ心地よいと思えてくる。

新しい触手が胸に近づいてきた。紫色のミミズじみているが先端が注射針の細さと鋭さを持っている。

「な……刺すのか……やめろっ」

正気づき、逃れようとしたが、鎖をガチャつかせただけに終わる。

針触手は両乳房の根元へ、順に針を立てた。冷たい何かが注入される。

「う……はあああああああああ！」

清涼感に似た快感。乳房が熱いだけに度合いは一人。だがすぐに。

「ああッ！ 熱い……胸があッ！」

胸が更に熱くなっていく。マグマで満たされたのではないかと思う程だ。

それと同時に、弄ばれている肉へたの充血度合いが増している。気を抜けば絶叫させられる濃いむず痒さが、乳首から乳房にかけて起きてもいる。

（掻きたい！ 思いきり掻きたい！）

異変は続く。心臓の方から、乳首へ向かって圧迫感を得るのだ。同時に肉メロンと肉へたが膨張しだす。

「膨らんで膨らんでる♪ 我慢しないで出しちゃつたらどうなのお」

「出す……だと？」

「さっきの注射は、母乳が出る体質にするものなのよお。胸の奥から、出る

うって感じるでしよう？」

「……こ、断る……誰が！」

「強情ねえ。ほら、これでどう？ 出したくなるでしょう？」

触手に手を重ねて胸を揉んできた。

「うっ！ やめ……おほおほっ！」

ギチギチ乳房への圧力は、搔痒感めいた快感を起こす。それはとても甘美で、母乳放出欲求も膨らんでいく。

「お乳は母乳でたぶたぶよお？ 出さないと身体に毒なんだからあ」

乳首を摘んで引つ張った。

「ううああ！ や、やめろお……！ くら、ぜ、絶対に出すものか……私はオーダピンクなのぞぞ！」

誘惑に乗りたい心を、戦隊戦士の矜持にすがって押し込める。

「意地っ張りねえ」

女幹部が指を鳴らす。ピンクの足元がぐにやりと歪んで左右に開いた。彼女は、人も呑み込める長大な触手の、閉じた唇の上に立っていたのだ。

「このっ、放せっ」

漆黒の大口触手は聞き入れない。足首、下腿と踊り食いされ、お臍から下が寝袋に包まれた様な格好に。

口内は粘っこい唾液と、大きさが不均一な瘤で一杯だった。大人の拳程の物も、赤子の指先程のものもある。下半身に密着する瘤が震動し始めた。

モニユツ、ニユジュツ、ジュルツ。

「くうっ……入り込んで……っ」

足指の股や尻たぶの間、股間の亀裂にまで瘤が侵入し、すつかり入り込ん

人を模して
創られた
生命体

テストメント

君の大切な役割は

種の保存——
子を産むことだ

私には

あなたが
大切だった

君が残すべき種は彼らの様な
異形のものたちではない

君を解放する
今は逃げるんだ

よくも

よくも





君の役割は
「種」の保存――

種は

君が選ひなさい

あなたが
人間が

よかった



手ござらせて
くれる

まったく

我らほどの個体も
体を保つ為に
活動限界がある



お前も例外では
なかったようだな



一体どういう…



我らと同じ
生まれのな



殺す

ミナコロシダ

クッ

クッ

オッ

キッ

キッ

アッ

アッ

アッ

アッ



培養から出たばかりで
散々動き回ったのだ
もう満身に動けまい

い
かはっ

外見は人間と似ているな
…なるほど

サルどもの
研究らしいな

ぶ
ら
あ
あん

何ぞ!?

それらしく

扱ってやる

ならば

!!

ドギギギギヤ

キョウ

ツツ

トキッ

ズバズバ...

ギョウ

ギョウ

夕コ怪物との戦闘で疲弊したところに

突如現れたオラリオ連盟の水軍!!

その船に乗っていた予想外の人物とは——!?

強制奉仕と孕ませで

乙女たちを牝に墮とす!!

イセリア 英雄戦記

the legend of the Acerpa war

第10話 イセリアプリンセス 魔眼姫

小説 くりす 栗栖テイナ
NOVEL ぼたん
挿絵 牡丹
ILLUSTRATION



前方には未だ執念深く蠢く怪異。背後から迫りくるオラリオの船団。

挟み撃ちの状態を打破するために、金髪の姫君が下した決断は――。

「皆さん、まずはこの怪物を倒すことに専念してください！」

怪物を放置するのは、危険が大きすぎる。一瞬の思考の末に決断した少女姫が高らかに指示する声に、騎士たちは火矢を避けつつ怪物へ挑みかかる。

「た、立ち上がれ！ イセリアの女騎士の意地を見せるんだ！」

「っ!? レーシア！ いけません、貴女は今、戦える身体では！」

戦況を見守るフィオナの前に歩み出てきたのは、怪物から受けた陵辱の痕跡も生々しい、ツインテールの騎士。

「ノー・ママっ!! イセリアの女騎士は、この程度で折れはしません！」

怪物によって乱された鎧を整える間も惜しみ、落とした愛用の双剣を片手に斬りかかっていく少女騎士。走る度に卵を抱かされて膨れたお腹が揺れ、破瓜の鮮血で赤く染まった腔口からはおぞましい白濁液が滴る。

「消えろ、怪物！」

己の純潔を奪った怪物への憎悪を込めた叫びとともに、ふた振りの剣を構えたレーシアが舞うように旋回する。秘技、ブラッディ・カーニバル。ツインテールの女騎士の必殺技が、

捕らえた騎士を海に投げ捨てようとしていた怪物の脚を細切れにしていく。

「レーシア、貴女という子は……」

ポロポロの姿で、必死に剣を振るう少女騎士の誇り高き姿に呼応し、他の女騎士たちも続々と立ち上がる。

「これで――終わりでああ！」

「皆さん、気を緩めてはなりません。今すぐに帆を張り、撤退を！」

怪物の絶命を確認し、ホッとしたのも束の間。金髪の姫君は勝利に沸く騎士たちへ次の指示を飛ばす。

休みなく火を放つてくるオラリオの船団は、間近まで迫ってきていた。

少女姫の指示に従い、身を隠していた船員たちがすぐ作業に取りかかる。

「だが……」

「帆が……帆が燃えているぞ！」

放たれた火矢の何本かが、風を受けて張った帆に突き刺さる。見上げる一同の目の前で炎は瞬く間に広がっていき、船最大の動力源はあつという間に燃え尽きてしまった。

「た、大変です！ 今から、帆を張り直す暇なんてありません」

船室から飛び出してきたマリインが悲痛に叫ぶ間にも、オラリオの船団は着実に迫ってきている。

「このままでは、追いつかれるのは時間の問題。どうすれば……」

金髪の姫君は、陶磁器のごとく白い頬を青ざめさせ、絶望を噛み締める。

強靱なオラリオの兵士たちに、疲弊したこちらの戦力で、太刀打ちできるのか。あまりにも分が悪い戦い。

（ですが……やらなくては！）

レーシアを筆頭に少女騎士たちが見せてくれた気高き戦いぶりが、フィオナの心を奮い立たせる。

彼女たちの上に立つ自分が、弱音を吐くことなど決して許されない。

「皆さん、剣を取ってください！ 数の上では互角……迎え撃つのです！」

「イエス・ママ！」

心を鬼にした少女姫の号令に、怪物との戦いで力を使い果たしていたはずの騎士たちが、一斉に掛け声をあげる。「乗り込めッ！ 木人形よりは、斬り応えもある、いい演習相手だ！」

「その直後。ついに横付けされたオラリオの船から、兵士たちが甲板に板を渡し、一斉に乗り込んできた。」

怪物との戦いですでに半死半生の集団だと油断しているのだろうか。特に策もなく無防備に乗り込んできた集団を手負いの騎士たちが迎え撃つ。

「どけ！ イセリアの女騎士を、そう簡単には倒せると思わない、野獣どもっ！」

先陣を切って駆け出したのは、ツインテールを靡かせる双剣の騎士。

刃が陽光を受けて輝く度、乗り込んできたオラリオの兵士たちの首が、次々に刎ね飛ばされていく。

時折片手を膨れた腹に当て、顔を顰めているのは、抱かされた卵の異物感が辛いのだろう。

それでも弱音を吐かず戦い続ける姿が、見守る少女姫に勇気を与える。

「くっ……少しでも魔力が残っていれば、わたくしも……」

「お姉ちゃん、ボクに任せて。あの怪物を倒したおかげで、少しだけ、魔力が戻ってきたからさ！」

悔しげに咬いた声に、いつの間にか傍らに飛んできていた妖精が答える。

その身体が淡く光ると同時に、使い果たしていたはずの魔力が、極僅かに戻ってきた。

「——サンク・ブレッシング！」

歌うように高らかな声とともに解き放たれた、少女姫渾身の魔法。月明かりのごとく淡く優しい輝きが、戦い続けるイセリアの騎士たちを包み込む。

対象者に力を与える補助魔法。魔力が不足している分、絶大な効果は期待できないが、限界を超えて戦い続けている騎士たちにとって、姫君が力を振り絞って与えてくれた祝福は、何よりの励みだった。

「みんな、臆するな！ 私たちには、姫様のご加護があるんだ！」

レーシアの号令を合図に、戦況は一気にイセリア側へ傾く。騎士たちの死力を尽くした戦いぶりはこちらも、オリオの兵から、噂ほどの強さを感じられないのも一因だ。

（そういえば、オリオに水軍があるという話は聞いた覚えがありません）

再び魔力を使い果たした姫君は、慌てて近づいてきたマリインの肩を借りながら、そんなことを思い出す。

おそらくはまだ新設されたばかり、船上での戦いに不慣れなのだろう。（これなら、押しきれぬ……）

勝利を確信した——その直後。

「っ!!」

息が止まり、全身が凍えるような悪寒が背筋を走る。

（この禍々しい気配はいつたい……）
先ほど倒した怪物よりも恐ろしく、底知れぬ邪悪な気配。フィオナは震える唇を噛み締め、それが漂ってくるオ

ラリオの船のほうへ視線を向ける。

「美しくて威勢がいい牝……ふふっ、そういうの嫌いじゃないわ」

愉悦を噛み殺したような声とともに、戦場の雰囲気にもぐわぬ優雅な足取りで、渡された板を渡ってくる人影。

それは、空のような水色の髪を、不気味な紫色のリボンでツイントールにまとめた、まだ歳若い少女だった。

冷たい印象を与えるツリ目は、まるで血を溶かし込んだような暗い紅色。闇に潜む悪魔のごとく、人外の妖しい雰囲気を感じている。

そんな印象をいつそう強くさせるのは、吸血鬼が好んで身に着ける血のように赤い裏地の黒マントと、細い首筋を飾る縞縞のネックレスだ。

その身を包むのは、胸元が大胆に開いたボンデージ。恥丘も覗き見えてしまいうような超ローレグのショーツに、ガーターで繋がれている、遅い歩みの一因であろうヒールの高いブーツ。

そんな妖艶な衣装に包まれた肢体は未成熟で、胸の膨らみも小ぶりだ。

おそらくはフィオナより少し年下だが、その年齢に似つかわしくない、他者を威圧する風格を漂わせている。

その禍々しさから逃れるように、付き添う騎士のほうへ視線を向けた瞬間、金髪姫は顔を強張らせた。

並の鍛え方では身動きすることも困難であろう、全身を隙間なく包む重鎧。その鎧に刻まれた紋章は——バードベルグ帝国のものだったのだ。

「貴様……帝国の間人か！」

フィオナ同様、いち早くそれに気づいたレーシアが、愛用の双剣を構えたまま、厳しく問い詰める。

現在、オリオ連盟は実質的に帝国の支配下にある。その関係で、指揮官として派遣されたのか。

その疑問に、水色髪の少女は長い髪をかき上げ、口元を歪めて答える。

「ふふっ、この連中が演習に出るといふから、たまには船旅もいいかと思つてついでにきたけど……こんな面白い獲物と出会えるなんて、ついでるわ」

「え、獲物……だと？」

「怪物にむぎむぎと卵を抱かされるなんて、どこの馬鹿な女たちかと思つたら……まさか、イセリアの女騎士たちだったなんて。牝豚によくお似合いの、いい姿……アハハハハッ！」

その妖しい紅色の瞳を輝かせ、まるで悲鳴のような甲高い笑い声をあげる少女。その姿は底知れぬ狂気を感じさせ、遠めに見ていたフィオナは再び込み上げてきた悪寒に身体を震わせる。

「き、貴様っ！ 今すぐ取り消せ!!」

だが、その笑いを投げかけられたツイントールの少女騎士は、臆することもなく、その侮辱に激昂し叫ぶ。

両手に愛用の双剣を構え、いつまでも高笑いを続ける少女へ勢いよく襲いかかる——が。

「——キーンッ！」

高らかに鳴り響く、金属音。振り下ろされた渾身の一撃は、割って入った

重装騎士の盾に阻まれてしまう。

「邪魔を——するなああっ！」

間髪いれず繰り出された、もう一方の剣。再び盾で受け止めようとした騎士の動きを一步先んじて、顔を覆い隠す兜を力強く突き飛ばす。

「っ!! お、女……」

弾き飛ばされた兜の下から現れたのは、凛と引き締まった雰囲気を感じさせる、ショートヘアの美しい顔立ち。

これだけの重鎧を身に着けているのだから、無骨な男に違いないと想像していた双剣の騎士は、予想外のことに一瞬だけ気を取られてしまう。

「……敵前で気を逸らすとは、貴様、素人か？ ……目障りだな」

「なっ!! うぐあっ!!」

その僅かな隙を突かれ、レーシアは重装騎士の分厚い盾で突き飛ばされ、勢いよく吹き飛ばされてしまう。

「く、くそ……この程度で！」

苦しげに顔を歪めながらも、双剣の騎士はすぐさま立ち上がる。再び剣を構えた彼女の前に——重装騎士の陰に身を隠していた水色髪の少女が、悠然と歩み出てきた。

「面白いわね、あなた。いいわ……せつかくだし、私が少し遊んであげる！」

愉悦を噛み殺した、冷たい声。同時に紅色の瞳が不気味に輝くのを見た金髪姫が、反射的に叫ぶ。

「レーシア、逃げて！ その子に近づいてはいけません!!」

「ノー・ママ！ イセリアの女騎士を

侮辱するような愚か者を、このまま生かしておけません!!」

底知れぬ不安を訴えるフィオナの声を振り払い、レーシアが血糊に塗れた甲板を蹴って駆け出した——刹那。

「止まれ」

「っ?! えっ……なっつ、あつ……」

紅色の瞳が、ルビーのごとく鮮やかな赤色の光を発した直後。見えない壁に突き当たったかのように、レーシアの身体が少女の目前で不自然に止まる。「ふふ。そこに這い蹲りなさい、牝豚。この私の前で、頭が高いわ」

「誰が——えっ……あつ……?!」

再び瞳が赤く輝き、同時に投げつけられた高圧的な命令。すぐ強気に言い返したツインテールの騎士だったが、声と裏腹に、言われるまま血で濡れ汚れた甲板に這い蹲ってしまう。

「な、何で?! か、身体が勝手に……どうして動かないんだっ?!」

歯を食い縛り身悶えるレーシア。だが、どれだけ必死に力を込めても、自分の身体が見えない糸で操られているかのごとく、まるで自由にならない。

「隊長!? やあつ、何、これ!?」

「こ、こんな場所で鎧を脱ぐなんて、駄目……手が勝手にいい!」

紅腫の少女が続けて辺りを見渡すのに合わせて、抵抗を続けていた他の女騎士たちも、戸惑いの声をあげながら続々と身体を自由を失っていく。

剣を投げ捨て、横たわる者。鎧を自らの手で脱ぎ捨てて、四つん這いにな

る者。その場に座り込み、未だ怪物の粘液が残っている秘部を見せつけるように、脚を大きく広げる者。

僅かに残った男の騎士たちは、金縛りにあつたように動きを止め、反撃もできずに次々斬り捨てられていく。

「これは……どういふこと……?」

不気味な少女の登場とともに一変した状況に、すでに魔力を使い果たしている金髪姫は、ただ呆然とその光景を見守ることしかできなかった。

(先ほどから感じていた、不気味な気配……これはすべて、あの子の力?)

底知れぬ恐怖を耐えるように唇を噛み締め、フィオナが優雅に立ち尽くす紅腫の少女を改めて見詰めた瞬間。

「ひい、わたしも身体が勝手にいい!」

「きゃっ、マ、マリイン!」

直後、隣に控えていた研究者が悲鳴をあげながら動き出し、姫君は荷物のごとく肩に抱え上げられてしまった。

羽織っていたマントも落ち、破れた薄布から丸出しになっている桃尻を突き出すような姿勢で、悠然と立つ紅腫の少女の下へ運ばれていく。

「わたしにも、何が何だっか!」

マリインが泣き顔で謝罪の言葉を叫んだ直後、姫君は為す術もなく甲板に投げ出された。

受け身も取れず背中を打ち、胸の豊かな双乳が痛いくらい大きく揺れる。

「こ、こんな……あぐっ、ヒイ!」

立ち上がろうとした刹那。白く大きな乳房の頂点を、妖しく輝く細いヒ

ルで踏みにじられた。

怪物から受けた陵辱の余韻で、未だ半勃ちになっていた乳首粒。ちようどその部分へ突き刺さるヒールによって、敏感な突起が乳房の中へ押し込まれる。

頭の芯が痺れるような激痛と快感に襲われ、思わず悲鳴をあげてしまう。

「ふふっ、まさかこんな場所であなたにお会いできるなんて思わなかった。

ご機嫌麗しゅう、フィオナ姫」

「あ、貴女は、いつたい……」

フィオナは苦痛に耐えつつ、自らを踏みつける水色髪の少女を見上げる。

「帝国皇帝ギユスターヴの末姫、メイベルローゼIIオーギュスタン」

「メイベルローゼ……っ?! その名前……まさか、あの魔眼姫!」

少女の口から放たれた名前は、フィオナにも聞き覚えがあるものだった。

漁色家で知られる皇帝ギユスターヴの、数多い子供たちのひとり。思うままに人の身体を操る悪魔のような目を用いて、イセリアの女騎士たちを次々とその手にかけている者がいる。

『魔眼姫』というおぞましい異名を与えられたその姫君が、今、自分の乳房を愉快そうに踏みにじる少女。

「なぜ、貴女が……帝国の姫君がオリオの船団に!」

「言っただけでしょう、暇潰しだと。私も驚いていますわ。いつかお会いしたいと思っていたフィオナ姫と、こんな形で出会えるなんて。ああ……生まれ初めて、神に感謝したい気分!」

大きく目を見開き、掠れた甲高い叫びをあげるその姿は、見ているだけで不安を煽られる狂気を感じさせる。

怯え震える唇を噛み締め、金髪姫は必死に自らを奮い立たせて叫ぶ。

「早くみんなを解放して! このような非道……許せません!」

「嫌よ。せっかく、こうして憧れのフィオナ姫とお会いできたんですもの。ゆっくり遊びたいわ。——こんな風に!」

メイベルローゼが、その小柄な身体を仰け反らせ、唇を歪めた直後。

「いやあつ、い、入れないでえ!」

「んごお、舐めるのお、らめえ……」

一斉にあがる、女騎士たちの苦しさや悔しさを噛み殺したような悲鳴。胸の痛みを耐えて振り返った少女姫の瞳に映ったのは、つい先ほど目の当たりにしたもの、に引けを取らない、おぞましい光景だった。

「なかなか上手だ、さすが怪物相手でも腰を振る、淫乱どもだな!」

ある者は四つん這いのまま口と膺壺を貫かれ、ある者は横たわる男の上で腰を振る。女騎士たちはひとりの例外もなく、猛り狂うオリオの兵士たちの慰みものにされていったのだ。

「ひぎいい、わ、私はこんなことしたくないの……身体が勝手に!」

女たちのほうから男の股間へ顔を埋め、腰を踊るようにくねらせて、肉棒を迎え入れる。だが、彼女たちが本心からしていることではないのは、悔しげ

に歪んだ表情を見れば一目瞭然だ。

「俺たちの子種で、怪物の卵を打ち壊してやるんだ。泣いて感謝しろ！」

乱暴な言葉を投げかけながら、猛るオラリオの兵士たちは、容赦なく女騎士たちへの陵辱を続けていく。

陵辱痕生々しい牝壺へ剛直を突き立て、容赦なく乱暴に腰を振る。

甲板に飛び散る粘液と、破瓜の残滓である赤い鮮血。触手で無理矢理貫かれた傷跡も癒えていないのに、容赦なく突き犯されているのだ。このままでは、そこが使い物にならなくなるまで壊されるのは、時間の問題だろう。

「おい、こいつは新品のようだぞ！」

「や、やだ、こないでください!!」

フィオナを魔眼姫の下へ運んだマリインもまた、殺到する男たちに捕まり、甲板に押し倒されていた。

「下品な乳を見せつけやがって！」

「これはわざとじゃあ……か、身体が動かないでつす……んんっ！」

引き締まったお腹に座った男が、捲かれたシャツから覗く双乳の谷間へ、そそり勃つ男根を押し込んでくる。

前後へ往復する動きに合わせて、その形を柔らかく変えながら扇情的に揺れ動く。研究一筋で色事に縁のなかつたセミシヨートの少女にとつて、他人にそこを触られるのは初めてのこと。

肌が粟立つ嫌悪と同時に、むず痒い不思議な感覚が、身体を火照らせる。

「むつちりとした、淫らな太腿だ。これも犯して欲しいんだろ！」

さらに別の男たちの手で、軽く折り曲げられた両脚の膝裏にも、焼けるように熱く滾った肉棒を押し込まれた。健康的な白い生足。そこまでも男自身を喜ばせる肉器官にさせられてしまう。動きに合わせて、ネチャリと塗り込まれるカウパー腺液と、腐臭漂う恥垢。込み上げてくる嘔吐感を抑えられずに開けてしまった口へ、いきなりガラス瓶の口が押し込まれた。

「ンごおっ!? これ……まっさかあ」

「しつかり飲んで、排卵しろ！ 優秀なオラリオの兵を産むためにな!!」

背筋を凍らせる不安が、その厳しい声で現実のものとなった。女の性的興奮を高め、排卵を誘発する。オラリオの兵が捕虜にした女に決まって使う、悪魔の薬。これを飲まれた女の妊娠率は、限りなく百に近づくと言う。

一瞬意識が遠のくほどの絶望に、身体力が抜けた——刹那。

ズチュウツッ! ズリブウツッ!

「ひんうっ! 中、やああ!! 抜いて……抜いてくださいさっさいいっ!」

脚の間に入り込んできた男が、カットされたジーンズとショーツを乱暴にずり下ろすや否や、硬い屹立を膣壺へ押し込んできたのだ。

脳天まで突き抜けた破瓜の激痛。だが、鼓動に合わせて全身に広がる甘い疼きに、すぐ塗り潰されてしまう。

膣壺は、初めての侵入者を歓迎するようにきつく収縮し、柔らかく押し潰れた乳房も茹だるように火照る。

頂点を飾る小指の先ほどの突起は痛々しく膨れていて、男の指で強く弾かれる度、全身を走る性感電流。吐き気を催す陵辱に悦んでしまっている自分自身の反応に何より胸が痛む。

「く、薬が効いてえ……やあつ、は、排卵しちゃいまっすう！」

感度が高まっているせいか、子宮が絶え間なく蠢き、間もなく注ぎ込まれる男の体液を受け止める準備を始めているのがわかる。

望まぬ破瓜を悲しむ間もなく込み上げる、妊娠の恐怖。眼鏡の下で見開かれた瞳に、大粒の涙が浮かぶ。

「初めてだというのに、見ろ、もうオマンコの奥までグチュグチュだぞ！」

「淫乱め! 誇り高いオラリオの男の精で、性根を叩き直してやる！」

女研究者を煽るように、取り囲む男たちが叫んだ直後。胸で、太腿で、そして膣内で。赤黒い屹立がビクンと力強く脈打つのが伝わってきた。

「はひいつ、熱いつ! 気持ち悪いのに、気持ちよくなる……やあ、に、妊娠したくないのに、勝手に締めちゃう！」

力強いピストン運動に合わせて、肌や膣粘膜が茹だるような熱感に包まれていく。おぞましい臭気を放つ男根の淫熱で、秘薬の効果がいつそう高まってきている。立て続けに襲ってくる小さな絶頂感に翻弄され、甲高い嬌声をあげた——刹那。

「さあ、出すぞ! 新品の子宮を、一発で孕ませてやる！」

ドブウツッ、ビュブルルッ!

「きゃふあつ! ひいつ、せ、精液、子宮に精液くるの、だつめええ！」

容赦ない叫びに合わせて、子宮内粘膜を熱い液体が打ち叩く。

子種を注ぎ込まれた。絶望的な現実を認識すると同時に、胸や太腿を犯していた肉棒も、同時に射精を始める。

「ひふあああつ! こりええ……せ、精液い、熱いのイ——きゅう！」

子宮や肌に塗り込まれる、ドロリと熱い牡液。白濁で染められた肌がうつとりするくらい心地よく疼き、子宮が子種を残さず溜め込もうと、無意識のうちにも収縮する。膣壺の擦撃も止まらずに、さらなる子種を求めて、未だ萎えない肉幹を舐めしやぶっていた。

「はひい、せ、せーしい……お腹いっぱい、に、妊娠でイクユウ……」

「初めての種付けでイクとは、とんだ牝豚だ。さあ、まだ終わらんぞ!!」

「種え……いやあつ! も、もつと妊娠しちゃいまつす! ら、らめえ！」

「マリイン……皆さん……ひ、ひどい」

一切の抵抗を許されず、獣のように襲いかかる男たちから、子を宿すための道具として扱われる女たち。それを為す術もなく見守るしかない少女は、涙声で泣きもらす。

「クククッ! 何度見ても楽しい見世物。特に、この悲鳴が最高よ！」

少し上擦った声に反応して視線を向けると、メイベルローゼは頬をうつとりと上気させ、目前の惨劇を心から楽

しんでいる様子だった。

自らの手を薄い胸元へ伸ばし、そこをギリギリ覆い隠しているボンテージの隙間に差し入れ、軽く弄んでいるものが、卑劣な……恥を知りなさい!!」

「恥を知れえ？ あなたは少し身の程を知るといいわ、牝豚姫！」
うっとりした微笑を一瞬で怒りに満ちた狂気の表情へ変えたメイベルローゼが、少女姫の乳房を踏みこむ足へ体重をかけてきた。

ズブズブと音が聞こえそうな勢いで細いヒールが乳房へ埋まり、敏感な肉粒に耐えたい激痛が走る。

「はぎいっ、うぐっ、くう……」
容赦ない陵辱を受ける女騎士たちへ、これ以上負担をかけたくない。その一心で込み上げる悲鳴を辛うじて飲み込んで耐えるが、目元に浮かぶ大粒の涙までは抑えられない。

「悲鳴を耐えているの？ さすが、王位が約束されている大物は違うわ」
「はあはあ……何を言ってる……」

「いいわね、あなたは。富も名声もそして、こんなに男好きのする身体まで……すべてを持っていて！」
まるでその豊かな膨らみに憎しみでもあるような勢いで、紅眼の姫君は足を小刻みに動かし、楯に潰れた乳房を踏みつけてくる。

「ヒギッ！ ひいつ、ああっ！ む、胸え……はんうっ、ああっ！」
「わからないでしょう？ あなたみた

いにお恵まれた人間には。身体だけでプタに取り入った女から産まれた、この私の苦しみなんて!!」
「プタ……？ じ、実の父親を……」
「ふんっ、利用価値もない私に、あぶたが父親らしいことをしてくれた憶えはないわ。イーバを専属の護衛としてつけてくれたことくらいよ」
そこで一度言葉を止めた水色髪の末姫は、口元にサデイスティックな笑みを浮かべて、顔を上げる。

「この魔眼で、小憎らしいイセリアの牝を弄ぶ。それだけを楽しみに生きてきたけど……嬉しいわ。あのフィオナ姫を、こうして玩具にできるなんて」
瞳に赤い輝きを浮かべ、辺りを見渡し高笑うメイベルローゼ。そこから感じる禍々しい魔力と底知れぬ狂気。

苦痛と恐怖に背筋を震わせながら、フィオナは必死に策を練る。
（他者の肉体を思うままに操る魔眼。他人を踏みこむことに何の躊躇いも持たずに……なんて、恐ろしい子なの）
だが、これだけの大人数を思うままに操れる恐ろしい力の持ち主が、どうして帝国内で冷遇されているのか。
（この魔眼の力に、何か致命的な欠点があるのかもしれない）

人数制限か、それとも何らかの条件を満たせば抵抗できるのか。彼女が帝国内で重用されていない以上、絶対にこれを破る方法があるはずだ。
女騎士たちが身体の自由を取り戻しさえすれば、逆転も可能。だが、先ほ

どの支援魔法で魔力を使い果たした今、弱点を探るのは困難なことだ。
「ああ、愉快！ さあ、もつと苦しもうに鳴いて、私を楽しませて!!」
魔眼の末姫は黒いマントを翻し、愉悅を噛み殺したような笑いをあけて、再び金髪の少女姫の巨乳を踏み潰そうとした時だった。

「やあつ、やめりよお……ひ、姫様からあ……離れえ……んあああつ！」
途切れ途切れで呂律も回らない、それでいて強い意志を感じさせる叫び。声の主は——大柄な男に、幼子が用を足すような姿勢で抱え上げられて辱めを受ける、レーシアだった。

「ゲ、ゲスな化け物姫めえ！ ひくう、か、身体が動けばあつ！」
他の女騎士たち同様、レーシアも抱える男の太い肉幹によつて、怪物に純潔を散らされた肉穴を貫かれていた。

その赤黒い竿肌を伝って垂れる、破瓜の残滓の鮮血と粘液。甘酸っぱいにおいの漂う蜜液も混ざっているのは、彼女も秘薬を飲まれたからだろう。
「ふふっ、イセリアの牝騎士たちとは随分遊んできたけど、あなたはなかなかイキがよくて……生意気ね。一国の姫に対する礼儀も知らないの？」

「ふじゃけるにやあ……こんな、ば、化け物染みた力で人を弄んれえ……最低の卑怯者お……こ、このお！」
唯一自由になる口を必死に動かし、帝国姫を罵倒するレーシア。そんな抵抗を嘲笑うかのように、彼女を抱える

男の動きは激しさを増していく。
ジュブウツ、チュプリユウツ！
騎士にしては小柄な身体が、男の太い手でシェイカーのごとく揺すられる。響きもれる、くぐもった水音。太い男根が赤く充血した蜜貝を卑猥に捲り、押し込みながら出入りするの、目を背けたくなる痛ましい光景。

「いやあつ、やめて！ もう、許してあげてください！」
フィオナの悲痛な叫びも虚しく、雄々しい男根による陵辱は続く。
「んほおつ、あああ！ こんな、こんな奴らに……ううっ！」
飲まされた葉のせいだろう。レーシアの声に混ざる吐息は、糖蜜のような甘ったるさ。肉幹が深く刺さる度に背筋を仰け反らせ、一瞬、頬が快感を表すようにうっとりとして緩む。

端が裂けそうなくらい押し広げられた割れ目は肉棒に張りつき、心地よさそうに舐めしやぶっていた。
「どうしてえ……身体動かない……んくうっ、こんなあ、やああんっ！」
「あら、オマンコがこんなにいやらしくチンポをしやぶっているのは、あなたの意志よ。人のせいじゃないで」
「にやあつ、ひいつ、んぐっ、これも薬う……お、お薬れえ……あん！」
水色髪の姫へ言い返す声も、込み上げてくる電流のような快感で上擦る。

ゴリゴリと膣壁をえぐりながら動く、雄々しい男根。それに合わせて、膣壺が震えながら勝手に収縮するのが自分

309

でもわかる。

もつと強く擦って欲しいと甘えるような反応が、薬によるものだとわかっていても、自分自身で許せない。

「くしょお……こんなにやあ……身体さえ動けば……お前らなんてすぐう！」

悔しさをこらえ、血が滲むくらい唇を噛み締めてみても、膣穴の甘美な痺れと痙攣は止まらなかった。

「さあ、自分より弱い男の子種で、卵で膨れた子宮を、孕まされるのよ！」

「やあつ、しよ、しよんにやあ……はらん！ ひぎゅうつ、あああつ！」

「ドプリウツ！ ドププププツツ！」

「くうっ、くしょおおつ……ほおう、あああつ！ あちゅう、ひんんっ！」

ツインテールを揺らしながらの悔しげな絶叫とともに、膣内で男根が力強く震える。迸る白濁の勢いは、抱かされた怪物の卵を叩き壊すような強さ。

頭の芯まで衝撃が響いてきて、その度に意識がストンと闇に落ちる。

腹の底からゾクゾクと込み上げてくる、暗い快感。子宮に臭液が染み込む感覚に、吐き気とともに悦びを憶えてしまうのが、悔しくて仕方がない。

「こんなにやあ……せ、精液でイクなんて……こんな奴の子供、絶対に孕みたくないのに……」

甘く蕩けた声で必死に屈辱を訴えても、絶頂の余韻はいつまでも引かず、今にも意識が途切れてしまいそうだ。

耐えきれず、目をトロンと閉じかけた——その刹那。

「アハハッ、まだよ！ まだ寝かせてなんてやらない!! その生意気すぎる口を、ついでに洗い清めてあげる!!」

狂気の笑いととともに、メイベルローゼの魔眼が再び赤く輝く。直後、射精を受け止めて脱力したレーシアの身体が甲板に投げ転がされ、それを取り囲むように手隙の兵士が集まってきた。

「にやあつ、にやにをお……」

魔眼の力だろ。まるで磔にでもされたように、両手両脚を大きく広げた姿勢を自ら取らされる。抵抗しようにも相変わらず身体は自由は利かず、おまけに絶頂の余韻で、言葉すらまともに発せない有様。

無力さに唇を震わせた——直後。

「ごぼおっ?! んぐつ、おえつ、お、おひつこおっ! んごおっ!」

取り囲む男たちの肉棒から一斉に放たれる、アンモニア臭漂う汚水。それが強制的に開かされたツインテールの騎士の口へ注ぎ込まれていく。

「ごふつ、くう、やめりよお……こんな……飲みたくない……げほお!」

涙目で苦しうに呻くレーシアは、口に溜まる薄黄色の液体を、必死に吐き出そうと試みる。

「アハッ、駄目、そんな勿体ないことは許さないわ! 全部飲みなさい!!」

そんなささやかな抵抗も、強く輝く狂気の姫の魔眼によって遮られる。

咽と口が勝手に動き、口に溜まる小水を息つく間もなく飲まされていく。

「おごおつ、げぼ、おおお!!」

双剣の騎士は何ひとつ抵抗を許されず、男たちの小便器にされてしまう。

「白目を剥いたまま全身を痙攣させ、今にも窒息してしまいそうな状態だ。」

「キャハハハハ!! どう、便器にされる気分は? 生意気な口も、少しは綺麗になったかしらねえ」

「レーシア! は、放して! お願います、メイベルローゼ姫!」

愉悦を噛み殺したように笑うメイベルローゼへ、金髪姫は必死に訴える。

「脳裏に浮かぶのは、メイズの中で自分を庇い、オークに罵られた槍騎士の姿。彼女の愛弟子である少女まで、同じような目に遭わせてしまった。その罪悪感に潰されそうになりながら、瞳に大粒の涙を浮かべて訴える。」

「ふん、無理を言わないで欲しいわ、フィオナ姫。こんなに盛りのついた男たちを、今更どう止めると?」

必死に訴える姿を嘲笑うように、魔眼姫が白々しく返してくる。凶行を続ける兵士たちの主であり、何より強制的に他者の身体を操る力を持つ彼女ならば、それを命じるのは容易いはず。

「こうして、わたしが嘆く姿を楽しんでるの……? 何という……」

その冷酷でサディスティックなくらい情欲に寒気すら感じるながら、金髪の姫君は必死に訴え続ける。

「わ、わたくしは、どうなってもかまいません! でずから……」

「ひ、姫え……らあめ……ごほおつ!」

「いけまつせん! そんなあ……」

必死に訴えたフィオナの叫びに、未だ小水責めや肉棒責めに苦しんでいるレーシアやマリイン、そして他の女騎士たちも一斉に制止の声をあげる。

「こんな辱めにあつても、自分を庇おうとしてくれている。そんな忠誠心の持ち主たちを、何としても救いたい。」

「何でもしますから……お願いです」

「ふうん、ということとは……覚悟ができていいのかしら?」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>